産経新聞

平成２５年（2013年）１０月１０日　木曜日　（九州・山口）　24

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

福銀に見る若き黒川紀章の異才とは…

建築とアートの違いは何でしょうか？　「建築は一人ではできない」「社会性を問われる」などとよく言われますが、発注者なくして存在しないのも違いの一つでしょう。

建築家の名があまり知られていない日本でも黒川紀章氏は別格だと思います。昭和9年生まれで6年前の平成19年に亡くなりました。晩年は東京都知事選出馬でも話題になりましたね。

彼がまだ若いころに手がけた福岡銀行本店は、屋根の架かった公共の広場を抱き、その広さが敷地の約3分の1にも及ぶ大胆な構成を持っています。一つの建築物が、これほど思い切りのよい都市空間を内包する例は多くありません。灰色の石が貼られた外壁は、その大胆な空間構成を落ち着いた佇まいに包み込み、40年近く経った今も変わらぬ品格を保っています。

その広場の真下に、素晴らしい音楽ホールがあることは意外と知られていないようです。地下深くに掘られ、最も低い場所であるステージ部分は地下4階に相当します。地下水位の高い天神でこれほど深く掘る工事は、非常に困難だったはずです。

ホールは柱のない大空間を必要としますが、ここの場合、真上は広場。ホールの屋根に上部の建物の重量がかからないという理に適った構造になっているのです。

また、ホールの壁には松の木のブロックが波打つように積み上げられており、地上部分とは対照的に曲面を多用した有機的な空間となっています。その後の黒川氏の作品は大味なものも多いのですが、この建物は手すりなど細かな部分にも素晴らしい意匠が施されています。彼の傑作の一つだと思います。

黒川氏は設計当時、まだ30歳代でした。そんな若手建築家に銀行の「顔」である本店の設計を任せたという福銀の決断に驚きます。さらに銀行業務には「使えない」広場を正面に大きく設け、公共空間を街に提供するという提案を受け入れたことも驚きです。

市民が芸術に触れる場としてホールを持っている銀行本店というのも珍しいですよね。地域文化に貢献するという企業の姿勢を「かたち」で表した稀少な例と言えるでしょう。黒川氏のメモによると、当時の福銀頭取、蟻川五二郎氏は「大変な芸術の理解者で、自らもバイオリンを弾かれる方であった」そうです。

民間の建物なのですから、利益第一で機能だけを充足した建物をつくる手もあったことでしょう。にもかかわらず、敷地や機能に「閉じる」ことなく、公に供し、都市の文化を育てるという思想に基づいた建物が建ったことは、福岡市民の誇りとすべきではないでしょうか。

確かに40年経った今とはずいぶん事情が違います。企業の説明責任は当時よりずっと重くなり、大胆な決断を下すのは難しくなっています。また当時は建築士数百人を抱える組織事務所もなかったため、個人の建築家が腕をふるいやすい時代だったとも言えます。

でも、一つ一つの建物と、それが連続する街並みは、その街の文化度を一目で表す存在なのです。建築は総合芸術と言われます。くっきりとしたビジョンと公共に寄与する姿勢が映し出された建物が、今後も日本の都市で創られていってほしいですね。この建物の見どころは10月16日から11月15日まで福岡銀行赤坂門支店で展示されます。ぜひご覧ください。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主催。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

ロンドンにみる都市戦略のしたたかさとは…

私たち建築家はどこを旅しても、見るべきものに事欠きません。建築がないところなどほとんどないからです。近現代建築であっても、歴史的建造物であっても、また土着の名もなき住宅であっても、それが生まれた社会背景があり、その地域で長年使われてきた建材や工法など学ぶことは尽きません。ですからせっかくの休暇で旅行しても休暇にならないほどです。それでも学生時代からの憧れの建物の前にした時の感動はいくつになっても変わりません。

9月に訪れたロンドンは、何度も訪ねた街だということもあり、特に何かを見ようと思っていたわけではありませんでした。ところがそこで見せつけられたのは、建物単体というよりも、建築を巻き込んだ都市戦略のしたたかさでした。では、それを痛感させられた3つのプロジェクトをご紹介しましょう。

1つ目は、ロンドンの建築を紹介するツアーイベント「オープンハウス」です。9月後半の土日2日間しか行われませんが、この20年間で対象は20カ所から800カ所に増え、ロンドンでもっとも集客力のあるイベントの一つに成長しました。ニューヨークなど世界のいくつかの都市も、ロンドンに習って建築紹介ツアーを始めています。

すでにロンドンでは、一般の建物だけではなく、インフラ施設や首相官邸（ダウニング街10番地）にまで広がっています。ロンドン市民はもちろん、海外からのビジターも幅広い世代が参加してツアー中の質問も活発です。去年まで参加者だった人が今年はガイドになっていることもあります。イベント規模が大きくなりすぎて統制が取れているとは言い難いものの、建築という切り口だけで、これほど大きなイベントが成立することには驚きを禁じ得ません。

2つ目は「タウンホール」。かつての市役所を改装し、その名を冠したホテルです。1910年代の古典的な空間に、現代的デザインをダイナミックに施しており、それほどよいロケーションでもないのに大人気。クラシックとモダンが融合しているだけではありません。かつて執務室だったり、議事堂だった場所を、当時の装飾を残しつつモダンな客室に活用している様は新鮮であり、ユーモラスでさえあります。ちなみにこのホテルのオーナーはシンガーポールの企業だとか…。歴史を海外の投資で甦らせたプロジェクトだと言えるでしょう。

さて3つ目は仮設建物の話をしましょう。ロンドン中心部のケンジントン公園の一角に「サーペンタイン・ギャラリー」という小さな美術館があり、その脇に毎年夏季限定で仮設のパビリオンが建てられます。美術館に来る人たちが憩う、ごく小さな半屋外の場なのですが、世界中から選ばれた優れた建築家に設計を託しているのです。規模からするとそれほど高価な建物ではないと思われますが、ロンドン市民だけでなく世界の人々が「今年は誰が選ばれるのか」「どんな建物が建つのか」と注目し、毎年多くの人々で賑わうのです。ちなみに過去14回のうち3回は日本人建築家が設計しました。

ご紹介したプロジェクトはどれも多額の税金や資金を投じたものでもありません。知恵を絞って過去の遺産を生かし、世界の耳目を集め、人を呼び込む場を作っているのです。日本の都市にとっても参考になる「したたかさ」ではないでしょうか。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主催。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞

平成２６年（2014年）１月２３日　木曜日　（九州・山口）　26

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

アクロス福岡の驚嘆の設計思想とは…

少し前まではあまり知られていなかったエコやサステナブルという言葉も今や当たり前の概念であり、建築のコンペでも必須項目となりました。

これらの概念をもっともシンボリックに、目に見える形で実現した建物が、アクロス福岡だと言えるでしょう。1995年に福岡市の中心部に完成した巨大な階段状の建物です。

その緑で覆われた姿は、福岡市民にとっては見慣れた存在になっていますが、世界的にも珍しい大胆な建築なのです。日中は樹木が生い茂る大階段を自由に散歩することができ、南側の天神中央公園とともに、都心の貴重な緑地となっています。

施設内に一歩足を踏み入れると大きなアトリウムがあり、採光窓から木漏れ日が柔らかく降り注ぎます。そしてこのアトリウムを囲むようにオフィスやシンフォニーホール、商業施設などが配置されています。

元々ここには福岡県庁がありました。その跡地に複合用途建物を建てることになり、事業コンペで5つのグループが競い、選ばれたのが現在の建物の原案です。日本設計と竹中工務店の設計チームには、米国在住のアルゼンチン人建築家、エミリオ・アンバーツ氏が加わりました。

アンバーツ氏は、当時から非常にユニークな建築家として知られ、彫刻家のような造形力を発揮して、緑と建築を融合させるデザインを得意としていました。綿密な計算とともに取り組む科学的なエコロジーというより、もっと概念的で芸術的な建築家だと私はとらえています。

四半世紀前に、すでに自然と一体となる建築をいくつも提案していたのは先見の明だと思います。コンペの時点では、今の緑地に加え、階段の中腹から公園に向かって流れ落ちる滝も描かれていました。

建物の北と東西の三面はガラスで覆われていて、クールな印象を与えます、オフィス街にマッチした表情だとも言えるでしょう。これと対照的に「ステップガーデン」と呼ばれる南面の緑の階段は、20年近い歳月を経て、樹木が成長し、森のようになりました。完成当初は76種3万本が植えられたそうですが、現在、種類は2倍近くに増え、5万本に達するそうです。鳥や風が種を運んだのでしょう。

中段付近には屋外劇場も設置されています。この緑化により、建物内部の冷房負荷が低減されただけではありません。夜間は放射冷却効果により、冷やされた空気が公園に吹き降り、昼間には植物の蒸発散作用が熱を奪い、周辺の温度上昇を抑制しているそうです。

ところで、アクロス福岡の天神中央公園を挟んで南側に済生会福岡総合病院があります。ある時、私は友人のお見舞いでこの病院を訪れました。友人は北向きの病室に入院していたので、普通なら日当たりがよくないはずなのですが、一歩足を踏み入れた途端、目の前に広がる景色に驚嘆しました。さまざまな樹木が日光を浴びて輝きながら、天神中央公園からステップガーデン最上部の地上60㍍まで登り上がっていくように見えたからです。人工とは思えないほどダイナミックな美しさ…。きっとたくさんの入院患者が、この景色に癒されたに違いありません。

建物はそれ単体で、機能や用途を満足させる必要があるのは当然ですが、街並みを創り、周辺環境を変える大きな力も持っています。その意味で、建物は公的な存在であり、社会資産であるべきなのです。アクロス福岡はその意味で、チョコチョコとした屋上緑化や壁面緑化とは次元の違う優れた建築だと言えるでしょう。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

村野藤吾が建物に宿した「きれい寂び」の精神とは…

映画化で話題となっている小説「永遠の0」の著者、百田尚樹氏のベストセラー小説に「海賊と呼ばれた男」があります。宗像で生まれ、門司で出光商会（現出光興産）を創業した出光佐三氏（1885～1981）をモデルにした小説で、揺るぎない信念を持った男の闘う姿が描かれています。

その出光氏の晩年の公邸となった松寿荘（東京都港区南麻布）を設計したのが、建築家、村野藤吾氏（1891～1984）でした。二人はほぼ同世代です。唐津で生まれた村野氏は北九州に移り住み、小倉工業高校機械科を卒業後、八幡製鉄所に入社しました。従軍後、早稲田大学電気工学科に入学し、さらに建築学科に移り、27歳でようやく卒業しました。迷いつつたどり着いた建築への思いは人一倍深かったことでしょう。その後大阪の設計事務所で研鑽を積み、独立しました。

作品は、広島の世界平和記念聖堂、そごう大阪本店、宇部市渡辺翁記念会館、日比谷日生劇場―など、公共施設からホテル、茶室まで多岐にわたります。ちなみに早稲田大学建築学科の最優秀卒業設計作品に贈られるのは「村野賞」です。

村野氏は出光興産の建物をいくつも設計しています。福岡・天神にあったガソリンスタンドは、社屋に加え美術館まで併設した文化的建物でしたが、残念ながら壊されてしまいました。松寿荘も今はありません。

村野氏は同じスタイルを繰り返さないから「わかりにくい建築家」かもしれません。でも私は「99％関係者の話を聞き、残りの1％から出発する。それでも村野は残る」という彼の言葉が好きです。

大きな資本が建築家に託されるのだから、大変な責任があり、発注者ら関係者の話を謙虚に聞き、取り入れなければならない。その上で他の誰でもない自らのデザインを育て広げていく。そうして「村野に頼んだ発注者に確実に応えるのだ」というニュアンスだと思います。謙虚という言葉を度々用いる責任感の強さと、形式にとらわれない自由な作風を持った希有な建築家でした。作家の井上靖氏は「『きれい寂び』を身につけた人だ」と評しています。

北九州市の八幡図書館と八幡市民会館も、村野氏の設計です。図書館の外観には煉瓦タイルを使って楽しい幾何学模様が描かれています。タイルには八幡製鉄所の鉱滓（スラグ）が混ぜられ、その色むらが独自の表情を醸し出しています。市民会館はもっと大きな建物ですが、重々しくなりがちな各ボリュームがスリットで切り離されているおかげで伸び伸びとして軽やかな印象を与えます。90歳近くになった晩年でさえ「すべての図面に目を通している」と明言したほどの人です。自らと縁の深い八幡の街に建つ市民会館や図書館に、どれほどのエネルギーを注いだことでしょう。

残念ながら、これら二つとも、耐震化や補修にかかる費用から取り壊しが検討されています。すべてのものと同様に建物も老いていき、取り巻く環境や制度も変わります。ですが、ストック型社会を目指す日本は、既存建築について「撤去か、保存か」という二者択一ではなく、補修・改修の内容に幅を持たせたメニューを作り、多様な知恵を導入して多角的に検討すべきではないでしょうか。もちろん行政だけが責任を負うのでなく、まちづくりの一環として市民や専門家を巻き込んだ仕組み作りも重要です。

建築とは、建物というハードウェアだけではなく、そこに宿る精神までも包含するのです。「海賊と呼ばれた男」がベストセラーになったのは、多くの読者がそこに描かれた主人公たちの精神に感動したからでしょう。有名な建築も、設計した人の精神が投影されているからこそ多くの人を感動させるのだと思います。

ですが、文字と違って建物は放っておけば朽ちていきます。それを次々に取り壊してしまえば、そこに宿った精神までも失われていくことになります。本と違って一度壊した建物に「復刻版」はありません。八幡図書館と八幡市民会館も、地元協議会が保存を希望しているのは、未来のために過去の精神を留めておきたいという思いの現れではないでしょうか。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞

平成２６年（2014年）３月２０日　木曜日　（九州・山口）　26

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

魅力的な川で都市景観をより豊かに…

英ロンドンのテムズ川、仏パリのセーヌ川、米ニューヨークのハドソン川―。世界中の大都市には「街の顔」といえる大きな川が流れています。これほどの大都市でなくとも、川は水運、取水―など、都市の発展に欠かせない重要な役割を常に担ってきました。

そして近代の土木技術の発達により、治水が進む中、川が持つ都市のアメニティや観光的な側面に光が当たるようになりました。都市景観と川の関係について面白い例をいくつか引いてみましょう。

米テキサス州の町、サンアントニオは、リバーウォークで世界的に有名です。川沿いは花壇や樹木が美しく手入れされ、素敵なレストランやボートもあり、楽しく散策できます。

スペイン北部の都市、ビルバオは、米国人建築家のフランク・O・ゲーリー氏設計のグッケンハイム美術館の分館が1997年に完成し、一躍有名になりました。ユニークな造形を持つ美術館の背後にはネルビオン川が流れ、建物と川が一体となった景観が形成されています。この川には、スペインが生んだ構造家、サンティアゴ・カラトラバ氏設計の素晴らしく美しい歩道橋も架かっており、まさに川が街の主役となった感があります。

韓国・ソウルの清渓川は元々、下水の役割を果たしていた小さな川でした。高度成長期に暗渠となり、その上に高速道路が建設されました。その老朽化に伴い、市当局は補修・補強工事の代わりに撤去を決め、2003年からわずか2年間で親水空間を整備しました。長さ6キロにわたり、川辺散策を楽しくする様々なデザインが施され、歴史を学べる仕掛けもあります。パブリックアートも数多く設置され、さまざまな市民イベントで賑わっています。

東京は1964年の東京五輪に向け、都市インフラを急速に整備しました。その際、川の上に首都高速道路が建設された箇所が数多くあります。その一つが日本橋です。「こんなシンボリックな橋の上を高速道路の高架橋が覆っているのはよくない」と高速道路の移設や地下化が論議されたのは2006年です。その後しばらく話題にもなりませんでしたが、2020年の東京五輪に向けて再び都市整備をめぐる論議が活発化する中、日本橋の行方がどうなるのか、興味深いところです。

さて、福岡市の中心を流れる那珂川はどうでしょうか。福岡の都心を博多部と福岡部に二分する歴史的にも意味深い川です。その東側には歓楽街・中洲があり、川面にネオンが映り込む夜景は全国的に有名です。

とはいえ、残念ながら、都市デザインの観点から福岡の湾岸・河川などの水辺空間はかねて「弱い」と言われてきました。これは市民や来訪者が水に親しめる魅力的な空間が少ないことを意味します。那珂川も護岸を整備したり、「福博みなとであい船」が運航したり―と工夫されてきたとはいえ、未だに観光スポットとまでは言えません。川の両岸に並ぶ建物も川に背を向けて建っているような印象を持ちます。

実はポテンシャルは十分あるのです。那珂川西岸にはクラシックな佇まいの旧福岡県公会堂貴賓館を抱く天神中央公園があり、素晴らしい音響を誇る福岡シンフォニーホールを持つアクロス福岡もあります。東岸にも川の眺めを楽しめる清流公園があり、その背後には劇場を持つ複合施設、キャナルシティが控えています。自然と文化が両岸に存在しているのは強みだと言えます。

商業の街、福岡の特徴の一つは、博多駅と天神という二つの拠点があることです。それぞれが特徴あるエリアとして発展することが期待される一方で、二つをつなぐ工夫も都市戦略上重要だと言えます。その意味でも、那珂川をその一端を担う重要な存在だと位置づけ、より魅力的に整備していくべきでしょう。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞
平成２６年（2014年）５月８日　木曜日　（九州・山口）　22

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

集合住宅に新風を吹き込んだ「ネクサスワールド」

マンション、共同住宅、アパート、集合住宅―。複数の住戸が集まった建物には、いろいろな呼び名があります。建築基準法ではいずれも「共同住宅」ですが、私たち建築家は集合住宅と言います。本来、マンションは「大邸宅」という意味ですから、海外で「うちの家はマンションです」と言うのは、ちょっと控えた方がよいでしょうね。

米ニューヨークで大学院を修了した夏のことです。引っ越すことになったのですが、まだ就職も決まっておらず、時間がたっぷりあったので、マンハッタンのアパートメントをたくさん見て回りました。

日本では考えられないような住まいを見ることができたのは、とてもよい経験でした。古いものだと築100年近くの物件もあり、そういう建物は物件情報に「歴史的建物」と記されており、とても価値があります。リビングルームの奥にある中庭を通らないとベッドルームに行けないようなユニークな間取りの物件もありました。おそらく改装を繰り返したため、そうなったのだと思います。

もっとも驚いたのは「アイスハウス」という建物でした。文字通り、かつて氷用の倉庫だった建物を改造した物件でした。天井高が5メートル以上もあり、バスケットコートが入りそうな広々とした空間の一部に、中二階が作られ、そこがベッドルームになっていました。元々、氷を保管していたので断熱性が重視されたのでしょう。窓は1メートル角くらいの小さなものが2つほどしかありませんでした。

このように、既存の建物を住宅に利用する工夫や知恵には、感心させられると同時に新鮮な驚きがありました。「もしここを選ぶならどんな風に住みこなすだろう」と想像するだけでも楽しくわくわくしました。といっても世界経済の中心地であるニューヨークです。そのユニークな空間の背後には、投資効率がシビアに計算されていたに違いありません。

その後、私はプロの建築家となり、多くの集合住宅を設計してきましたが、ニューヨークでの貴重な経験がとても役に立ちました。いわゆる「ＬＤＫ」といった無型的な間取りにとらわれない視点を持つことができるようになったからです。

ところで、福岡を来訪する建築家たちが、必ずと言ってよいほど見学したがる集合住宅群があることをご存知でしょうか。福岡市東区香椎浜にある「ネクサスワールド」です。いくつもの棟がありますが、それぞれをさまざまな国の建築家たちが設計しています。

完成は1991年ですから、計画はバブルの最盛期に立てられたことになります。開発者である福岡地所は「新しい風を新しい開発地に吹き込みたい」と考えたのでしょう。日本を代表する建築家、磯崎新氏の推薦により、オランダのレム・コールハース氏、米国のスティーブン・ホール氏、フランスのクリスチャン・ド・ポルツァンパルク氏らが選ばれました。

どれも、外観、内部空間ともに日本の「マンション」の常識を覆すような建物です。中でも素晴らしいと思ったのはホール氏によるメゾネット住宅です。立体的に住戸が組み合わされているだけでなく、室内の扉にユニークな工夫が凝らされており、開けると二つの部屋が広々とした一つの空間になるものもありました。

コールハース氏設計の、外部の吹き抜けを内包する三層の住宅が連続する形式も驚きを禁じ得ません。独立住戸が並んでいると言えば分かりやすいでしょうか。外壁は窓がない特徴ある黒の壁で囲われています。

両氏ともに現在は、世界的に著名な建築家になりましたが、四半世紀前はまだそれほど大きなプロジェクトを完成させていませんでした。彼らを起用したのは、大変勇気のいる決断だったのではないかと思います。

住宅は、美術館や図書館などの公共建築とは違って、その国の文化や風土、生活習慣などを色濃く映し出す建物だと言えます。ですから戦後、日本人の生活様式が大きく変化する中で、住宅も変貌を遂げてきたのです。

現在は単身世帯が非常に増えており、少子・高齢化も進んでいます。住まいのあり方はこれからも変わっていくでしょう。そういう意味でも、ネクサスワールドは住空間のあり方に大きな一石を投じた歴史的プロジェクトだと言えると思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

美的感性を磨く建築教育を…

理屈抜きに「すごい」と思わせる造形力を持った建築家がいます。その一人はイラク出身で英国を拠点とするザハ・ハディッド氏でしょう。東京の新国立競技場のコンペで、複雑な曲面を多用した案が最優秀に選ばれました。彼女が卒業した英ロンドンの建築学校、ＡＡスクールは、理論的かつ前衛的な教育で知られ、数多くの有名な建築家を輩出しています。

福岡在住の葉祥栄氏も、新しい構造にチャレンジしつつ優れた造形力を発揮してきました。日本では珍しいタイプの建築家と言えるでしょう。葉氏は熊本県出身で慶応義塾大経済学部を卒業後、米国留学してデザインを学び、帰国後の１９７０年に葉デザイン事務所を設立しました。

代表作品には、熊本県の「小国町民体育館」、三角港フェリーターミナル「海のピラミッド」などがあります。前者は、木材を構造にドーム状の大空間を作り出すという当時としては珍しい造形です。後者は、円錐に斜降を巻き付け、貝を思わせる不思議な形です。初期作品である「インゴット」というコーヒーショップは残念なことに現存しませんが、多角形のガラス面で空間を構成した大変斬新な作品でした。

福岡市にある作品としては福岡市営地下鉄七隈線天神南駅があります。天神を南北に貫く渡辺通りと国体道路の交差点付近は、ビルや看板が密集して歩行者も多いだけに、ここに点在する地上出入り口が主張しすぎると景観に雑多な印象を与えかねません。

そこで葉氏が導き出した解答は、真っ白に塗った鉄パイプを立体的に斜めに配置し、全体をガラスで覆うデザインでした。透明性と造形の面白さは主張しすぎることなく、街の景観にフィットします。夜間は照明でくっきりと浮かび上がり、新鮮な驚きを与えます。

もう一つ、私の好きな葉氏の作品は、糸島市の久保田クリニックです。経営者は代替わりしましたが、今も愛情を込めて大切に建物を使っておられます。シルバーの曲面が建物全周を覆っており、空から舞い降りた宇宙船のような佇まいは30年以上前の建物とは思えません。緩やかに傾斜した土地に宙に浮いたように建造されており、メカニックで独創的な造形です。

宇宙船のような久保田クリニック

ところで「建築界のノーベル賞」と言われるプリツカー賞の今年の受賞者は京都造形芸術大教授も務める坂茂氏でした。日本人の受賞は2年連続となります。東日本大震災の被災地でのコンテナを使った仮設住宅や、紙管を使った「紙の教会」など、これまで使われなかった材料を建築に生まれ変わらせる手腕で知られています。近年では仏北東部のメス市に建てた美術館「ポンピドゥー・センター・メス」は大曲面を木材で作るという斬新さで世界を驚かせました。

坂氏が建築を学んだのは、米ニューヨークのクーパーユニオン大学です。日本の大学はほとんどの建築学科が4年制で工学部に所属し、エンジニア教育を基盤としますが、欧米は建築学部として独立しており、5年制が基本となります。理論も含め、デザイン力を育てることを重視した環境だと言えます。

前述した葉、坂両氏が米国でデザインを学んだことは偶然ではないでしょう。奇抜さを追うという意味ではなく、建築には美的感性を磨く教育が重要なのです。日本の建築教育も見直しの時期に来ているのかも知れません。文部科学省の理解なしには始まりませんが、日本の街並みの貧困さを通れば、理由の一つに教育問題があるように思えてなりません。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

パサージュ、魅力を再認識

パサージュと呼ばれる、ガラスの屋根が架けられた歩行空間をご存じでしょうか。19世紀にパリに生まれ、その後、ヨーロッパ全体に広がりました。

当時のパリはまだ歩道が整備されておらず、馬車が走る脇を、泥はねに気を配りながら歩かなければなりませんでした。パサージュは、交通量の多い2つの道をつなぐように街区の中を貫通し、大きな建物がそれを内包する形で誕生した歩行者専用空間です。

デザインが揃った左右対称の空間に、さまざまな店が並び、床は石やタイルが敷き詰められました。鉄の装飾が美しいガラスの屋根のおかげで雨が降っても快適なパサージュは、「ゆったりとしたそぞろ歩き」ができる場所として大変な人気を博したそうです。冬も快適なように、店内とアーケード全体に、循環する暖房を備えたものもありました。

パサージュはその後、イギリスやイタリア、ドイツ、ロシアなど各国で建設されていきました。国によって「ガレリア」「アーケード」など呼び名が異なり、またその規模や空間もそれぞれに発展していきました。現存するもので最も有名なのは、イタリア・ミラノの中心部にある「ガレリア・ヴィットリオ・エマニュエル・二世」でしょう。4階建ての屋根部分に架けられた鉄とガラスの天井から、さんさんと光が降り注ぎ、両側の建物の立面も美しく、十字型の平面の交差部にはガラスのドームが架けられています。カフェや有名なブティックが軒を並べる豪奢な空間は、街を代表する都市施設として風格を誇っています。

19世紀後半に隆盛を迎えたパサージュは、20世紀に入ると衰退しました。理由の一つは百貨店の登場だといわれています。その代表格であるパリのギャルリー・ラファイエットは、中心に堂々とした大きな吹き抜けをもち、その天井のドームはガラスと鉄で華麗な装飾が施されました。もちろん商品の量でも比較にならなかったはずです。その後たくさんのパサージュがなくなり、今は最盛期の約10分の1に減ってしまいました。

しかし近年、現存する数少ないパリのパサージュが、再びその魅力を認められているようです。ミシュランの星を取り続けているあるレストランもこぢんまりしたパサージュ・パノラマに位置し、店名にもパサージュを取り入れています。特集ページを組んだ観光ガイドブックも出てきました。全天候型で、気軽に通り抜けができ、カフェで一休みや買い物ができる親しみやすい公共空間は、都市生活者にとって貴重な資源だということが再認識されてきているようです。

世界の金融の中心地、ロンドンのシティにも、リーデンホール・マーケットというアーケードがあります。その歴史は14世紀に建てられた市場に遡るのですが、ガラスがはめ込まれた屋根など現在の佇まいの原型は19世紀終わりにつくられたものだそうです。シティといえば観光客には敷居が高く、ぎすぎすしたビジネス街に思えるのですが、このアーケードの空間には、雑をもほっとさせてくれる、親しみやすさがあります。

私は長らく、屋外のような屋内のようなあいまいな空間でありながら、その街を魅力的にするヒューマンスケールな場所に魅せられてきました。日本にもアーケードは戦後たくさんつくられ、商店街として賑わいを呈してきました。今では活気を失いシャッター街と化してしまった商店街も少なくありません。日本のアーケードはこれからどうなるのか？　次回、考察したいと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞

平成２６年（2014年）１０月２日　木曜日　（九州・山口）　24

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

全国各地に生き残るアーケード

水平のデパート。かつてアーケード商店街をそう称したこともあったそうです。それほどたくさんの店舗が、多種の商品をそろえて賑わった時代がありました。魚屋や八百屋での買い物風景は、私にとっても子供のころの懐かしい思い出です。しかし今、中心市街地の衰退と聞けば、「シャッター街」と化したアーケード商店街が思い浮かぶようになってしまいました。

前回はパリのパサージュについて書きました。全天候型の歩行空間という意味では同じですが、街区の中を貫通し、建物と一体になっているパサージュと、日本のアーケードは成り立ちがまったく異なります。日本の場合は「公道」に屋根を設置しているのです。

日本のアーケードの源は「日除け」です。日射しから商品を守るために、簡易な日除けを街路の上部に張ったのが始まりで、それが恒久的な構造物になったのが今の姿だそうです。西日本に多い形です。東日本には、雪よけの庇を発祥とするものも多いと言われます。

昨年までの大学教員時代に、学生とともに東京23区と武蔵野市のアーケード街を調査しました。驚いたのは、山手線の内側にはもう、一つも現存していなかったこと。以前はあったのではと思われるのですが、資料が見つかりませんでした。そして、山手線の外側を見ると、平成24年の時点で存在した38カ所のほとんどが、住宅地の鉄道駅に近接するチェーン店主体のものでした。もっとも賑やかな都心にあるのは、浅草の浅草寺門前に広がるアーケード街です。

一方、大阪は対比的です。心斎橋筋、天神橋筋など、中心部に活気のあるものがいくつも残っています。天神橋筋は2・6キロの長さを誇り、店舗数も600。全国各地が目標に掲げる「歩いて楽しい町」の、代表的存在だと思います。

山陰の鳥取は、アーケード研究者から見ると最も面白い街に思えました。雪から歩行者を守ろうと、中心部のあちこちの道にアーケードが架けられています。歩道にのみ架けられた片側型。自動車交通を制限し、通り全体を覆うように設置された全蓋型。規模も時代もいろいろで、まるで「アーケードのデパート」のようです。昨年、駅前道路に大規模な開閉式屋根を架け、イベントに使える公共空間を整備した鳥取市ですが、現存するこうした多様なアーケードもまちづくりの核に据えたら、さらに面白いと思いました。

高松の丸亀町商店街は画期的です。バブル期の昭和63年に400年祭を華やかに祝った際に、当時の理事長が今後の商店街に危機感をもち、このままでは衰退すると組合員に警鐘を鳴らしたそうです。歴史的にも地理的にも、高松の中心です。そこに居住人口を増やしつつ賑わいを生み出していく再開発事業を仕掛けたのです。買い物だけではなく「暮らし」の場として機能するよう、建物やアーケードの更新を20年にわたって段階的に取組み、今も進行中です。

このように各々の状況や取り組みはさまざまですが、一律に老朽化が全国的に問題になっています。ほとんど昭和40年代後半以降に作られていますが、組合が音頭をとって新しく架け替えができたものはごく一部でしかありません。

かつては架け替え工事に補助金が出たのですが、今は撤去費用に補助が出る仕組みに切り替わっていることからも社会の流れがうかがえます。次回は日本の都市とアーケードについて、もう少し掘り下げたいと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

街らしさのための制度検討を

これからのまちづくりには、そこにある個性を見極め、生かすことが大切です。旅をすると市場をのぞきたくなるのは、そこに「その街らしさ」を発見したいからですよね。全国各地がミニ東京を目指した時代とは、明らかに価値観が変わってきました。

公道の上に屋根を架けた、全天候型歩行空間である日本のアーケード商店街は、その街らしい空気が流れる、特徴ある都市空間です。

用途地域という言葉をご存じでしょうか。商業、工業、住居など、市街地の大枠の土地利用を定めるものです。アーケード商店街の大半は、商業地域に位置します。現在、東京のアーケード商店街は、ほとんどが住宅地に続く駅前に存在しています。それらを調査したところ、次のようなことがわかってきました。

まず、商業地域は高さ制限が緩いことから、中高層のマンションが増えてきていました。平均間口5以前後の商店のうち、隣り合う3～4軒が買い上げられ、マンションに建て替えられたわけです。駅前で便利な立地なので、需要が見込めるのでしょう。商店街にとっても、居住人口が増えると消費者も増えるわけで、どちらにとっても好都合です。

しかしハードとしては、気になることを発見しました。その最たるものの一つが、前面道路、すなわちアーケードからのセットバック（後退）です。法律上、中高層建物は、あまり広くない前面道路からは後退しなければなりません。このセットバックのために、1階の商店が奥まってしまうだけでなく、アーケード屋根と建物の間に隙間が生じ、ぽっかり空が見えるということが起こっています。せっかく雨に濡れずに歩ける空間なのに、建物とアーケードが隔絶してしまうのはもったいないことです。このままマンションが増えれば、アーケードと建物が分離した連続性のないバラバラな空間になりかねません。

とはいえ、これは法律上、仕方ないことなのです。しかし、法律の一律適用ではなく、その地域の特性に応じた特例を設けることで、回避できるようになるかもしれません。言い換えれば、その地らしい都市空間を維持するために、その地に応じた仕組みを適用するということです。

もしそうなれば、これから進むといわれる「まちなか居住」と、アーケード商店街が上手く共存できるかもしれません。車に頼る郊外の生活とは対照的に、歩いて行ける距離に、商店も医療施設も文化施設もある暮らし。アーケードは、その地に元々あった歴史的背景と寄り添った、ヒューマンスケールな街に欠かせない存在になれるかもしれません。

言うまでもなく、最も重要なことは街に対するビジョンです。どんな街に再整備していくかを描けないと、残すべきものもわからず、新しいものと共存するに適した仕組みをつくることもできません。公道に中途半端に架けられたグレーな存在であるアーケードの存在は、今や多くの自治体から疎まれ、積極的に撤去が進められているところもあります。

しかし、生活感溢れる裏路地などと同様、その地域の特徴的な空間であるからこそ、目を背けずに向き合えば、まちづくりへのヒントも隠されているのではないでしょうか。アーケードの架け替えや維持も、商店街組合だけの問題ではなく、都市全体で検討すべき問題でしょう。

官民が街の将来に対して「具体的に」ビジョンを描くこと、そしてそれに応じた仕組みを許す柔軟な制度を導入できるようになること。今後人口が都心に偏っていくといわれ、都心空間を見直す時期だからこそ、こうした動きが期待されます。アーケードはそのことを教えてくれる代表選手に思えるのです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

次世代に向けた交通計画とまちづくり

健康維持には歩くのがよい。もう常識になりましたね。各地で公園や川べりが、人気のウォーキングルートになっていると耳にします。治安のよい日本では、夜でも安心して歩ける場所が豊富なようです。

自転車も人気です。通勤通学の手段だけでなく、サイクリングやスポーツとして楽しむ人口が増えているようです。ところで、自転車が主要な交通手段として利用されている最も有名な都市は、オランダ・アムステルダムでしょう。

旧市街地は道路幅が狭く自動車が入りにくいことから、自転車やトラム（路面電車）を主な移動手段とし、自転車専用道路も整備されています。狭い道路を拡幅する日本の区画整理とは大きく異なる考え方です。

２００７年に始まったパリの貸自転車システムは、自動車の渋滞緩和に役立つとして注目を集めました。ヴェリブという名前は、「自由な自転車」を意味する造語。町のあちこちに無人のステーションがあり、異なる場所での返却も可能なので、市民や来訪者の都市内移動に利用されています。ニューヨークの同様のシステムは、シティバイクという名前です。銀行のシティバンクがスポンサーの一つなので、マークもシティバンクとそっくり。広告媒体も兼ねているわけです。

路面電車の人気も復興してきています。昭和の時代に廃止になった都市もありますが、富山市、熊本市、岡山市などの都市では、車体を美しくした路面電車が人気の交通手段になっています。ゆっくり車窓を楽しむことができ、ルートが分かりやすいので来訪者も利用しやすい交通機関と言えるでしょう。鹿児島市では軌道敷が美しく緑化され、街の景観アップに大きく寄与しました。

パークアンドライドという言葉はこの10年で随分浸透しました。通勤途中の駅にある駐車場で自動車を停め、公共交通に乗り換えるという移動方法のことで、都心に乗り入れる車の減少が期待されています。

コンパクトシティという概念を聞かれたことはあるでしょうか。市街地のスケール（規模）をコンパクトに維持して、住みやすいまちづくりを目指す考え方です。大都市では難しい、職住近接も可能なスケールとも言えます。日々の買い物も身近な商店で行い、郊外の生活と違い、自動車には頼らない暮らし方がイメージされています。

一方、最近は都心回帰という言葉もよく耳にします。戦後の日本は、どんどん郊外に開発を進めてきましたが、人口減少と高齢化を背景に、郊外から都心への移住が進むことを指しています。医療施設などへ、運転せずに歩いて行ける暮らしに安心感もあるようです。

ところで、福岡市には「福岡市建築紛争の予防と調整に関する条例」というものがあり、10戸以上の住戸がある集合住宅は一定台数以上の駐車場を設置することと、ずいぶん前から決められています。このため市内に建つマンションのほとんどが一階に駐車場を設置し、店舗を作りにくくなっています。福岡市は住戸数に対する集合住宅の割合が日本一高いのですが、さらに都心回帰に伴い集合住宅建設が増えるほど、歩行者目線の高さに駐車場が増え、街並みを楽しくする店舗が消えていくと思われます。各自治体が唱える「歩いて楽しいまちづくり」の逆とも言えます。前述のように暮らし方や状況が変わる中、見直すべき「過去の制度」の、良い例ではないでしょうか。

少子化・高齢化を背景に、日本は今、様々な見直しを迫られています。その中で、交通計画はもはや交通機関そのものではありません。徒歩、自転車、バス、電車、自動車などを上手く使い分けながら、私たちがどのような街並みや都市空間をつくり、どんな暮らしを営むのかを考えることです。都市が成長していった時代に決めたことを見直し、未来のビジョンを描いてそれに適した制度につくり変えていくことは、次の世代に向けた、現代を生きる我々の責任だと思うのです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

夢を与えた建築、都市の軌跡そのもの

美術館、博物館、市庁舎、教会…旅先での楽しみは、美味しい食事やショッピングに加え、その都市を代表する街並みや建物を訪れることではないでしょうか。それらの前で撮影する写真は、旅のよい思い出になりますね。建築には文化的、歴史的背景がつきものですから、建物の解説文を読めばその街への学びも多いはずです。

日本では、古い民家や寺社仏閣はもちろん、明治から昭和初期に建った西洋建築も人気の観光スポットといえます。私の住む福岡市では、博多駅近くに寺社町があり、歴史を学べるまち歩きツアーがあります。戦前建築としては福岡市赤煉瓦文化館（福岡市中央区）が有名です。東京駅も設計した日本近代建築の父、佐賀・唐津出身の辰野金吾氏の設計です。

戦後の現代建築はどうでしょう。福岡市は商人の町でもあった歴史的背景が残っているのか、民間が建てる建物に勢いがあったと思います。その代表のひとつが西日本シティ銀行本店（福岡市博多区）でしょう。

福岡相互銀行本店として建てられたこの建物は、ＪＲ博多駅の博多口から広場に出ると左手に、威風堂々とたたずんでいます。設計者は大分県出身の建築家、磯崎新氏。日本の建築界はもちろん、世界中に知られた、まさに日本を代表する世界的建築家です。しかし設計に着手した１９６０年代末は、まだ30代の若さでした。

西日本シティ銀行本店　＝福岡市博多区

設計を依頼したのは当時の社長、四島司氏。絵画や彫刻など芸術に造詣が深いことで知られています。若き磯崎氏の可能性を感じ、銀行の大分支店の設計を依頼。その後、本店の設計を発注しました。「都市の彫刻を」という、スケールの大きな注文だったそうです。

そのシンボリックな外観は、一度見たら忘れられません。切りたつ力強い壁。宙に持ち上げられたかのように見える、正面の水平ボリューム。独特のテクスチャーを持つ外壁の石は、インドから運ばれたオレンジ色の砂岩です。建築に関わる人なら、写真をみただけで「福岡だ」と認識できる建物です。

室内空間も個性的です。１階の店舗は巨大な船倉を思わせます。上層階へのエントランスになるロビーの壁は、外壁の石とは対照的に、トラバーチンと呼ばれる光沢あるベージュの大理石で仕上げられています。天井は鼓形を直行させてできる、交差ヴォールトと呼ばれる特徴的なかたちです。ヘンリー・ムーアの彫刻やアンゼルム・キーファーの絵画を鑑賞できるこの空間では、約30年間にわたり、毎月無料のコンサートが催されています。

以前このコラムで取り上げた福岡銀行本店と、西日本シティ銀行本店は、福岡の都市景観に大きく寄与してきた建物だと思います。福岡市は天神、博多と二つの中心を持っています。70年代の初めに民間企業が、市民のために音楽ホールやアートを取り入れながら、それぞれの地区に世界にふたつとない建物をつくりあげたことは誇らしいことです。戦後の復興期を経て、64年東京オリンピック、70年日本万国博覧会と、社会が大きく開き、伸びていった時代。その象徴として建築は人々に夢を与えたに違いなく、その存在が都市の軌跡と重なるのです。

私が理事長を務めるＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーションでは、こうした優れた建物をもっと知ってもらおうと、建築マップをウェブサイトにオープンしました。福岡を代表する50の近現代建築を選定し、それぞれに簡潔な説明文を加え、繊細で美しいアイコンをひとつひとつ掲載しています。スマートフォンやタブレットがあれば、歩きながら建物を見て回るガイドになります。英語、中国語、韓国語にも対応しています。建築を通して福岡をより深く知っていただくツールとして、多くの方に利用していただきたいと願っています。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

食文化を豊かにする建築

福岡市の寿司の名店といえば、必ずあがるのが「河庄」でしょう。昭和22年創業の老舗です。市内に「庄」の字が付く寿司店が多いのは、この店の暖簾分けだと聞きます。

建物を設計したのは吉村順三氏です。明治41（1908）年、東京の呉服商に生まれ、東京美術学校（現・東京芸術大学）で建築を学びました。欧米で生まれた近代建築を、日本の風土文化に翻訳し独自の空間をつくった建築家です。河庄が完成したのは、昭和34年。まだ新幹線もない時代に、河庄創業者の高木健氏は、吉村氏に設計を依頼したくて東京まで何度も通ったそうです。

建物は連続する細かな縦のラインが強調されています。外部の1階は木、2階はコンクリートで縦格子が取り付けられていて、昼間は外からの光が柔らかく内部に、夜は内部の灯りが外へと、格子を抜けて届きます。内部空間でも、階段の細かな手すり、障子の桟にと、縦の線が一貫しています。モダンだけど和を感じさせ、空間全体に小気味よいリズムが刻まれています。

完成して50年以上たった今も当時のまま大切に使われていて、福岡の食文化を牽引してきただけでなく、建築文化にも貢献されてきたお店です。

吉村氏はコップの高さと棚の寸法など、細かなところまで使い勝手や家具の配置を考える建築家でした。使う人にとっては建築家が設計した空間に「住まわされる」運命は避けられない、だから建築家として「誠意」を尽くすのだとも語っています。

奈良国立博物館や八ヶ岳高原音楽堂（長野県）などの公共的な建物だけでなく、住宅の設計にも重きを置いていました。自然との関わり合いを基本とし、火、水、木と建築が寄り添うことを大切にしました。また光について、「住宅では夜の楽しさと昼の楽しさの両方あるのがいい」と語っています。そういう観点で河庄を見てみると、一層面白いのではないでしょうか。

福岡には、ほかにも寿司の名店があります。平成9年完成の「やま中」の本店は、西日本シティ銀行本店も手掛けた磯崎新氏の設計です。世界的に活躍する建築家のデザインだけあって斬新です。連続する大判のガラス、コンクリート打ち放しの外壁、重厚な鋳物の扉など、外観を見て寿司店と思う人は少ないでしょう。

内部に入るとさらに驚かされます。伸び伸びと高い天井、サーモンピンクの壁、カウンターの上につり下げられた和紙製の立体的な照明、2階の個室へと向かう長い通路。まるで美術館のような空間です。店主の山中啄生氏は「18年ここで働いているのに、毎日新鮮な気持ちで仕事ができる」と言います。

磯崎氏に聞いたところでは、工事の際、カウンターの正面になるサーモンピンクの壁を施工した職人が、「失敗したのでやり直す」と言ってきたそうです。見てみると、塗料を入れたせいか、陰影の壁に擦れたような微が一面に発生していました。しかし「この方が面白いからそのままにしよう」と磯崎氏は判断、あの有名な壁が生まれたそうです。トロを思わせる不思議なテクスチャーを持っています。

2つに共通するのは、店主がそれぞれの建築家にどうしても設計してほしいと強く願い、思いがかなったという点です。その結果、完成した建物がその店のシンボルそのものとなっているのです。

私が理事長を務めているNPO法人福岡建築ファウンデーションではホームページに、福岡のお店の見どころを会員が解説するページをつくりました。デザインのプロはこういうところを見ている、と参考にしていただいて福岡にデザインの優れたお店が増えていったら、食文化がさらに豊かになるのではないかと願っています。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

まちの未来に残す大学の知

イギリスのオックスフォードとケンブリッジ、アメリカのハーバード。世界に知られるこれらの有名大学は、研究・勉学に集中するのが第一、という声が聞こえてきそうな、周辺は少し寂しい感じさえする町にあります。ロンドンやニューヨークといった大都市に位置していないところが面白いなと思います。

イタリアのボローニャ、ドイツのハイデルベルクは大学の町として著名です。ボローニャ大学は1088年創立で西欧で最古とされ、「世界の大学の原点」とも呼ばれます。ハイデルベルク大学は1386年とドイツ最古です。どちらも小さな都市だけに、大学イコール町の感があります。

日本で最も古いのは1877年に設置された東京大学です。福岡市の九州大学は7つあった帝国大学の一つとして、古河財閥と福岡県の寄付に支えられ、1911年に誕生しました。

国に関わらず、大学の存在は町にとって大きなものです。理由の一つは人間の数です。例えば九州大学は、教職員は約8千人、学生は約1万9千人と、ちょっとした町の人口規模です。また敷地の面積が広いことも、町に大きな影響を及ぼします。九大箱崎キャンパスの場合、43㌶（約13万坪）もあります。そして、目に見えないものとはいえ、「誇り」もその一つでしょう。さまざまな分野の知の集積、尊敬や憧れをもって、地域の人々がその存在を誇らしく思うのは世界共通だと思います。

九大のキャンパスのうち、教養課程の中心であった六本松地区とメーンのキャンパスだった箱崎地区が、福岡市西部の伊都地区へ移転することになり、平成30年度完了を目指して順次進められています。規模から考えても、大学が移転するというのは並大抵のことではありません。新キャンパスの整備は新しい町をつくるようなものです。山を切り開き、インフラを整備し、既存の土地を売却して資金調達しつつ、新しい建物を建てるという長期プロジェクトです。これを、国立学校法人になったため大学が切り盛りしなければなりません。関係者の苦労には計り知れないものがあります。

ただ、去り方には工夫を要します。これまで知のシンボルだった場所が、民間所有へ変わるわけです。中央大学などが郊外に移転した昭和40年代とは、時代が違います。未来に誇れる町として生まれ変わるよう、大学、行政、地域、もちろん土地の購入者も力を合わせて、まちづくりをしなければなりません。

箱崎地区には大正、昭和初期の建物が多く残っています。最も知られているのが、赤い瓦造の本部第一庁舎、威風堂々と立つ4階建ての工学部本館でしょう。左右対称でクラシックな佇まいに大学の威厳が漂っています。その脇には、大正13年の法文学部成立に際して建てられた法文学部本館や図書館もあります。凝った意匠を持つ建物です。そのほか、小ぶりですが木造建築も残っています。戦後の建物では、創立五十周年記念講堂がシンボリックです。正面の大階段で、これまで幾多の卒業生が記念撮影をしたことでしょう。

20世紀初頭から100年の間、大学として使われた場所に、これから市民の新しい営みが生まれる。それを21世紀の素晴らしい軌跡にするためには、歴史と未来が重なる町をつくるべきだと思います。単なる建物保存ではありません。新しい構造物をつくりつつ、既存建物の利活用に工夫を凝らすのです。補強して建物を残すだけでなく、部分的に残す、材料だけ再利用するなどの方法もあります。それを手がかりにしながら、今あるものを使い倒しつつ新しい建物の姿や町の佇まいを構築していくことは、時の厚みがある分、丸ごと新しい町つくるよりも魅力的になるのは世界の事例が証明済みです。

今年度更地化が進むエリアには、大正、昭和初期の時代を表現した、文化の香る建物があります。小さな建物なので他の解体にも影響が少なく、手始めに利活用を検討するには適した規模です。検討には建築の構造、材料、構法などの専門技術を必要としますが、幸い大学にはいろいろな専門家や有識者がいるうえ、各分野で活躍する卒業生も多数います。ここが民間所有の近代建築とは違うところです。

土地購入を検討している事業者の中には、これらの建物の利用を視野に入れているものもあります。利用可能性があるものは解体時期を見合わせ、知恵を持ち寄るテーブルをつくり検討すると、大学跡地ならではのまちづくりの第一歩となるでしょう。また他の地域の、近代建築利活用に役立つノウハウになるかもしれません。そしてその試みと知見は、知の集結した大学だからこそ残していける、地域の財産になるでしょう。チャレンジ精神旺盛な都市・福岡が、独自のまちづくりを世界に発信できるチャンスでもあると思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

建築家・前川國男と福岡市美術館

生きていたら会ってみたかった建築家。前川國男は私にとってそういう存在です。１９０５（明治38）年に生まれ、１９８６（昭和61）年に81歳で亡くなるまで、現役の建築家でした。音楽、とくにオペラが好きで、たくさんの映画に触れ、車はジャグア（ジャガーと読んではいけなかった）を愛し、フランス語と英語に堪能、そして大変な健啖家で美味しいものに目がなかったそうです。晩年はパーキンソン病で身体が不自由になりつつも、設計を続け、建物に足を運んだ生涯でした。

１９２８（昭和３）年、東京帝国大学の卒業式の日にパリへと発ち、近代建築の祖、ル・コルビュジエ（１８８７～１９６５）の事務所で働き始めました。２年後に帰国、東京レーモンド事務所で働き、１９３５（昭和10）年に正式に事務所を開設しました。戦争が終わるまでの10年間は苦労の多い時代でした。亡くなるまでの半世紀に、数多くの優れた弟子を輩出しましたが、戦後の日本建築界を代表する丹下健三もその一人です。

事務所では表向き「先生」と呼ばれていても、その人柄から所員の間では「大将」と、所長室の扉は「虎ノ門」と呼ばれていたそうです。虎ノ門から大将が出てくると製図室にさっと緊張感が漂うなか、一人一人所員の製図台を巡り、機嫌の良い時はオペラを口ずさみながら、所員が描く図面のうえに何枚もスケッチを重ねたといいます。

全国で美術館や博物館など公共建築を手がけましたが、１９７９（昭和54）年に竣工した、大濠公園の緑の中に佇む福岡市美術館もそのひとつです。同じころに東京都美術館、熊本県立美術館、山梨県立美術館などを完成させています。ル・コルビュジエの弟子であり近代建築の旗手とされた前川氏ですが、この時代には近代建築の機能性や合理性だけではなく、もっと自然と寄り添い、手の痕跡が残るような建築のありかたを追っていたと思います。

それを代表するのが打ち込みタイルと呼ばれる手法です。コンクリートの壁にお化粧的にタイルを貼るのではなく、コンクリートを流し込む型枠にタイルを組み込んでおき、二つが一体になるようにつくる工法です。福岡市美術館の壁を見ればわかるのですが、タイルの何枚か毎に、型枠を支える穴が開いているのはその工法の証です。

用いられたレンガ館のタイルには焼きむらがあって、一枚一枚が微妙に異なる色を持っています。色の表現に関しても前川氏はかなりのこだわりがあったようで、皇居に面する東京海上ビルのタイルの色は「カチカチ山のタヌキの火傷の色」と指示して担当者を困らせました。ある劇場の椅子の張り地の色については「女の人が寒空に立っていたため唇が少し紫色になった時のようなワインカラー」と指示した事も。福岡市美術館のタイルも、よく見ると茶色という一言では表現できない複雑な色が混在しています。

福岡市美術館のもうひとつの特徴は入り口が２つあり、その一つが２階に設けられていることです。公園から敷地内に入るとゆったりとしたテラスが少しずつ高くなりながら連続します。来訪者はそれを辿るうちに歩く方向が変わり、テラスに憩かれた彫刻に出会い、いつの間にか２階の入り口に到達するのです。散策路を意味するエスプラナードと呼ばれ、前川氏が得意とした空間設計です。

福岡市美術館より４年早く建った東京都美術館も前川氏の設計で、２０１０（平成22）年から２年間かけて、設備の更新などを含む全面改修が行われました。長年東京都民に親しまれた佇まいを後世に継承する方針のもと、壁床部の外壁の打ち込みタイルや床タイルに、オリジナルの形状、色合い、工法を忠実に再現しています。当時と同じ土や窯があるわけではないので、同じ風合いの再現は、なかなかの苦労があったようです。

福岡市美術館も来年９月から２年半かけての改修工事が始まります。設備の更新やカフェの新設が予定されていて、その姿を見るのが今から楽しみです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

現在、世界で最も活躍する日本人建築家のひとりは伊東豊雄氏です。昭和16（1941）年生まれの74歳、建築界のノーベル賞といわれるプリッツカー賞を平成25（2013）年に受賞しました。国内はもちろん、ヨーロッパやアジアでもたくさんのプロジェクトが完成しています。

国内で最もよく知られる作品が「せんだいメディアテーク」でしょう。仙台市図書館・ギャラリーとしての機能に加え、映像や音楽などのメディアの収蔵や鑑賞ができる施設として平成13年に開館しました。伊東氏のコンペ案が1等を取ったときは、その模型写真が世界に衝撃を与えました。ガラスの箱の中にある構造が、見慣れたまっすぐな柱ではなく、曲がったパイプが組み合わされた空洞のチューブだったからです。まるで海中で揺らいでいる海藻のようなものが各階の床を支えている様は、剛直な構造に慣れている目にはとても新鮮でした。

曲面が特徴的な「ぐりんぐりん」

実現した建物は、仙台で最も人気のある施設と言っても良いでしょう。散在している大小のチューブには、階段やエレベーターを内蔵しているものや、上から太陽光を取り入れるものもあります。機能性を持ちながらも、均質でないその姿は一度見たら忘れられません。

伊東氏が福岡市内で手掛けた公共建築が、平成17年に完成した「ぐりんぐりん」です。福岡市東区のアイランドシティ中央公園にある施設で、植物園やイベントスペースなど3つの丸い空間を持っています。この建物の特徴は、リボン状のコンクリートの板がうねりながら巨大な三次元曲面を形成している部分です。

伊東豊雄氏と「ぐりんぐりん」

曲面ということは、中に入っている鉄筋一本一本も曲がっていて、またコンクリートを流し込むための型枠も曲面だということです。工事中に訪問させてもらったとき、自重で曲がるよう考えられた細い鉄筋が無数に横たわる様子と、家具職人による曲面の型枠という、高度な施工技術を要する現場に大変驚かされました。

現在は屋根の緑化も進み、地上レベルの緑と一体化して、なだらかな丘のように見えます。埋め立て地のフラットな風景に、立体感を与えているとも言えるでしょう。この屋根の上は、室内に光を導く大きな天窓を見下ろしながら、自由に散策することができます。

台湾で完成しつつある台中国立歌劇院もまた、世界の注目を集めています。カテノイドと呼ばれる三次元曲面が続いていくなかに、ロビーやホワイエ、ホールが存在します。どこまでが床なのか壁なのか天井なのか。四方の外壁の直面以外はすべて曲面でできていて、有機的で不思議な空間が連続します。コンクリートでこの曲面をつくる難しさは、説明を聞いても想像を絶するものでした。しかしそれが恣意的な曲面ではなく、構造的にも施工的にも「システム」となっているところが伊東氏の真骨頂だと思います。

こういった曲線や曲面を用いるのは、21世紀の建築がいかなるものであるべきか、という問いへの、伊東氏の答えだと思われます。時代背景から20世紀は、日本だけでなく世界中で、住宅を含むたくさんの建物が短期間で必要とされました。それは合理的でシステマティックな生産に裏付けられました。しかし、日本を含む成熟期を迎えた国々では、もう「量」を必要とはしていません。人類がもともと持っている自然への憧憬や畏れを再認識し、何千年もかけて進化してきた建設技術の次なるステージを模索しながら、新しい空間の創造へと挑戦を続ける氏の姿に、世界中の建築家が称賛を惜しまないのです。

この9月には氏の岐阜市立図書館も完成しました。これもまた、新鮮な驚きを与えてくれる建物だと、建築界では話題沸騰です。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

福岡・天神の都市構造の面白さ

デパートや商業施設が集中する福岡市の商業の中心、天神。近年はその西側の大名、南側の今泉にも賑わいが広がり、すでに天神の一部となった感があります。

私は天神には大きく4つの面白さがあると思います。まず一つ目は東西両端にある水と緑です。東は那珂川、薬院新川が流れ、対岸の中州に向き合います。またかつての福岡県庁跡地、芝生の広がる天神中央公園は年中さまざまな催しで親しまれています。西は福岡城。石垣と濃い緑はどっしりと時を重ね、お濠の水面は夏の終わりに清浄な蓮の花で満たされます。天神の両端、東西の「トメ」は自然なのです。

2つ目は由緒ある神社の存在です。菅原道真を祀った水鏡天満宮は、黒田長政によって守りの意味を込め、福岡城の鬼門にあたる現在の場所に移されました。警固神社も由来は古く、西暦200年の神功皇后の朝鮮遠征を守った神をまつり、やはり黒田長政が現在の地に動かしたそうです。どちらもちょっと立ち寄って手を合わせられる、天神の宝石のような場所です。

以上の2つは、近代以前からの歴史資産ですが、次に挙げる特徴は、戦後の取り組みです。天神の南北を貫く「渡辺通り」の下、長さ約600㍍の天神地下街。通り両側の建物を地下で接続する背骨でもあります。さらにそこから地下通路があちこちへと伸び、雨の日も濡れずに主要な施設に到達できる密なネットワークができています。かといって地上レベルが寂しいわけではありません。その代表格が2列に並ぶアーケード、新天町です。戦後すぐ、復興の願いを込めて創設されました。東京の山手線の内側ではすでに消滅し、日本各地でもシャッター街化するアーケード商店街が、生き生きと存在していることは珍しいことです。大丸のエルガーラ・パサージュ広場も地上に彩を添えています。この地上と地下の「通り」をもつ重層的な都市構造が、天神に魅力を与えていることは間違いありません。

4つ目に建築物を上げたいと思います。先日、平日のランチタイムに吹奏楽が流れていました。その音源は福岡銀行本店の広場でした。毎月無料のコンサートが開かれ、その日は福岡工業大学吹奏楽団の演奏をたくさんの市民が楽しんでいました。屋根のかかった広場での演奏は、銀行の2面の壁も手伝って街中に拡散していくことに驚きました。天神のへそと言ってもよい好立地に建つ、都市の贅沢な窪み空間の効果です。これが都市の凹凸の凹だとしたら、凸はアクロス福岡でしょう。天神中央公園の緑をめぐり上げたように、空へと続いていくステップガーデンは、アクロス山とも呼ばれ特別な立体感を与えています。

天神は明治中期以来、さまざまな先人の汗によって現在の発展の基盤が築かれました。なかでも視野広く街の発展を考え、私財を投じることも厭わず構想実現に奔走した渡辺奥八郎氏の貢献は大きく、本人は固辞したにもかかわらず渡辺通りの名の元になったことは、つとに知られます。

アクロス福岡の基本計画を手掛けたエミリオ・アンバーツ氏は、CO_2削減とかエコロジーとかいう言葉で、緑で覆う建築のことを語ったことはないと言います。自然というのは私たちのすぐそばにあるべきもの、人間は自然とともに生きて当たり前、という思想に立ち、設計したそうです。福岡銀行本店を設計した黒川紀章氏は、それまで午後3時になると固く門を閉ざす閉鎖的で権威的な銀行建築が、これからはもっと市民に開かれた場所になるべきだと、あのおおらかな広場をつくる思想を銀行と共有したと聞きます。

これから天神に変化をもたらすのは、大名小学校跡地と、高さ緩和に伴う明治通沿い建物の建て替えです。またもっと魅力を高めるべきは那珂川、薬院新川の水辺空間、そして福岡市全体の課題である港湾地区です。目前の算盤は厳しい数字を示し、法制度は簡単に首を縦に振らないかもしれませんが、街全体の発展のために大きな視野で都市を捉え、構想し、実現へ向かって奮闘することの重要さを、先述の渡辺氏のことを知るほどに思うのです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

マイケル・グレイブスと福岡

建築家がティーポットをデザインすることもあることを、ご存じですか？

欧米の建築家はしばしばプロダクト（製品）やインテリアのデザインを手がけます。米国の建築家、マイケル・グレイブス氏は、建物だけでなく家具や照明器具などさまざまなものを世に送り出しました。

世界的に有名なイタリアのハウスウエアメーカー「アレッシィ」の依頼で展開した食器やキッチン用品は、かたちの面白さや色使いが、人々に新鮮な驚きを与えました。建築家らしい幾何学の多用、お城の塔の屋根を思わせる円錐形の蓋、どこかクラシックさを漂わせるどっしりしたプロポーション。注ぎ口にとまる小鳥が蒸気によってさえずる笛仕は、お湯が沸くのを待つのを楽しくしたヒット商品です。

ポストモダンという言葉が建築界に盛んに登場し始めた1980年代、氏は最も注目された建築家です。プリンストン大学で約40年間建築学を教えつつ、建築設計事務所を主宰し、昨年80歳で亡くなりました。

約百年前の20世紀初めは、建築が大きく変化し始めた時代。モダニズムの到来です。遡ること古代ギリシャ時代から、ヨーロッパが数千年にわたって継承してきた建築の歴史的様式から離れ、機能性や合理性に基づくデザインへ向かい始めたのです。石積みの重い壁とそこに穿たれた小さな窓、華麗な彫像、様式を冠した柱などから離脱し、構造に鉄筋コンクリートや鉄骨を取り入れ、装飾を廃し、ガラスの大きな窓を獲得したモダニズム建築は、工業化と足並みを揃えて世界に広まっていきました。

グレイブス氏も30代の若手だったころは「ホワイト派」とも呼ばれ、モダニズムの巨匠ル・コルビュジエのスタイルを引き継ぎ、白くて抽象的なデザインを手掛ける「ニューヨークファイブ」と評された5人の建築家の一人でした。ところがその10年後、1982年に完成したオレゴン州ポートランド市の市庁舎は、まったく様相の異なる建物でした。正方形の小さな窓が連続するシンメトリー（対称）な外観は、クリーム色と赤褐色で彩られ、低層部には神殿を思わせるグリーンの基壇です。それまでの作風とは逆の方向へ転換したのです。この建物は、ポストモダニズム建築の最初の作品と呼ばれています。

ポストモダニズムは、モダニズムが廃した装飾性、象徴性を回復させようとした運動です。氏は以後、古典的建築様式を彷彿とさせつつも現代的な、独特のデザインを展開します。禁欲的にさえ見えるモダニズムに対して、列柱、アーチ、石積み風外壁、レンガ色など、カラフルでリズム感があり、楽しげで親しみの湧くその手法は、建築界からは表層的だと批判を受けながらも、アメリカ各地で次々と庁舎や学校に実現していきました。アメリカという若い国にとって、ヨーロッパの古典様式はどこか借り物。それに比べて、重々しい歴史を引きずらず、あっけらかんとした折衷的デザインは受け容れやすかったのだと思います。典型的な作品が、ウォルト・ディズニー社の建物群です。白雪姫に出てくる7人の小人が、古典建築の彫像の代わりに建物の屋根を支える姿は、キッチュ（俗っぽく）でユーモラスです。氏は「ヒューマニスティックな（人間主義の）」手法を建築に取り入れようとしたと言っていますが、前述したプロダクトデザインにも共通するものがあります。

このグレイブス氏による建物が、日本で最も多いのが福岡です。ハイアットリージェンシー福岡、ネクサス百道レジデンシャルタワー、呉服町ビジネスセンターなどを見れば、そのスタイルが浮き上がってくると思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞

平成２８年（2016年）２月１８日　木曜日　（九州・山口）　26

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

大江宏と大濠公園能楽堂

福岡市の緑と水の憩いの場、大濠公園（中央区）には能楽堂が建っています。設計は大江宏氏。１９１３（大正２）年生まれで、38（昭和13）年に東京帝国大学の建築学科を卒業しました。父の大江新太郎は、日光東照宮の修理などを手がけた内務省の技師でした。戦後間もない昭和21年に設計事務所を設立し、建築家として活躍した一方、法政大学建築学科の礎を築いた教育者としても知られます。平成元年３月、75歳で亡くなりました。

氏は日本人としての空間感覚を、西洋からやってきた近代建築に映し込む困難な道程を、生涯をかけて模索し続けた建築家でした。その結晶のひとつが昭和58年に完成した東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂です。大濠公園能楽堂はその３年後に完成しました。

氏は能と能舞台について研究した長い文章を残しています。正面から鑑賞し、カーテンによって舞台と客席が絶縁されるオペラ劇場。それとはまったく異なり、いろいろな角度からの視線を持つ能舞台と見所（観客席）の関係、舞台・橋掛り・鏡の間の３空間からなる能舞台の特徴、舞台と橋掛りの角度についての考察など、深く切り込んでいく氏の文章には、学術的な側面と、それを能楽堂という建物に昇華するための建築家としての長い格闘が滲んでいます。

氏の言説で繰り返し語られるのは「時間」についてです。幕の開け引きで瞬時に切り替わる西洋的舞台と対照的に、徐々に始まって、現世と夢幻が取り結ばれ、徐々に終わっていく、能楽に流れる時間。そして能楽堂全体の設計においても、氏は時間を大切にしています。国立能楽堂の正門をくぐり前庭から玄関へ、そして広間、歩廊を抜けて見所へといたる道筋を、大小の正方形が進行する模をわたり歩くかたちで描きました。各所で切り替わって行く空間を経て、だんだんと能楽の場へ近づいて行く時の旅です。鉄筋コンクリート造のなかに木造の凛々しい佇まいが組み入れられているのも、建築の歴史という時間の重なりと言ってよいと思います。大濠公園能楽堂も同様の手法で設計されていますが、建物が小振りなぶん、正方形を45度の対角線方向に移動する面白さがさらにわかりやすく感じられます。

氏の仕事にはもっと大きな意味での時間も流れています。それは古代から現代にいたるまで日本文化が重ねて来た時間です。中国文化の強い影響を背後に、変革期、たとえば奈良から平安、南蛮文化の渡来、明治以降の西欧文化の流入を語りながら、大江氏は、変革に際して前の価値が切り捨てられずに「成層」ができていったこと、過去のものも最近のものもあらゆるところで今日を形成している状況が日本だと言っています。従って洋風和風の安易な折衷に走るのではなく、かといって西洋的視点への偏りも避け、文化的成層の上にある現代の日本建築を問い続けました。そして日本文化を「併存混在」という現象と捉え、建築と都市を考察し、設計に向き合ったのです。

戦前ナチスを逃れてドイツから来日したブルーノ・タウトが、それまで日本人がまったく評価していなかった桂離宮を絶賛した一方、装飾の多い日光東照宮を「いかもの」と酷評しましたが、日本人がそれを真に受けたことも氏は案じています。

併存混在を軸に、様式と装飾の問題はもっと積極的に捉え直されるべきだと言っています。建築家・丹下健三が国家的プロジェクトを都市計画的スケールで手がけ、建築は歴史の結果ではなく、建築が世界をつくるのだと宣言した姿とは対照的に思えますが、面白いことに２人は東京大学で同級です。

大濠公園の広々とした水面をはさんで反対側には、８歳年長の前川國男氏設計の福岡市美術館が建っています。大濠公園はウオーキングやジョギングで親しまれていますが、日本を代表する建築家の建物がどっしりと建つ、優れた文化的環境でもあるのです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞
平成２８年（2016年）３月３１日　木曜日　（九州・山口）　24

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

「青い目の近江商人」と西南学院大学

今年創立百周年を迎える西南学院の旧本館は大正10（1921）年に完成、現在は博物館として使われている煉瓦造の建物です。設計者はアメリカ人のW.M.ヴォーリズ。明治38（1905）年にキリスト教伝道のために24歳で来日し、京都YMCA会館建設に関わったのをきっかけに、設計事務所を開設。日本各地に教会、学校、ホテルなど1500件を超える建物を手掛けました。

華族出身の一柳満喜子（ひとつやなぎ・まきこ）との結婚は、NHK連続テレビ小説「あさが来た」のヒロインのモデルとなった広岡浅子の後押しがあったと言われています。日本に帰化した際はミドルネームのメレルに当て字をし、名を一柳米来留（めれる）と改めましたが、それは「米国から来て留まる」の意味だそうです。現在の近江八幡市（滋賀県）を拠点とし、メンソレータムの販売を始めた現・近江兄弟社の創立者の一人でもありました。「青い目の近江商人」と呼ばれ、実業家であるとともに、ハモンドオルガンを最初に日本に持ち込んだ音楽好きで多才な人物で、敬虔な清教徒としても知られました。

私立西南学院は宣教師C.K.ドージャー創立の旧制男子中学校を始まりとし、戦後は高校、大学を開設し、発展していきました。この建物の修復が終わったのはちょうど10年前の平成18（2006）年。それまでは長い年月の間に増築された、鉄筋コンクリート造の建物が両側に、また背面には渡り廊下が張り付いた状態でしたが、キャンパス再整備に際し、この建物の価値が再認識され修復される運びとなりました。

日本での煉瓦造建設は幕末に始まりました。関東大震災が起きた大正12（1923）年以降は煉瓦を構造体とした建設が激減し、鉄筋コンクリート造が主流となっていきます。従って西南学院本館は時代的に最も後期、その技術が大変高まったときの煉瓦造ということになります。そのおかげで、本来煉瓦造は壁が多く窓が小さいものですが、この建物の窓は大きいうえに数も多く、内部空間が非常に明るいのが特徴です。1階の壁の厚みは煉瓦二つ分あるので約45㌢ありますが、2階以上は一つ半の約33㌢と少し薄くなっています。その段差の部分に2階の床を支える木の梁が載せられています。1階はかつて事務室でしたが現在は展示室、2階は元と同じ講堂です。講堂は二層分の天井高を持ち、3階に相当する床がステージ以外の三方に設けられています。そこの手すりもオリジナルのまま。屋根を含むこれらの床は木造です。

修復に際して、残っていた図面と状況が異なっている部分も多く、また内装仕上げを撤去してみないと傾み具合がわからないということもあり、作業は慎重に進められました。構造である木部分は傷んだ部分を取り換え、補強されました。できるだけオリジナルの材料を残す方針に従って、外壁の煉瓦や一階のフローリングは一部を除き元の素材をそのまま生かし、白く塗られてしまっていた木部もペンキをはがしてヴォーリズらしい黒い保護塗料に戻し、窓の木枠もガラスも当時のままです。壁天井に用いられた漆喰も、ヴォーリズが好んだ配合だそうです。

実はヴォーリズがつくった設計事務所は、「一粒社ヴォーリズ建築事務所」として今も続いています。丁寧な修復の背景には、彼の志を受け継ぐ人々の真摯な取り組みがありました。所有者である西南学院大学がこの建物に価値を置き、歴史の継承を重んじたのも素晴らしいことです。

新たに建てられた建物の多くも煉瓦を外観に用い、ヴォーリズ建築との調和が図られています。そのおかげでキャンパス全体に独自の景観が生まれています。修復前の調査において、外壁の煉瓦をつくったのは博多窯業会社の番匠梅吉氏ということ、そして煉瓦には地元の土が使われたことがわかりました。この会社は現存せず、新しい建物群に使われている煉瓦は海外からの輸入ですが、その風合いの違いを比較して眺めるのも面白いと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

天神地下街 長生きするデザイン

世界で最も有名な地下街と言えば、カナダのモントリオールの「RESO」でしょう。総延長32㌔、ダウンタウンの12平方㌔の下に広がる、「地下都市」と呼ばれるにふさわしいスケールを持ちます。たくさんのオフィスビル、商業施設、ホテル、美術館などとつながり、地下鉄の駅だけでも7つを結ぶこの地下都市を、毎日50万人が利用しているそうです。冬の寒さが厳しい土地だけに、快適な全天候型歩行空間として発達しました。

東京、札幌、名古屋、大阪など日本の大都市の多くにも地下街が存在しています。日本で最初の地下街は、東京の神田須田町地下鉄ストアと言われています。最も古い地下鉄、銀座線の神田駅につながるかたちで1931（昭和6）年にオープンしました。しかし、ほとんどの地下街は戦後、都市が成長していく時代につくられました。

福岡市の天神地下街は1976（昭和51）年9月に開業し、まもなく満40年を迎えます。発案は昭和33年までさかのぼるそうです。後の40年代、天神交差点付近は路面電車、自動車、歩行者で日に日に混雑が増し、その緩和策として44年、具体的な構想に着手されました。

地下には上下水道やガス管などのインフラ設備がたくさん横たわっているので、それらとの共存が必要です。また検討の途中には地下駐車場の建設が加わり、距離も国体道路まで延長するなど、何度も計画が見直され、第17次案でやっと計画が固まったそうです。完成から29年後の平成17年には南に大きく延伸、地下鉄七隈線へ接続しました。それによって店舗数152店、面積約5万3千平方㍍に拡大、全国でも有数のスケールを誇っています。

また、他都市のものと比較して、天神地下街のデザイン性は群を抜いていると思います。円弧を描く石畳調の床、ゆったりとした通路の幅、統一感ある鉄製の店名看板。地上の給排気塔は彫刻のようにデザインされています。なによりも印象的なのが天井の、細かな唐草模様が施されたアルミの鋳造パネルです。その唐草のパターンは街路ごとに異なっていて、新しい南延伸部分の方が少し直線的でモダンな印象です。見た目の美しさだけでなく、照明やスプリンクラーの位置がパネルと一体化した、秀逸なデザインです。

「通路は客席、店舗は舞台、そして主役はお客様」という、舞台を意識したコンセプトのもと上記のデザインが展開されたわけですが、完成当初は「暗すぎる」と反対意見が多かったそうです。確かに通路はかなり照度がおさえられています。他都市のものは白い金属板天井が続く、明るいけれど素っ気ない空間がほとんどです。しかし天神地下街では、「客席」の暗さのおかげで全体に落ち着きが生まれ、店舗のひとつひとつがくっきりと浮かび上がり印象に残ります。「舞台」の店舗の内装はしばしば変わるわけですから、地下街全体のブランドイメージを維持するのは通路や階段などの、賃料を稼げない共用空間ということになります。

建設途中にはオイルショックが起き、建設費が約2倍になるという事態に見舞われてもなお、デザインの質を下げず、テナントの協力により入店保証金を上げて対応したという逸話も残るほど、掲げた方針が貫かれました。40年も経つと古びて見えるデザインも多いものですが、ここのシックな雰囲気はまったく色褪せていません。リニューアルせずに今に至る「長生きするデザイン」。たくさんの人が昼夜利用する、天神の顔であり続けている理由には、全天候型の利便性だけではなく空間の質に寄るところも大きいと思うのです。

だから、福岡市に来られた方が「街に活気がありますね」と言われたら、私は必ずこうお尋ねします。

「天神地下街はご覧になりましたか？」と。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

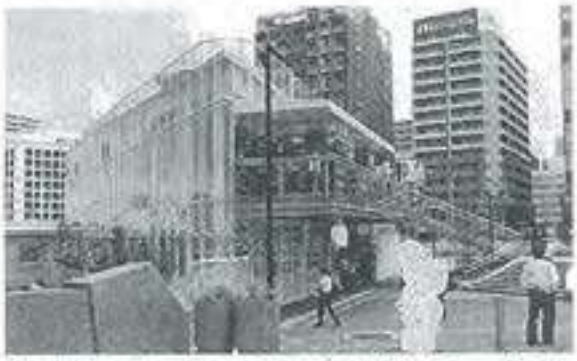
松岡恭子の一筆両断

福岡市の水上公園　仕組みと魅力

このコラムでは初めて、自分がデザインに関わったプロジェクトを紹介します。7月15日に福岡市の水上公園がリニューアルオープンしました。ここは市の街区公園としては最も古いものですが、都心にも関わらずあまり利用されていませんでした。地下にある下水道施設の工事に伴い、地上部分も再整備することになったのです。また、市が掲げる「天神ビッグバン」の第1号として、プロポーザル（提案に伴う事業選定）が行われました。注目すべきは、一見民間が参画しにくそうな「公園」という場所に、その力を導入する面白い仕組みがつくられたことです。

まず、大きさに制限があるものの、公園の中に民間事業者が自らの負担で建物を建て運営してよい、その代わりに地代を福岡市に払う―という方式が取り入れられました。一方、公園部分の再整備は市がコスト負担しますが、事業者がイベントなど使い方を想定し、それに則したデザインをしてよい、その代わりに事業者が管理運営も行うという構図です。公園と建物が響きあい、全体が活性化することが期待されました。福岡市が挑戦した、全国的にも珍しい仕組みです。

では私たちのチームが完成させた、プロジェクトの見どころをお伝えしましょう。敷地は三角形をしています。このうち二辺は2つの川に、一辺が明治通りに面しています。誰でも立ち寄りやすいように通り側を公園とし、2階建ての建物はその奥に、川に挟まれるかたちに配置しました。しかし建物を建ててしまうと、そのぶん公園面積は減ってしまいます。そこで建物の屋上を公園とつなぎ、誰もが自由に上がって行ける広場にしました。その結果、公共的な利用ができる面積は減らさずにすみ、さらに賑わいをつくる建物2層分の面積が増えた、というわけです。屋上にも木質系デッキ材がステップ状に張られ、徐々に登って舳先のような場所に達すると、そこは北の博多湾に向いています。長い歴史の中で、福岡が海と川で発展してきたことを痛感する瞬間です。水辺ならではの空間の広がりを楽しめ、日よけのテントが帆のように見えることと相まって、まるで船の上にいるかのように感じると思います。


リニューアルオープンした水上公園

一方手前の公園には芝生の丘があり、それを囲む白いリングはベンチでもあります。丘の上はイベント時のステージになりますが、2階へのアプローチも兼ねています。那珂川側には幅の広い階段がありますが、腰掛けて川を眺めるベンチとしても利用できます。敷地も建物も小ぶりではありますが、屋上も含め、すべての場所に一人二役、三役させて使い切っています。

夜の姿も魅力的です。公園の白いリングや、屋上広場のステップの足元には、間接照明が仕込まれています。柔らかなカーブや直線の光が日暮れとともに浮かび上がってきます。屋上の日よけテントも夜には光が当てられ、照明効果の一役をかっています。川の対岸から見ると、まるでパーティーをしている客船が停泊しているかのようです。

建物の内部でも、両側に川面が広がる素晴らしい開放感を楽しめます。1階のお店は建物の外周に、2階は公園側にテラス席を設け、屋外での食事も楽しめるよう工夫されています。

以前からこの公園に置かれていた、動く彫刻で知られる新宮晋氏による「風のプリズム」も位置が変わりました。昼には陽光の、夜には街の灯りをまといながら揺らめき、風を可視化してくれます。

江戸時代には博多部と福岡部の境界だった那珂川。人と人を隔てていた場所が、誰でも自由に集い、景色を楽しめる場所になりました。私はこれまで建築に加え、橋や公園、道路などの公共空間も設計してきましたが、いつも目指してきたことがあります。それは「デートの場所」をつくること。恋人同士で、夫婦で、家族で、仲間で、大切な瞬間を共有したいと思うような場所をつくること。あの人を連れて行きたい、と思う、日常とは少し違う空気が流れる場所が増えていくと、街はどんなに素敵でしょう。私にとって、それが景観デザインの神髄です。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞
E 家 族　平成２８年（2016年）９月８日　木曜日　（九州・山口）　24

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

景観の一部 西鉄バスのデザイン

リオオリンピックの閉会式での日本選手団のユニホームを覚えていますか？　赤のブレザーに折り目のついた白のスラックス。生真面目で日本人らしいと見るか、それとも個性や新しさがないと思われたでしょうか。私の頭にまず浮かんだのは、誰がデザインし、誰が選んだのだろうかという疑問でした。半世紀来、変わっていないように思われたからです。調べてみたところ、製作は高島屋ということしかわかりませんでした。軽量、吸汗速乾性など「機能」は紹介されても、肝心のデザインについては大した説明がありません。日本は、世界に誇る数々のファッションデザイナーを生んできた国です。デザイナーもデザインの解説も公開されないのは残念で、これは発注側の問題だと思いました。

最より質の時代といわれて久しいですが、現代における質とは当然機能だけではなく、ストーリーが埋め込まれていることだと思います。どんな背景を持つ人がつくったのか、どんな伝統が支えているのか、どういう風土から生まれたのか、何に挑戦して生み出されたのか。モノの乏れない時代に、人が心を寄せるのはそういうストーリーではないでしょうか。そのストーリーを紡ぎ、表現するのがデザイナーの仕事です。

デザインはアートとは違います。アートとは全く新しい「ものの見方」を示し、時に既成概念を破壊したり価値をひっくり返す行為でもあります。対してデザインは人の営みの延長上にあります。目的を設定し、機能を包含して調和を取りつつ、多くの人の心を捉える姿にまとめ上げる、「価値を増大する」行為です。だからデザインを担当する側だけでなく、発注する側の覚悟も重要なのです。優れたデザインの半分は、発注者の功績と言っても良いくらいです。

西日本鉄道が百周年を機に、路線バスのデザインを変えるプロジェクトを始めたのは平成18年でした。デザインを依頼されたのは、ダーウインLLP（有限責任事業組合）。建築、インテリア、プロダクト、グラフィック、Webなどさまざまな分野にまたがった「実際型」のデザイン組織です。メンバー13人のそれぞれは独立した存在ですが、各自のスキルを融合させることによって企業や自治体からの依頼に取り組んでいます。西鉄バスはグラフィックデザイナーの平松恵悟、かねこしんぞう、後藤宏、プロダクトデザイナーの松熊伸幸、クリエイティブディレクターの原一寛と、建築家である私の6人が担当しました。

福岡市内を走る西鉄バス「スマート ループ」

北部九州を走る西鉄バスの台数は国内最多で、2千台を超えます。私たちはその西鉄バスが人や街を快適にする環境の一部、景観の一要素になるべきだと考え、公共交通機関として必要十分に目立つことと、都市の背景として街に溶けこむことを両立させようと試みました。そしてそれを「地のデザイン＝能動的調和」と呼びました。外装デザインのコンセプトは「SMART LOOP（スマート ループ）」。バスとしては珍しい、縦ストライプに見えるこの5色のラインは、実は根までグルリと回っているループ（輪）です。バスをビルの窓から見下ろす機会も多いことへの回答です。

色は、自然が身近にある福岡の街の色を研究し、海や山、季節の花などから選び出しました。地のホワイトも、濁りのない清潔感ある白色を選びました。複数台を同時に見る状況でも爽やかな佇まいで、また「いくつかの色が縦に描かれているバス」と、人が人に伝えやすいこともこのデザインの長所だと考えています。台数は限られましたが、「友人宅のリビングルーム」をテーマに内装も手がけました。

最近、共同制作を意味するコラボレーション、略して「コラボ」という言葉をよく聞くようになりました。分担するだけでなく、刺激しあい、議論を重ね、デザインの次元を高めていくのが優れたコラボで、そこには発注側の役割もあるのです。このプロジェクトでは職能の異なるデザイナーが一緒に取り組むことで、さまざまな角度から「西鉄バスのデザインとは」という問いに向き合うことができました。また発注者は、私たちがたくさんの案から方向性を絞り込むところまで真剣に寄り添い、大枠が決まった後の細かな調整はおおらかにプロに任せてくれました。

市民の日常の足である路線バスは決して収益性の高い事業ではなく、全国的に見ても昔のままの姿で走っています。デザインをリニューアルしたこの取り組みは、業界を牽引する企業としての挑戦でした。運行開始した平成20年から8年。SMART LOOPのバスがだんだん増えてきて街の景観が良くなってきたといわれたら、発注者の心意気だと応えることにしています。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

私の両親は見合い結婚ですが、初めてのデートの待ち合わせ場所は天神ビルの1階だったと、子供のころから聞かされてきました。この建物が、誰でもわかる天神のシンボルだったからだろうと思ったものです。

建築主は電気ビル、設計施工を手掛けたのは竹中工務店、竣工は昭和35年です。18カ月という短い工期で、地下3階地上11階の鉄骨鉄筋コンクリート造を完成させたのは、竹中工務店が得意とした「順逆工法」の力でした。

このビルの地下には変電所があります。一般に地下をつくると工期が長くかかりますが、変電所をできるだけ早く稼働させるために、短い工期への挑戦が必要となったのです。地下3階と地上1階分のボリュームを地上でつくり、その重みを利用し建物を沈めていく工法です。沈んでいる最中も2階以上の建設を続行できました。周辺の畑には日盛りが設置され、一日20センチずつ沈んでいく様を観察するのは当時の市民の大きな関心事だったそうです。

今年8月に開催した福岡建築ファウンデーションのイベントでは、建設時と完成時を記録したフィルムを上映しましたが、当時の社会がこの建物にいかに大きな期待を寄せていたかが伝わるものでした。

設計者は竹中工務店九州支店設計部長だった故本博行。生涯れは日匠建築家・丹下健三と同じ大正2年。昭和7年に入社後、大阪で住宅や茶室のデザインに秀でた小林三郎の下、修業を積みました。日本の風土にあった伝統的な建築のあり方に向き合った経験が、後に、統一された材料と型で構成する、落ち着きある都城の効いたデザインへと向かう源になったと考えられています。天神ビルは当時高さでは日本第2位、延べ面積は神戸以西で最大でした。それだけでなく、戦後の復興を街並みに記す責務を、真摯に深く受け止めた設計者でした。

特徴は、外壁のタイルと窓サッシ、そして1階のアーケードです。茶褐色タイル55万枚は佐賀・有田で焼かれました。微妙に濃淡をつけた6枚がワンセットになり、外壁の四面全体に貼られました。サッシはステンレス製、四隅が曲線になっています。タイルに加え、このサッシを絶妙なバランスで繰り返し用いる一貫性ある手法が、前述した若本のスタイルです。1階のアーケードは、天神を代表する3つの通り沿いに設けられ、誰でも身を寄せられるフレンドリーな公共空間を提供しています。

建設中、徐々に現れ始めたタイルの色が、郷心には濃すぎるのではないか、という議論が新聞で取り上げられたこともありました。しかし完成後はその落ち着いた色合いが好評で、全国からこのタイルを、と注文が入ったそうです。

天神ビル完成時は、オフィスだけでなくさまざまな用途が入った複合ビルとしても注目されました。1階の九州電力サービスセンターには、電機メーカーのさまざまな家電製品が陳列され、豊かな生活への憧れを喚起しました。地下1階の食堂街「ニューフクオカ」には、寿司、天ぷら、ビアホールなど種々の飲食店が並びにぎわいました。この間には建築のデザインとの統一を図るため、デザイナーの柏崎栄助がアートディレクターに起用され、什器、グラフィックを含めたトータルな室内デザインが完成しました。3階にはクリニック、10階には西日本婦人文化サークルに加え、結婚式場や美容室もつくられました。

完成して58年。その間に建築の法令も変わり、大きな地震もありました。設備機器は必ず老朽化しますし、省エネを重視する時代にもなりましたが、天神ビルではそれら一つ一つに対策がとられてきました。外壁タイルの劣化チェックはもちろん、耐震化、水の再利用に至るまで、所有者と施工者が手を携えて建物を守ってきたおかげで、変わらぬ姿を見せてくれています。長期にわたって適切な保全と、優れた改修を実施してきた建物に贈られるBELCA賞(ロングライフ部門)を受けたのもうなずけます。

私の両親のように、孫たちに青の思い出を語ることができる建物が存在し続けていること。それは市民にとって建物にとっても幸せなことではないでしょうか。

昭和35年に完成した天神ビル

幸せな建築 天神ビル

松岡 恭子(まつおか・きょうこ) 昭和39年、福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大工学部卒。東京都立大大学院修了、コロンビア大大学院修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ主宰。建築、土木、プロダクトなど幅広くデザインを手がける。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長として建築の面白さを市民に伝える活動も続けている。

産経新聞
平成２９年（2017年）１月１９日　木曜日　（九州・山口）　24

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

建築楽しむ機会が増える九州

昨年12月、鹿児島市で「オープンハウスカゴシマ」が開催されました。優れた近現代建築を見学できるイベントで、2日間で20を超える建物が公開されました。自由に見学できるもの、ツアーに参加して説明を聞けるものがあり、市民が身近な建築を、より深く知る良い機会になったことと思います。大学などで建築を教えている先生を中心に立ち上がった実行委員会による企画です。講演を頼まれたこともあり、私も参加しました。

中央公民館や県立博物館など公共建築だけでなく、加治屋町教会やザビエル教会など宗教建築、南日本銀行本店などの民間建築も見学でき、初回としてはなかなか充実した企画でした。関係者の懇親会は「大正桜秀館」という洋館で行われました。かつては近くの旅館の所有で、レンタカー会社の敷地内に移築された小さくてとてもチャーミングな建物です。街の真ん中に残されている姿に感動しました。

現在、鹿児島県立博物館として利用されている建物は昭和2年、県立図書館として完成しました。他にも県立甲南高校（昭和5年）、鹿児島県教育会館（同6年）など、どれも威風堂々とした近代建築で、教育に力を入れてきた鹿児島県の歴史が浮かび上がりました。西南戦争や第2次世界大戦などによる戦火で、城下町の佇まいは失われたものの、こういう昭和初期の建築を通して地域の歴史や魅力を知るのは素晴らしい体験でした。

ところで熊本では平成22年から、「けんちく寿プロジェクト」という活動が続いています。熊本にある建物の経年を人生に例えて、二十歳や還暦を「寿ぐ」プロジェクトです。ここも、熊本大学で建築を教える先生を中心にした実行委員会の取り組みです。

初回にお祝いされたのは二十歳を迎えた熊本北警察署。誕生時の知事だった細川護熙元首相、設計や施工などの関係者、近所の住民からのお祝いメッセージが、屏風のようなボードに綴られ、記念品として贈呈されました。見学会や当時の関係者の座談会が開かれるなど、楽しいイベントだったそうです。

他にも「厄晴れ」がお祝いされた建物もありました。最も古いものはウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の九州学院高校講堂兼礼拝堂で、「卒寿」でした。他にも「熊本建築年齢一覧」がウェブサイトで公開されていて、100歳を超える建物が10もリストアップされています。

福岡では、私が理事長を務めるNPO法人福岡建築ファウンデーションがさまざまな企画で建築ツアーを行っています。建築に詳しくない人でもわかりやすい解説が付いていると好評ですし、子供向けツアーを開催することもあります。

これらの活動に共通しているのは、建築は社会的な資産であり、その魅力を伝えることで市民の街への愛情や関心が深まることを目的としている点です。以前このコラムで、ロンドンの「Open House」という建築を公開する大規模なイベントを紹介しましたが、そのコンセプトに賛同し同様のイベントを行っている都市は年々増え、ヨーロッパを中心に世界で30を超えています。

九州でもこういう取り組みがさらに増え、建築を楽しむ機会を通して街の魅力づくりを考える風土が育っていくことを期待しています。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞　　平成２９年（2017年）６月２２日 木曜日

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

都市の文化力とは何か

先日、かねてより行ってみたいと思っていた、米国オレゴン州のポートランドを訪ねました。日本で今、都市開発に関わる人でこの街を知らない人はいないでしょう。ダウンタウン街区はその一辺が約60㍍と短く、歩きやすい、歩いて楽しいと評判です。また古い工場や学校を利用して、すてきなホテルやオフィスに生まれ変わらせたプロジェクトもたくさんあります。あちこちに公園があり、平日の日中でも、たくさんの人がくつろいでいます。

ポートランドは環境に優しい街、住みたい街などのランキングで、常に全米でトップレベルに選ばれることで有名です。公共交通機関の充実と自転車利用の促進による車に依存しない生活、地産地消を徹底している飲食店の数々、住民自らがさまざまに参加する地域活動など、今の日本が目指す姿の多くを実現しています。チェーン店が少なくローカルな店が愛され、地元のものづくりを応援する気質が行き渡っています。住みやすい街だから、働き手も魅了しやすいのでしょう、ナイキやコロンビアスポーツウェアなど世界的な企業も本社を置いています。

住みたくなる街の背景には、１９７０年代に州知事の先導下、土地保全政策が敷かれ都市成長境界線が設けられた影響が大きいといわれています。市街化はここまで、というラインを明快に引いたのです。これにより過度の開発が防がれただけでなく、市民は身近な生活圏の中に豊かな自然や農地を持ち、都会の便利さと自然のどちらも享受できる街となりました。

といっても一旦決めたことを変えないわけではなく、このラインの見直しは5年ごとに行っているそうです。

訪れて肌で感じた最も重要なことは、「他と違うことに価値を置く」というスピリットでした。英語で「ｗｅｉｒｄ」というのは「変わっている・奇妙な」という意味ですが、それをアイデンティティーにしているのがよくわかったのです。食事の内容とインテリアや音楽が、まったくマッチしていない面白い店とか、普通は見られないパスタと具材の組み合わせだとか、不思議な試みにあふれ、誰もが目指したがる洗練や流行を追っていないのです。他と異なることを恐れず、「Ｗｅｉｒｄ」を合言葉にしているのがこの街でした。

一般人が自分の空き時間と自家用車を使って、人を運ぶＵｂｅｒ（ウーバー）を利用した際には、ドライバーに必ず「あなたはどこの出身？」と尋ねてみました。その一人が「ポートランド出身ではないけど、ここには文化があるからやってきたんだ」と答えたことが印象に残りました。

文化とは何か。ひとことで言うとしたら、それは差異ではないでしょうか。よそと違う、他国にはない、ここにしかないもの。世界中を覆う大きな資本やシステムが、私たちの身辺をどんどん埋めていくこの時代に、「差異」は相当な覚悟をもたないと保持できないと思います。

しかし、長い時間を経ないとつくりあげられない「伝統」とは違い、差異は意志を持った瞬間からその獲得を目指すことができるのです。言い換えれば、意志のないところに、差異は、文化は、もはや残ることができない時代なのではないでしょうか。

よその街を模したり目指したりするのではなく、独自の道を歩む強い思いと誇り。都市の文化力とは何か、と日ごろ考えていた問いに、明快な答えを得た思いがしました。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるＮＰＯ法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

土木の夢と海上橋―新北九州空港連絡橋

土木工学という分野は、建築と近いようで随分異なります。特定の誰かのためにつくられることはありませんし、基本的には税金を投じ社会基盤として整備されるものです。もちろん規模も建築の比ではなく、建築のように設計者の名前が前に出ることもありません。

土木工学が扱う対象は多岐にわたります。道路、ダム、河川、海洋、橋梁、砂防などの多種多様な構造物。私たちの暮らしに、それらと縁のない日は一日もないことでしょう。利便性だけでなく、自然災害から私たちを守るのも土木の重要な役割です。

古来、橋を架けるということは人々にとって大きな意味のあることでした。深い谷に、広い川に橋がかかることで、それまで行けなかったところ、行きにくかったところに行けるようになるわけです。労苦の多かった往来が格段に楽になると、物流も変わります。そう考えれば、社会に大きな変化をもたらしてきた構造物だと、納得していただけるでしょう。もとより近づきにくい場所に建設するのですから、失敗を繰り返しながら技術を磨き挑戦したはずです。だから橋の姿は文明のシンボルでもありました。架橋はとても「夢のある仕事」と言えると思います。

福岡県には空港が2つあります。そのひとつ、北九州空港が現在の苅田沖の人工島に移転したのは、かつての空港が山間に位置し、天候不良の影響を受けやすかったのが理由のひとつでした。また人工島は、関門航路に溜まる土砂の処理場を兼ねていました。そうして新空港のための人工島建設が進む中、島へのアクセスとして新北九州空港連絡橋の建設プロジェクトが始まりました。

福岡県が北九州市とともに手掛けることになったこの橋は、それまで県にとって経験のない長さの海上橋。海での建設の難しさは陸に架けるのとは段違いで、どのような構造、工法を選択するかで建設費も大きく変わります。そこで平成4年、様々な専門家を招いた、技術専門委員会が設けられました。

委員会には主に九州の大学から、地盤・基礎工、耐風、耐震、海象、コンクリート、構造、景観の研究者が集められました。そしてその委員が中心となった分科会が設置され、さらに多くの研究者が分野毎の課題の検討を重ね、それを専門の建設コンサルタントたちが支えました。行政側の責任者かつ長大橋の専門家として、明石海峡大橋を代表とする数々の海上橋を建設した本州四国連絡橋公団からも、技術者が招かれました。九州を代表することになる海上長大橋の完成のために、たくさんの実験、分析、比較、検討がなされ、それが実際の設計にどんどん反映されていったのです。

この委員会は後に設計施工委員会と名称を変え、17年まで継続しました。大地から海を越えて島に渡り大空に飛び立つという、ダイナミックな利用者の体験を橋で表現する夢。その夢の実現のために多様な知が結集しプロジェクトの基盤を固め、支え続けたのです。

私が平成5年、このプロジェクトに関わる幸運を得たのは、委員会で景観委員を務められていた九州大学の竹下輝和教授（現名誉教授）の導きによります。当時ニューヨークにいた私は九州の事情に疎く、橋のデザインをやってみないかという問いに、きっと細い川に架かる数十㍍くらいのものだろうと思っていました。ファックスで次々と送られてくる図面資料を見るうち、長さ2100㍍の海上橋とわかり、驚愕したのを忘れられません。しかしそのときは、どれほど長い期間このプロジェクトに関わることになるのか、私だけでなく誰もわかっていませんでした。結局18年に一般開通するまで13年間、デザイン担当者として携わり続けることになりました。

次回は、この橋のデザインについて書きたいと思います。

大プロジェクトとなった新北九州空港連絡橋（©Kouji Okamoto）

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和38年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

平成３０年（2018年）１月２５日　木曜日　（九州・山口）　26

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

景観をつくる土木―新北九州空港連絡橋

アーチが美しい新北九州空港連絡橋
（©Kouji Okamoto）

橋の役割が「渡る」ためであることは当然ですが、この橋ではその姿が、空港島に至る道筋のゲート的存在となることが重視されました。大地から海を越えて島へ、そして大空に飛び立つというダイナミックな体験を橋で表現する、そのためにはどんなデザインがふさわしいのか。それは2100㍍という長さをいかして取り組む景観デザインの挑戦でした。

専門家からなる技術専門委員会のもと、橋の景観を担当する景観分科会で4つの方向性がつくられました。アプローチするときに印象的なデザイン、周辺の島々や山と調和するデザイン、環境の中でシンボルとなるデザイン、そして自動車のためだけでなく歩行者も大切にするデザインです。

次に4つの基本方針が決められました。最初に「コラボレーションデザイン」です。それはデザインの決め方についての方針でした。建築系のデザイナー、土木系エンジニア、学識経験者、コンサルタント、メーカー、そして行政機関が協力し議論しながら、デザインを決定する、そういうプロセスを基本としました。デザイナーが勝手に決めるわけではないということです。

「トータルデザイン」は、橋の主要な構造部に加え、照明柱や手すりといった細部にわたるすべての要素に、一貫したオリジナルデザインを追求することを意味しています。

「ヒューマンデザイン」では、車だけでなく歩行者にとっても快適で心地よいデザインを目指すこととしました。

最後に「モデュロールデザイン」です。モデュロールは聞きなれない言葉だと思いますが、設計における基本的寸法単位のことです。主要な構造から決まる寸法、具体的には橋を支える柱である橋脚の間隔を基本単位とし、それをリズムとして手すりなどのあらゆる要素の配置を決め全体の調和を図りました。

このような方針をもって設計された橋はきわめて珍しいと思います。通常は専門ごとに縦割りで進められることが多く、また主要構造部は重視されても手すりや照明柱などは軽視されがちだからです。私は橋をデザインしたのは初めてでしたが、関わった長い期間、次々とデザインする箇所が現れ、難しい課題に向き合いました。しかし上記の方向性と方針があったおかげで、必ずこの基本に立ち戻りながら、行政、エンジニアと協同して取り組むことができました。

さて、この橋のハイライトは中央部に架かるアーチです。遠くから全体を眺めても、橋を渡る目線からも、このアーチが美しいかどうかが印象を決めてしまいます。そのため私はたくさんのデザイン提案を行い、構造の担当エンジニアとともに検討を重ね、その結果、よそにはない非常にユニークなアーチを実現することができました。

まず、このアーチは断面変形をしています。輪切りにしたときにあらわれる形が場所によって変わるのです。詳しく言えば、両端の根元の部分は長方形ですが、中央の一番高い部分は六角形に変化していきます。それによって面の数が増え、緩やかな曲面が生まれ、複雑な陰影をまとうのです。そして根元から頂上に向けて細くなっていくように見える効果も持つ、とても優雅なアーチが生まれました。

メンテナンス用の金具などもすべて外から見えないように工夫し、アーチだけがくっきりと浮かび上がります。また付近には照明柱を設置せず照明をガードレールと一体化して存在を消したことも、アーチの存在を際立たせるのに役立っています。さらに、構造的工夫により、アーチから桁を吊るす部材も繊細なケーブルにすることができました。施された色は、空に、そして背後の山々に対してもくっきりと美しいカーブを描くよう、彩度の高いグリーンが選ばれました。

周辺環境と一体化しながらも新しい景観をつくる。そして意匠と構造が手を携えて挑戦する。この精が生まれる背景にはそういう精神が満ちていました。

次は「訪れたくなる橋」への工夫について書きたいと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

訪れたくなる橋―新北九州空港連絡橋

視界が変化する新北九州空港連絡橋の歩道部分（©Kouji Okamoto）

長さ2・1キロの新北九州空港連絡橋には、歩道も付いています。私がプロジェクトに参加した頃、後にこの歩道の存在が橋全体の価値の分け目になるとは、私も含め関係者は誰も想像していなかったと思います。

橋の中央部にあるアーチ、橋脚、桁などの主要な構造部、また手すりや照明柱などのデザインを終えた頃、次に取り組むことになったのが橋の入り口になる部分でした。橋の高さは地上から約13メートルのところにあり、車はランプ（斜路）を使って上っていきます。基本計画では、そのランプの脇に歩行者用のスロープが描かれていました。地上から橋の上に至るまで300メートル以上歩かなければならない、単調で真っすぐな坂道です。

橋の入り口は　新松山地区と呼ばれる埋立地のいちばん端にあります。そこへ至る地上の道路は橋付近で突き当たりになる上、周辺の埋め立て予定地の利用内容も、当時は未確定でした。さらに、橋へ上るオンランプと、空港から戻る車が下りてくるオフランプの間は、将来東九州自動車道と陸橋で結ぶときのために広く空いていました。

つまりこの基本計画は「一体誰がここまで歩いてきて300メートルの坂道を上り、さらに2・1キロ歩いて空港島に行くのだろう」という疑問を、私にもたらしました。そこからこの橋の新たなテーマが生まれました。「訪れたくなる橋」です。単に渡るという機能だけでなく、歩いてみたい、渡ってみたい、なによりそこに行ってみたいと思ってもらえるような場をデザインしようと思ったのです。

まず取り組んだのは真っすぐな歩道を、歩行が楽しい回遊性のあるものに変える工夫でした。歩く方向が変わったり、カーブから直線に変わったりすると、視界が変わり体験に変化が生まれます。空き地になっている部分に盛り土をし、歩道の一部にすることを考えました。さらに土を緑化すれば、橋の入り口が潤いのある「玄関」に変わると考えました。盛り土にはスロープに加えて幅広い階段をつけ、座って風景を眺められるようにし、コーナーの擁壁コンクリートには段差を作り、ステージのような場を与えました。散策しながら橋の上に到達すると広場が迎えてくれ、オリジナルデザインのベンチで休憩できます。また、素早く橋の上に到達するためのショートカット階段も提案しました。

アイデアを考えながら、私は次第に「公園のような空間」を目指していました。空港に行くという目的がなくても、気軽に遊びに行くことができる公共空間。海と空と橋がつくるここにしかない気持ちの良い場所。考えれば考えるほど、それが重要だと思えました。そうしなければ歩道をつくっても誰も利用せず、ランプ間の空き地はフェンスで囲われた味気ない場所になると確信したからです。

しかし当初、これらの提案はなかなか受け入れてもらえませんでした。機能を満足させるのが第一、という土木の思想に対し、場の魅力を高めるという定量化できない提案を判断するのは、発注者にとって難しいことだったからです。しかし、景観分科会の力も得ながら、また技術的な検討をコンサルタントと一緒に粘り強く重ね、少しずつ理解を得ることができました。

平成18年3月の開通からちょうど12年がたちました。私は今も時々様子を見に行きます。乳母車を押しながら散歩する家族、ボール遊びをする子供たち、ベンチで語り合う若者、釣りをする人もいればバーベキューを楽しむ人たちも見かけたことがあります。ウオーキングも盛んなようですし、「道路に駐車場はつくれない」と言われながらも提案を続けた駐車場もよく利用されています。周りに宅地があるわけでもなく、地図にも「公園」と記されているわけではありません。しかしそういう場をつくっておけば人々は見つけて使ってくれるのだと、訪れるたびに大きな驚きと喜びを感じます。

百年の利用を考えて多くの知恵が結集し、設計され建設された橋。これからも長く、人々に愛される橋となることを祈ります。ぜひ一度訪れていただければと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

平成30年(2018年)7月26日　木曜日　(九州・山口)　26

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

世界一の美食の街を訪ねて

「世界一の美食の街」として知られるスペイン、バスク地方のサンセバスチャン。そう知られるようになったのは最近のことです。なぜ短い期間に、世界中から来訪者が絶えない街になったのでしょうか。

ミシュランの星付きレストランがたくさんある▽スペインで初めての4年制の食の大学がある▽シェフ同士がレシピを公開し切磋琢磨を続けている▽料理好きの男性が腕を振るえる美食倶楽部がある―などで知られています。詳しくは高城剛氏著「人口18万の街がなぜ美食世界一になれたのか」が参考になりますが、私もまちづくりのヒントを得たいと思い、先月行ってきました。

この地方ではピンチョスという指でつまんで食べる軽食が有名です。扉も開けっ放しのバル（居酒屋）には長いカウンターがあり、その上にピンチョスが盛られたたくさんの大皿が並んでいます。好きなものをオーダーし、ほとんどの人が立ったまま食べるのです。そしてちょっと食べては次へと、いくつもの店をはしごするのがスタイル。歴史を感じる旧市街の狭い道の両側に、そんなバルが数えきれないほど、ひしめいています。

どの店にどんな個性が光っているかは本や雑誌にたくさん紹介されていますし、もちろんインターネットで検索することもできます。私が注目したのは、この街に「体験」を提供するメニューが豊富な点でした。

私が参加したひとつはｍｉｍｏという会社によるものでした。バルのはしごがお勧め、といわれてもスペイン語は話せないし、どの写真を見てもカウンター周りは混雑していて、うまく注文できるかしらなどと不安になります。参加したピンチョス試食ツアーは本当に満足度の高い内容でした。事前にネットで申し込んだ参加者は、スコットランドとオーストラリア、そして私たち日本から計10人。3時間で6軒のバルを巡りました。

ツアーガイドは博士課程に在籍する地元大好きの食いしん坊さん。建築を通して街の歴史を説明しながら、つぎつぎとバルに入って注文。「この店では絶対これを食べて！　なぜなら…」と情熱をもって説明してくれます。旬の食材、お店の歴史や特徴をわかりやすく教えてくれるので、胃袋も好奇心も満たされます。お互い知らなかった参加者同士も、最後には大の仲良しになりました。

こうしたツアーには、毎日開催されるもの、要望によって構成するものなどがあり、行き先も近隣の農家、ワイン醸造家などさまざまです。

もうひとつご紹介しましょう。前述した美食倶楽部は会員制が基本です。会員になれば倶楽部のプロ仕様のキッチンで好きな料理をつくり、併設されている広い食卓でほかの会員やゲストにふるまうことができます。歴史ある倶楽部は何年も入会を待っている人がいるそうで、星付きレストランのシェフも会員で他の会員と一緒に楽しく料理をしている倶楽部もあるとか。人の繋がりを豊かにする、コミュニティーを育む施設として、見たくてたまりませんでした。

そこで申し込んだのが「美食倶楽部での料理教室」。ガイドのサンセバスチャン在住の日本人女性、山口紳子さんはまず街をぶらぶら散歩しながら歴史を語ってくれました。市場や路面食品店で旬の野菜や魚介を選ぶ楽しい買い物です。そしていよいよゲストとして美食倶楽部へ。現れたのは、経験豊かなプロのシェフです。彼から教えられながら素材を切ったり炒めたりし、料理が出来上がっていきます。ここでしか収穫できないと聞き購入した豆は、自分で料理すると、おいしさが深まります。みんなで食卓を囲めば、今日初めて会ったとは思えない親近感です。食べる、という行為が非営利の倶楽部も舞台にしながら、こんなにたくさんの側面から演出されていることに感動しました。

情報があふれている現代社会。旅は準備が楽しいと言いますが、ネットで調べているとキリがない気がすることもあります。たくさんの情報を得て選びたいけれど、欲しいのは実は情報ではなく満足のいく実体験だということを考えれば、情報を編集し体験に結び付けてくれるサービスが重要なのだと納得がいきます。

ネット上は、真偽入り混じるニュースや口コミが大量に行き交います。情報発信は必要なことですが、それにとどまらずリアルな体験に結び付けるサンセバスチャンの例は、観光まちづくりの参考になると思いました。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるＮＰＯ法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

平成30年(2018年)10月29日　月曜日　産経

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

北九州市の英断と学生パワー

大学で建築デザインを教えていると、自分が学生だった頃とは随分変わったなあと思うことがあります。例えばエコロジカル、つまり自然環境と調和し、サステナブル（持続可能）な建築を探求するのは、必須となりました。また社会観念が複雑になってきたのを反映し、「まちづくり」という言葉が学びの場にあふれるようになりました。既存建物を活かすリノベーション、コンバージョン、増築など、設計の手法も広がっています。

さらに社会実験やワークショップなどを通して、地域とリアルにつながる取り組みが、一般的になりました。若い世代の意見や提案を聞きたいという地域からの要望も多く、学生にとっても社会との接点が増え、視野が広がる機会になっています。

以前このコラムで紹介した北九州市八幡市民会館の再利用が決定したのも、背景には少なからず学生たちの頑張りがあったようです。北九州市は5市合併の経緯から公共建築が多く、その見直しが図られています。北九州で育った日本建築界の巨匠、故村野藤吾が設計した八幡市民会館もその対象となっていました。地域の人々は、長年の思い出が積もるこの建物の存続を希望したものの、一体どんな利用に再生したらよいのか、改修費用はどれくらいかかるのかという壁にぶつかっていました。

そこで、思いを共有する市民、企業、大学などが連携して「八幡市民会館リボーン委員会」が組織されました。その取り組みの一つとして、大学生の提案を募る企画が生まれ、九州、山口にある10大学14チームが参加する大きなイベントになったのです。建築を学ぶ学生たちは実際に建物を見学し、外観は保全しながら内部空間を活用する方策を考えました。

この取り組みは次のような教育的意義を持っています。まず、村野藤吾の調べこの建物がなぜ評価されるのかを知る、それは日本の現代建築史を学ぶことです。次に、地域の未来に必要な「用途」を考えることは、建築に魂を吹き込む重要なステップです。そしてハードの良さを損なわずに改修や増改築を検討するのは、空間の良さを感じ取るだけでなく構造、設備設計も学ぶ機会になります。

平成26年12月、すべての提案が集められ合同発表会が行われました。各チームそれぞれ独自のコンセプトを打ち立て、大きな模型やパースを駆使した力作ぞろいです。用途についても、製鉄など八幡の産業史を伝える美術館、隣接する病院の患者も利用できる健康づくり施設、子育てセンターなど、実現したらいいなと思える魅力的な内容が並び、彼らにとって充実した学びの機会となったことが伝わってきました。地域の方々に加え、北九州市役所からも発表会に参加、皆さんとても感心しておられたそうです。その後も委員会は市に対し粘り強く提案を続けました。そしてついに今年の8月、市が埋蔵文化財センターを移転するかたちで再利用する決定を発表したのです。学生たちのパワーが、その決定へ至るきっかけの一つになったと想像されます。

未来へ向けて見たこともないような新しい建築、斬新な空間を想い描くのは、心踊ることです。それは常にわれわれ建築家の原動力であり、学生にとっても夢であるはずです。しかし人口が減少し空き家が増える社会では、既存の建物を未来に向けて活かすことも重要です。学生たちの関心が新奇性だけに偏らず、地に足のついた思考に向くのは、日本社会が成熟してきた証とも言えます。

そして何より北九州市が委員会の一連の動きを受け止め、保存活用へと舵を切ったことは高く評価されるべきことです。オリジナルの魅力を損なわずに、新しい用途に適した改修を施すのは容易な仕事ではないでしょう。さまざまな知恵や技術が必要になると予想されますが、市の英断を応援しようと手を挙げる研究者や実務家は少なくないと思います。やり方によっては学生が研究論文を書くことも可能でしょう。そういう協力の構図ができれば、官民学が手を取り合って実現したプロジェクトとして、さらに全国に誇れる事例になると楽しみでなりません。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

平成３１年(2019年)１月２８日　月曜日　産経新聞

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

分散した宿 ―イタリアの取り組み

分散した宿、と聞いてどんな場所を想像しますか？通常のホテルはフロント、客室、レストラン、ラウンジなどが一つの建物の中に配置されていますよね。それらをいくつかの建物に分散させたのがイタリアの「アルベルゴ・ディフーソ Albergo Diffuso」です。発祥はサルディニア島、現在はアルベルゴ・ディフーソ協会が認定した宿がイタリア各地にあります。昨年私が訪れたのは2カ所で、ローマからレンタカーで向かいました。緩やかな緑の起伏が続く田園風景のなかに、時折建物が密集して建つ丘陵地が目に入ります。滞在したのはどちらも、そういう丘の上に張り付いた小さな村でした。

曲がりくねった道を登り村の入り口の小さな広場に到着しても、どこがフロントなのかわかりません。電話してやっと出迎えられ、石積みの壁に沿って細い道を歩き、泊まる場所に案内されました。石階段をのぼって玄関扉を開けると、古い暖炉の脇にイタリア語の本が並び、壁には絵皿が掛けられ、木の大きな梁が覗かれた、宿というより誰かの思い出が詰まったまさに「家」です。窓から見下ろす丘の下は、どこまでも続く緑と遠くに霞む川のきらめき。きっとここに暮らした人が毎日眺めたのだろうと思わせられます。隣人とは、草花のあるテラスを挟んで挨拶をしたりと、村人になったような楽しい距離感です。

村に一つしかないレストランでの夕食は、イタリアの食の豊かさを痛感する、フレッシュでおいしい食材に満ちています。地元のワインが揃っているところもイタリアらしく、ワイナリーを訪問したいと言えば、「親戚だから」と言ってすぐに電話してくれる気安さ。今まで名前すら聞いたこともなかった村に、親近感がどんどん湧いてきます。翌日、朝食を食べる場所はまた違う建物。あちこちに分散した建物を利用する楽しい宿泊が成立していました。世界中同じようなデザインのホテルが増えるなか、不便なようでも、まるで暮らすようにイタリアの空気を大きく呼吸する滞在体験は忘れられないものになりました。

2つの場所はある意味で対照的でもありました。片方の宿の主人はその村に魅せられたベルギー人の建築家、もう一つは村の中心にある1千年前に建てられた城の持ち主で、長年主婦だった高齢の女性でした。それぞれの宿がそれぞれの主人によって独自に運営されている、というのが協会のルールのひとつでもあります。背景は違っても共通しているのは、村の佇まいや歴史を愛し、その行く末を観光に託す思いで古い建物に懸命に手を入れ、アルベルゴ・ディフーソとして登録したことです。世界中からやってくるゲストとの交流を楽しみ、誇りを持って村を案内し歴史を伝え、喜びを感じていました。

できるだけ環境に影響を与えないよう、新しい建物を建てずに既存建物を改修し、地域の歴史を大切にして観光まちづくりを行う。このコンセプトは、空き家対策や、村の活性化を図る上で協会が大切にしていることです。結果的に街並みや景観が守られることにもつながっています。1976年に起こった地震で壊れた家屋の修復から始まったこの観光まちづくりには、過疎化していく村、にぎわいが村の中心から消えていく背景がありました。

日本にも、全国に800万を超える空き家があります。もしこの仕組みをまねるとすれば、歴史的佇まいが残る、あまり「発展」してこなかった地域にこそ、可能性があるということになります。またはわずかでも残された歴史性を下敷きに、これからの街並みをつくっていくスタイルもあるでしょう。景観というと、建物の色や材料の統一などという話になりがちですが、必ず人の営みと一緒に語られるべきです。言い換えればそれは「場」をつくること。アルベルゴ・ディフーソはそのことを再認識させてくれました。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるＮＰＯ法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞
令和元年（2019年）5月6日　月曜日　産　経

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

福岡ビル　文化、回遊性、地元らしさ

建て替えのため先月クローズした福岡ビルには、福岡市民が長く親しんだ場所がたくさんあったと思います。福ビルという愛称で親しまれた建物が完成したのは昭和36（1961）年。以来約60年、商業の中心・天神交差点のシンボル的存在でした。渡辺通り、明治通り、因幡町通りの三方に出入り口があって、通り抜けしやすく、風通しの良い回遊性を街に提供していました。地下街、地下鉄駅に加え、隣のビル「天神コア」ともつながっていました。地下に降りるエスカレーターも建物の中心部に加え因幡町通り側の建物外部にも増設され、積極的に歩行者を地下へ導いていました。しかしそういった物理的な特徴だけでは、これほど多くの市民に愛されなかったと思います。

天井が高かった1階は、通路と店舗の境界が曖昧で、そこが楽しさでした。渡辺通りから入ると、文具店の「とうじ」が通路に沿って棚を並べ、日本文化が薫る美しい葉書や便箋が通行者の目を楽しませました。色とりどりのお菓子が並ぶ「風月」のガラスショーケースも、買う人と歩く人の間に境がなくふっと足を止めやすい雰囲気でした。中心にあった「大賀薬局」も、エレベーターを待ちながら商品を眺められる開放的なつくりでした。その奥に約50年間あった「ヤマハ福岡店」は、中2階がガラス越しに見え、楽器やレコード、CDが通路から一望できて立ち寄りやすい、音楽ファンの溜まり場でした。1階全体に境界性が薄く一体感があったのです。用事が無くても、あるいは雨宿りにも、すっと入っていける風通しの良さがこれらの店舗を支えたのかもしれません。

地下1階の食堂街には、日本の洋食を牽引した「ロイヤル」の旗艦店が瀟洒な入り口を飾る、一方、「戸隠そば」「海幸」「エスト」は福ビルの誕生から先日の閉鎖まで、そのたたずまいが安心感と親近感を与えてくれました。私のようにデザインに関わる人にとって、2階と3階にあったインテリアの「ニック」は特別な存在でした。海外の有名な家具や照明器具などを優雅に展示し、「こんな素敵なものに囲まれた暮らしをしたい」と夢を見させてくれた空間でした。世界中からの最先端のセンスに溢ちていたこの場所が、多くのデザイン好きを育んだと思います。

現代の商業施設では、全国展開をしている店舗が多くを占め、また店舗がかわることもしばしばです。対照的に福ビルには、数十年、長いものでは三代にわたって親しまれた息の長いお店、地元色、デザイン、音楽など、文化が染み込んでいました。それこそが愛され続けた理由だと思います。またそれを成り立たせたビル運営にも頭が下がる思いです。

建築の特徴は、ガラスと金属の外壁、そして石だといえるでしょう。一足先に完成した天神ビルは、有田で焼いた茶褐色のタイルが貼られた重厚感ある外壁です。福ビルはカーテンウォールといって、建物の構造とは切り離した軽い外壁を採用しました。天神交差点の二隅に対照的なデザインが向き合っていたわけです。また外部の1階まわりには、壁やステップの床に驚くほど厚みのある御影石が施されていました。エレベーター扉の周囲や階段の手すりは、今では手に入りにくい美しい大理石で彩られていました。一見地味に見えていた建物でしたが、それらの石をよく見ると当時の建設に関わった人々の誇りが伝わってきます。

天神ビッグバンの舞台の地権者からなる、天神明治通りまちづくり協議会が目指すのは「アジアで最も創造的なビジネス街」。その重要な一角を担うことになる新しい建物には、福ビルが持っていた文化、回遊性、地元らしさといった魅力を踏襲しつつ、次なる時代を牽引するオリジナリティーある姿を市民に見せてほしいと期待が高まります。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞　令和元年（2019年）8月5日月曜日

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

大牟田市庁舎　まちづくりの初めのボタン

ちょっとくたびれて見える人物が、髪形と服装を整えると見違えるほどすてきになるシーン、映画などでおなじみですね。福岡県大牟田市庁舎本館を訪ねたとき、すぐにそれを連想しました。昭和11年竣工、市を貫く国道に面して堂々とした佇まいを保ち、大牟田駅からもほど近い、まさにランドマークです。中心にそびえる塔屋は5層もあり、その両側にシンメトリーに伸びる建物は63メートルに及び、中央玄関の車寄せの屋根は奥行き深く、全体的に造詣的な印象が深い建築です。かつては、表面に線上の凹凸をつけたスクラッチタイルが外壁に張られていたそうですが、残念ながら剥落の恐れから取り外されています。背後には戦後建てられたいくつかの分館が控えています。

1階は半地下になっていて、最上階の4階への階段も気分的には3階に行くような感じで、エレベーターがない建物の工夫だと思われます。その4階には、かつて式典などを行った正庁（大広間）や貴賓室だった部屋があります。正庁は柱頭や梁に加え、舞台だった場所の背面壁も手の込んだ漆喰飾りで縁取られ、正面性を演出しています。貴賓室のマントルピースの上部を飾るイスラム風のアーチもユニークで、これらが特別な部屋であったことがわかります。最も良い状態で使われているのが議場です。直線的で背筋が伸びるような厳格な印象を与えつつも、よく見れば梁下面に華麗な彫刻が施され、2階の傍聴席バルコニーの描く緩やかなカーブによって優雅さも併せ持っています。

戦中の空襲も生き延びたこの建物が、80余年を経て少々くたびれて見えるとしても、建物の骨格や特徴ある装飾はよく保存されています。美しい梁を覆ってしまっている新建材の天井を取り除き、物品を移動させるなどして少し整理すれば、かつて石炭産業で大いに栄えた往時の姿が蘇り、市民にとっても誇らしい場になることでしょう。しかし現在大牟田市は、この建物を解体し建て替える方針です。

大牟田市庁舎

本建物は平成17年に大牟田市の申請により国の登録有形文化財に登録されています。国の登録有形文化財は「国宝・重要文化財」に準ずる制度ですが、福岡県にある国の登録有形文化財の建造物の約半分は住宅関連が占め、官公庁舎は門司区役所（旧門司市役所）と本建物のみです。全国でも、現役で使用されている公共建築で登録が抹消された事例はありません。また「明治日本の産業革命遺産」として国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産に登録されたエリアのひとつが三池炭鉱・三池港であり、当時の繁栄を象徴する建造物のひとつがこの大牟田市庁舎本館であることに異論がある人はいないでしょう。

老朽化から「庁舎が備えるべき機能」への対応性が低いとし、それを理由に建て替えを進めるのは「初めのボタンを掛け違えている」と私は思います。バリアフリー化や災害時の拠点機能を求めればこの建物では当然無理があり、そこから解体、建て替えという検討フローへと進んでいってしまいます。まずは、この歴史建築を利活用することを始まりに置いて、フローを組み直してみるべきです。一度失った建物は、二度と戻ってくることはありません。次世代型の公共の場をつくる挑戦、アートなどの文化創造や新ビジネスの起業を育む場、観光者も参加できるコミュニティースペースなど、古い建物を活かした取り組みは全国でも多彩です。どのように活用できるのか知恵を凝らしていくステップは、大牟田のまちづくりに新しい扉を開いてくれるでしょう。なぜならそれは「機能」の追求ではなく、どんなまちにしていきたいかという「思想」を組み上げるプロセスだからです。大牟田市で今起きている、建て替えたいという市の思惑と、残したいという市民の気持ちの間のずれは、前提を設定する段階から生まれていると思います。まちづくりにおいても、身なりを整え、きちんとボタンをかけていく手順が大切なのだと気づかされます。

大牟田市の現在の人口は、昭和30年代のピーク時の約半分です。市民へのアンケート結果からは、利便性が高い立地で各種手続きを済ませられるバリアフリーな市庁舎が求められているということですが、今は証明書などの入手もオンラインやコンビニでのサービスが広まる時代、また各種問い合わせもAIによる対応が間近な時代です。そんな中、市庁舎に求められる機能や規模もこれまでのものとは変わっていくでしょう。もう一度遡って、市庁舎建て替えではなくまちづくりのための検討フローを描き直すことが、未来の大牟田市のために重要だと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒、東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞

令和元年（2019年）11月4日　月曜日　産経新聞

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

コペンハーゲン　更新を続ける「周縁」

「ノーマ」というレストランが世界的に知られるようになった頃、多くの人が首をかしげました。美食で知られるイタリアやフランスならともかく、場所がデンマークのコペンハーゲンだったからです。材料は北欧の山や海から採れるものや有機野菜へのこだわりと、斬新なプレゼンテーションが世界に響き渡り、美食家が集まるようになりました。

今年6月にデンマークを訪ねた時、ノーマには行けませんでしたが、その後に続くレストランのいくつかを訪ねました。メニューには初めて聞く食材ばかり。お皿が運ばれてくると、不思議な組み合わせに込めたストーリーを聞かされます。廃棄物を出さないことをポリシーにしているある店は、昨日の残ったパンを使って麹をこしらえていました。正直に言うと、おいしいのかどうか定かではない料理もありましたが、コンセプトと実験精神に満ちていていたのは確かです。食べる側も新しい考え方に触れたいと足を運んでいるようでした。

また驚いたのは店のつくり。店に入るとまずキッチンがあり、その横を抜けてテーブルに行く店もあり、客席とキッチンがひと続きなのが主流。世界中から集まるスタッフの会話は英語で、客の国籍にあわせてその言語が話せるスタッフがメニューの説明にやってきたりと、国際色豊かです。ある店では食後に「それではそろそろどうぞ」と促され、裏のキッチンから仕込みをしているバックキッチンまでツアーをしてくれ、最後にスタッフ全員で私たちを囲んで写真を撮ってくれました。わくわくする新しい体験でした。

21世紀に入り目覚ましい活躍をしている建築設計事務所BIGも、コペンハーゲンで生まれました。設立わずか十数年でニューヨークやロンドンに数百人単位の事務所をつくり、ヨーロッパ、北米、アジア、中東などで建築を手がけています。グループを率いるのは1974年生まれのデンマーク人、ビャルケ・インゲルス氏。コペンハーゲンの運河の一角を囲って市民プールにしたり、ごみ焼却場の傾斜屋根の上をスキー場にしたり、面白いアイデアを連打してきました。干拓が生んだ平坦な土地に建てた集合住宅は、人工的に丘を造形して「マウンテン（山）」と名付け、上から見ると8の字型で2つの中庭を持つ巨大な集合住宅の名前は「8」。こんな建築もあり得たんだ、と市民の心を掴みました。

繊細さ、土着性、哲学的陰影、そういった時間がかかりそうなものはバッサリ切り捨てたキッチュでユーモラスな作品は、いつもわかりやすい模式図で説明されます。パースや写真も空から見下ろす全体を眺めるものが多く、大づかみで視覚的です。人気を獲得しているのは実験と挑戦に満ちた姿勢と、そのわかりやすさのせいではないかと思います。

文化人類学で語られる「中心と周縁」という考え方に沿えば、ヨーロッパにおいて北欧は周縁でしょう。私には、前述の食や建築は、この「周縁」だからこその自由さと強さに思えました。ときに動きを失い固定されてしまう「中心」に対し、「周縁」は他者性をもち、交流によって多義的な環境をつくる存在です。ノーマやBIGは、コペンハーゲンにこそ生まれたように思えました。

一方で、この都市は地道で息の長い取り組みでも知られています。20世紀後半自動車が激増するなか、危機を覚え1970年代から自転車利用の促進に着手。自動車の車線と駐車場を減らしつつ、自転車利用の数値目標を掲げ専用レーンをつくっていきました。ハード整備だけでなく、信号の待ち時間を短くするなどの細やかな工夫も重ね、世界有数の自転車シティになりました。また、都心の生活を豊かにする公共空間のありかたを研究し方針を決め、その実現に一歩一歩進み続けた結果、屋外の公共空間が増え、市民の生活満足度が格段に向上しました。それらの道のりは数十年かけて少しずつ進んでいった根気のあるものでしたが、それも「周縁」ならではの、常に更新を続ける、勇気ある姿勢かもしれません。

世界から見れば日本は周縁、日本で見れば九州は周縁です。さて、九州という地域はどんな周縁を描きましょうか。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

産経新聞　令和2年(2020年)2月3日　月曜日

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

先人の知恵が集積 福岡・天神の街再考

天神ビッグバンに続き博多駅周辺においても、容積アップや税制などのボーナスをインセンティブに、駅から半径500以、80ヘクタールの範囲で建て替えを誘導する「博多コネクティッド」が福岡市から発表されました。福岡県というのは面白く、福岡市、北九州市と古くから政令指定都市が県内に二つありました。ものづくりや環境問題に取り組む北九州市に対し、福岡市は商都。さらに福岡市を見ると、天神と博多という二つの中心部があります。かつて天神は商業地、博多はオフィス街という印象でしたが、今後は博多でも商業を含むいろいろな機能が組み込まれた建物が増えていくことでしょう。

このコラムでは、天神の特徴を俯瞰的に見てみたいと思います。名前の由来は、天神様と祭られる菅原道真にまつわる水鏡天満宮。福岡は江戸時代、中心を流れる那珂川を挟んで東側が商人のまち「博多」、西側が黒田藩がつくったまち「福岡」とに分かれていました。古地図を見ると、城を守る防御の観点から道は真っ直ぐではなく、鉤型にずれるかたちでつくられたことがわかります。戦後、多くの道は直線に引き直されましたが、西鉄グランドホテルの前のS字カーブや大名の町の迷路のような道の姿は当時の名残で、幅員の狭さも相まってなんとなく親しみある佇まいを持っています。近年では同じくヒューマンスケールな雰囲気を持つ町、今泉へと天神エリアは拡大しています。こういう界隈性のある町が背後にあるというのが特徴の一つです。

明治以降、現在アクロス福岡がある場所と、その周辺には県庁や学校などの公共施設が多くつくられました。城から那珂川までつながっていた堀が埋め立てられ、現在の福岡市役所やデパートの岩田屋はその上に建っています。旧唐津街道である昭和通りが中心的な東西軸でしたが、路面電車の開通で明治通りがもう一つの東西軸に成長していきました。東の端には赤煉瓦と呼ばれ親しまれている辰野金吾設計の赤煉瓦文化館（旧日本生命保険九州支店）、西には福岡市で最も古い小学校である旧大名小学校の校舎が残っているのも歴史を感じさせます。

アーケードを持つ新天町商店街は戦後すぐの、昭和21年の創業です。こんな昭和な空間が都心の真ん中にあることを当たり前に思わないでください。東京の山手線の内側のアーケード商店街はすべて無くなってしまいました。親しみやすいこの場所には、創業時から続いているお店がいくつもあります。隣接するオフィスビルの通路とつながっていたり、地下にも行けたりと、周囲との立体的なネットワークがあることも地元の方ならよくご存知でしょう。シックなデザインを跨る天神地下街の存在も忘れてはいけません。長さ約600以で、南北を貫く天神の2本の背骨。そこから延びる地下通路、各ビルへの出入り口とともに歩行者の快適な移動を支えてくれています。

また、天神が恵まれているのは、広場や公園があることです。人工芝を敷いた市役所前広場や天神中央公園、警固公園は都心にゆとりを与えているだけでなく、様々な催しの受け皿になっています。「ビルの谷間のコンサート」が開かれる福岡銀行本店の広場は、屋根のある全天候型公共空間です。また、西鉄ホール、FFGホール、来秋の解体が発表されましたが都久志会館など、文化的なホールが身近に存在するのも強みでしょう。

さらに自然とのつながりがあるのも天神の特徴です。東に位置する那珂川では、水上公園と天神中央公園の整備で一気に親水性が高まりました。そして西には舞鶴公園、大濠公園が豊かな緑と水とともに横たわっています。また、中心にそびえるアクロス福岡のステップガーデンは、世界から注目を集める大きな立体緑化です。

私たちが普段何気なく利用している街。その姿を改めて考察してみると、先人の先駆的取り組みや知恵の集積を感じます。天神ビッグバンを契機に更新される建物もこの積み重ねの上に描かれるわけです。今後は建て替えもしにくい社会になっていく中、百年の計として取り組むまちづくり。天神の特徴を生かしながら今後どんな新しい姿や空間が現れ、そこに宿るどんな公共性が市民や来訪者に親しみや喜びを与えてくれるようになるか期待が高まります。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。建築の面白さを市民に伝えるNPO法人「福岡建築ファウンデーション」理事長も務める。

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

都心の役割と交流を考えるチャンス

人と人が出会う喜び。顔をあわせ、声を掛け合い、体験を共有する楽しさを生き物である私たちは失うわけには行かない。そう気づかされたこの数カ月でした。原始にまで遡れば、人間が集まって暮らすのは野生動物や自然環境から身を守るためでしたが、今は逆に、集まることに危険が潜む事態になってしまいました。より良い都市空間を考えるのが仕事である私は、人が集まるからこそ成立する「都心」という場所について改めて考えることになりました。

新型コロナ禍の前から「都心はそろそろ変わる」と思われていました。リモートワークが広がれば人数分のデスクが要らなくなり、オフィスの必要面積が減るのではないか、ネットショッピングの普及はリアル店舗の数を減らしていくのではないか、など誰しも感じていたことです。都心の存在価値がだんだん薄れていくのかもしれないと思った人は、さらにコロナ禍のせいで急増したはずです。天神ビッグバンの大規模再開発を進める協業会のコンサルティングをしてきたこの5年間、今後の開発には新しい公共性を埋め込む必要があると言い続けてきました。オフィス、商業、ホテルなど「稼ぐ」場に加え、一見「稼がない」ように見えても、そこで働きたい、そこを訪ろうろしてみたいと思わせる何かを設置していかなければリアルは衰退しかねないと危惧していたからです。通勤せずとも仕事ができ、店に出向かずとも物品が自宅に届くとなると、都心の役割と価値はどうなっていくのでしょうか。

都心という物理的場は無くなるのだろうか。いや、無くして良いのだろうか。私はそうは思いません。日々の暮らしや仕事という日常に対し、非日常の楽しみは現代人の心にしみ込んでいます。またオフィスも業務だけでなく、社員同士のコミュニケーションのように定量化しにくい事象の場でもあります。心を震わせる文化や芸術との出会い、教養を深めたり、新しいスキルを得たりする学びの喜びにも、リアルな交流を基軸にした方が楽しい場合があります。公共交通機関が充実し、集まりやすい都心だからこそやれることがあるのです。

出社するオフィスビルには鳥がさえずり緑豊かなテラスがあちこちに設けられ、早朝から気持ちよく仕事ができる。隣のビルの最上階で博多湾を眺めながらランチを楽しみ、休憩時間は向かいのビルのライブラリーで趣味の本を開く。ビルの1階にある広場には三日おきに有機野菜マルシェが立ち、そこで買い物をして家族と安心な食卓を囲む。各ビルにある美術ギャラリーを毎週チェックして若いアーティストの作品に触れ、月に一度は夫婦でジャズ演奏や落語を聴きにいく。街全体を楽しめるそんな都心ならば事務所を構えたくならないでしょうか。

コロナ禍の影響もあり、福岡市の人気の商業地域、天神や大名の路面店にも空室が現れ始めました。そこでその空室を利用し、これまでになかった社会実験を行うことにしました。空き店舗を短期で借り、いわゆるポップアップストアをオープンする内容なのですが、肝心なのは中身、ポストコロナ時代の新しい交流を生み出すコンテンツがつくれるかどうかです。私は以前から、九州の玄関口である福岡市に九州の魅力を知り、理解を深めるような場所が少ないと感じていました。九州は焼き物王国と言われ、食物や酒類にも有名な産地がありながら、それらを一度に見たり、比較したりできる場所はありません。私自身、恥ずかしいことに八女茶と知覧茶の違いもわかりません。

そこで一見無関係に思われる異分野を組み合わせ、各分野を代表する人物にプロデューサー役を依頼し、シナジーを狙ったコンテンツを入れることを構想しています。例えばスイーツと焼き物と書物、例えば音楽とアートと農業。すでに九州にある地域性豊かな仕事や活動が、お互いの関連を発見し、その触発から新たな協同が生まれる場のイメージです。参加者からすると単純な購買や飲食ではなく、九州の恵まれた風土に愛情が深まるような組み合わせもあれば、そこで起こる即興演奏を楽しむようなイベントにも参加できる。その時、その場でしか生まれない「交わり」が例えば5カ所で同時に立ち現れると、何カ所かをホッピングし街での滞在時間も長くなる。そういう実験を通して都心の可能性を探求したいのです。

それを後押しするのは、現代のキーワードの一つになっている「多様性」「共感」「ストーリー」。今まで体験したことのない広がりある歓び、文化軸がしっかり通った深味のある混沌、そこから生まれる難題が描くエンドレスなループ。この実験が街の将来を描く種になり、これからの大規模再開発のヒントになり、そして九州各地の中心市街地のまちづくりにも役立つものになることを夢見ています。そして「九州はひとつ、One Kyushu」への取り組みの一つとして、九州に住む私たちがもっと九州を深く知る機会にしたいと考えています。今秋開催予定なので、次回のコラムでまた詳細をお伝えしたいと思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。今年6月より、一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

デザインで人と人をつなぐ　一筆両断

松岡恭子の

「九州の時」を都心の空き店舗で

あなたにとって「都心」はどんな場所ですか？　働きに行くところ。会合に出席するところ。ショッピングを楽しむところ。自宅では作れない美味しい食に出会うところ。友人との集いに出かけるところ。まだまだありますか？

新型コロナの影響は、私たちの生活を一変させました。在宅ワークとネットショッピングが日常になり、オンラインイベント参加の気軽さが発見された今、私たちは長い人類の歴史でこれまで存在しなかった特異点を迎えている気がします。そしてこのままでは都心が持っていた役割が薄れていくのではという危機感が湧き上がるようになりました。

都心はいま、行かなければならなかった場所から、行きたくなる場所をめざす必要があると思います。働く、買い物をする、という「機能」や「消費」ではなく、長い時がつくってきた「文化」や「芸術」こそがその鍵を握っていると思います。その場所、その時にしか出会えないものを求めて、これから人は足を運ぶようになるのではないでしょうか。それが真の交流なのかもしれないと思い始めました。

福岡・大名は400年前に黒田藩が整備した、戦災を免れたヒューマンスケールな城下町です。九州一の繁華街、天神に隣接しているため、近年では小振りの事務所やショップ、飲食店がひしめく賑わいの絶えない街でしたが、コロナの影響もあり、空き店舗が現れ始めました。それを見てこのままにしていてはいけないと思い、複数の空き店舗の持ち主と短期の賃貸借契約を結び、九州の魅力・誇るべき文化を結び付け新しい交流を生む社会実験「One Kyushu ミュージアム」を行うことにしました。9月から11月まで、毎月11日間開催します。

文化を取り上げるにあたり、いろいろな専門家の方に声を掛けたところ、焼きもの、音楽、食、茶葉、スイーツ、アートなどその道のプロフェッショナルがこの取り組みに快く賛同、協力くださることになりました。産品は九州のすべての県から月替りで到着します。9月の会場のひとつは佐賀県、長崎県からの品物でいっぱいになります。日本遺産にも「肥前やきもの圏」として登録されている唐津、有田、伊万里、嬉野、武雄、波佐見、佐世保の七つの産地から、400点を超える品々がやってくるのです。もうひとつの会場では、福岡県の八女茶と鹿児島県の知覧茶が紹介されます。九州ではもちろん、全国に名が知られるお茶の産地です。さらにワインの業界で大変評価の高い、大分県の安心院ワインも登場します。10月以降は宮崎県の都農ワイン、鹿児島県の薩摩切子なども予定しています。

どちらの会場でも販売は行いません。購入はオンラインサイトを紹介するだけにとどめ、会場ではその産品が辿ってきた歴史やつくられている環境、手掛けている人の姿や努力を見聞きできる映像や資料を見ていただけるようにします。「共感」「ストーリーの共有」を大切にしたいと考えているからです。会期中の平日は毎日定時にネットで産地と繋がり、製作風景、作業の現場、ものづくりへの想いなどを紹介してもらい、会場からは質問を投げかけたり、感想を伝えたりとインタラクティブな交流をライブ配信とともに行い録画していきます。心の繋がりが生まれれば、その場での購買以上の長い縁に育っていくのではと期待しています。またそうやって積み重なっていく映像を、One Kyushu ミュージアムのフィルムライブラリーにするつもりです。

週末、祝日は前述の専門家にお願いし、いろいろなセミナーを企画しています。お茶と焼きものの組み合わせにオリジナルのスイーツを楽しみながら解説を聞く、九州でつくられるワインをその風土とともに学びながら味わう、有名シェフに現代社会の食産業について語ってもらう、温暖化で変化する九州の気候を描く美術家にその問題意識を語ってもらう、などなど多彩です。共通するのは「九州の時」をテーマにしていること。お茶が中国から九州に持ち込まれて900年、ワインが九州の武将に献上されて500年、豊臣秀吉の朝鮮出兵を機に始まった焼きものは400年、と時を辿りながら私たちの暮らす九州を振り返り、そして未来の九州を考える機会になればと願ってこのテーマを考えました。

複数の会場を訪ねながら、来訪者にはぜひ、まち歩きをしていただきたいと思っています。同じ大名にある書店・ジュンク堂さんには、関連書籍の平積みをお願いしています。大分県の拠点施設であるカフェ「dot.」も会場の一つなので、ひと休みもできます。そしてまちにどのくらい滞在してもらえたか、何度も来てもらえたかなどをITを用いて計測していきます。産地との対話やセミナーもライブ配信し、後日ネットでの視聴も可能にするので、その利用者数も測ります。そういったデータの取得は、同様の取り組みや、これからの都心のまちづくりを考える際の参考になるのではないかと思っているからです。

いろいろ構想するうちに、これを福岡だけで行うのではなく、九州の各県庁所在地でリレー開催していってはどうかと思うようになりました。どの都市も中心市街地に空き店舗があるはずです。そこでもこの実験を行い、コンテンツももっと広げていくと、回を重ねるごとに「九州は一つ、One Kyushu」が近づいてくると思うのです。そのためこの秋の会期中に、各地のまちづくり活動家とのオンラインディスカッションも公開で行う予定です。

この社会実験が、人の心を豊かにするこれからの都心の役割の扉を開けたらと願っています。詳細はホームページ（https://onekyushumuseum.com/）に記載しています。関心をお寄せいただけたら幸いです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。今年6月より、一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

産経新聞

(口) 令和2年(2020年)12月7日 月曜日 産 経

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

人と人をつないだ「OneKyushuミュージアム」を終えて

3カ月間にわたって開催、11月下旬に幕を閉じた社会実験「OneKyushuミュージアム」は、福岡・大名の路面の空き店舗3カ所を借りて九州の工芸や産品を展示し、都心ににぎわいや交流を生む試みでした。工芸品は唐津焼、肥前やきもの圏の7産地、小鹿田焼と竹細工、そして薩摩焼と薩摩切子を紹介しました。お茶は知覧茶に八女茶、そして益城茶とその茎茶を、ワインは都農ワインと安心院ワイン。さらに福岡県の27の蔵の日本酒・本格焼酎と、九州7県すべてから出展してもらうことができました。

それらに流れる数百年単位の歴史を「九州の時」として語り、現在どんな努力が産地でなされているのか、未来に何を託しているのかに焦点を当てました。全てを展示で説明することはできなくても、会場では映像を通して作り手からの言葉が流れ、在福岡の専門家の解説で理解が得られやすいよう工夫していきました。モノの向こうにある「人」の風景を掘り下げ、共感を育みたいと思ったからです。それは百貨店の催事場で販売を目的に行われる展示とはまったく異なるスタイルでした。

もう一つ、この社会実験で私が仕掛けたかったのは、これまでにない組み合わせによる相乗効果でした。まずは人と人の出会い、領域の異なる専門家同士の触発についてです。総合プロデューサーである私は建築家ですが、コンテンツを豊かにしていくためには幅広い文化領域をカバーする仲間が必要でした。そこで音楽、焼きもの、ワイン、お茶、スイーツ、映像、アート、まちづくりなど各界の専門家に参画してもらいました。展示のディレクションに加え、人数限定で開催したセミナーは珍しい組み合わせ、例えば「焼きもの×茶×スイーツ」のように新しい切り口を提供し、作り手や専門家の話を聞きつつ愛でて味わえる場としました。参加者はもちろん、講師を担当した専門家たちにも、改めて異分野から刺激をもらいました。

「九州」という視点を持つ機会になったと言ってもらえました。

次に空間デザインについてです。空き店舗には内装や電気設備のない場所もあるため、ローコストでかつ雰囲気よく、閉会後できるだけ廃棄物を出さない会場デザインを目指しました。展示物を載せるテーブルの調達やレイアウトのデザイン、入り口サインや説明パネルなどグラフィック全般、仮設とは思わせない照明デザイン、場に潤いを与えるたくさんの観葉植物の設置など、極めて短期間にも関わらず実現した空間の質の高さは、まさにプロの力の相乗効果だったと思います。チラシ類と各会場のサインデザインが一貫しており、街のあちこちにオリジナルロゴが現れたことで地域の一体感をつくることもできた気がします。

リアルとオンラインを並行するというのも、思っていた以上に意義ある内容に育ちました。展示を見に来られない市民だけでなく、福岡市まで来られない出展者のために、3つの種類の映像制作に取り組みました。まず作り手のところに仲間の一人である映画監督が出向き、現場で話を聞き撮影し編集したフィルムを作りました。次に上述のセミナーを中継配信し、録画もネット上で誰でも見れるようにしました。さらに展示会場と作り手をオンラインで結び、双方向のライブ感あふれる対話を中継、録画しました。今後九州の旅や産品のプロモーションにも役立つフィルムライブラリーになったと思います。セミナーの中には九州各地でまちづくりに挑戦している人々とのオンラインセッションもあり、好評を博しました。

さらに周辺地域との連携も仕掛けました。ジュンク堂書店福岡店は特別コーナーを設置し、お茶、焼きものなど関連するさまざまな図書を並積みした上に、展示のチラシを置いてくれました。書店でこの取り組みを知り展示会場に足を運んだ方も多数おられ、またワインや日本酒は会場では飲めない代わりに、近所にあるカフェや酒店の立ち飲みカウンターで提供してもらったので、まさに狙い通りの「まち歩き」が生まれていました。そして会場を貸してくれた所有者にも、これまでになかった空き店舗の活用に理解と関心を持ってもらえました。

準備期間も短く、未経験の社会実験でしたが、人と人が共に知恵を絞る効果、プロによる空間演出、リアルとオンラインの掛け合わせ、近隣とのつながりの生成はOneKyushuミュージアムの大きな副産物となりました。そして福岡に暮らすわれわれと、九州各地で誇りある仕事をしている方々との、人と人のつながりが生まれたのが嬉しくてなりません。

11日間ずつ3カ月にわたって行った会期中、来場者は延べ約7千人、セミナー参加者は約250人となりました。一度に人を集められない時代なので、少しずつ、細やかに組み立て分、手間はかかりました。「イベント」ではなく「社会実験」なので人数を目的にしているわけではありません。参加者からは、九州各地への思いが深まった、知らない歴史がたくさんあった、産品の素晴らしさを知ったという声を多数いただきました。会場間の人の動きや滞在時間、ウェブサイトの閲覧数と各出展者のリンク先への誘導数などはこれから解析を始めます。

リアルの場は閉じたものの、フィルムライブラリーは今後も視聴者が増えていくと期待しています。九州を一つのリージョンとして捉えるOneKyushuの視点は、これからもっと色々な展開があるのではないかと思っています。OneKyushuミュージアムのウェブサイトmuseum.onekyushumuseum.comをご覧いただけますと幸いです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。今年6月より、一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

産経新聞　令和３年（2021年）３月８日　月曜日

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

混在をデザインする時代へ

キャバレー、ダンスホール、カフェー。こういった場所に行った経験、ありますか？　私には、両親の世代が懐かしむ往年の日本映画が目に浮かびます。近年コワーキングスペース、シェアオフィスなど、従来とは違う仕事場が普及してきましたね。すべてカタカナなのは、その時代ごとに現れた新しいタイプの空間だという証でしょう。建物を設計する際に順守する主な法律には建築基準法、都市計画法、消防法などがあり、敷地が属する地域、建物の機能や利用者の設定、規模に応じていろいろな決まりが盛り込まれています。もうあまり見かけないキャバレーが分類表にいまだに記載されている一方、時代の変化とともにどんどん新しい用途が生まれてくるので、それに沿った規制や解釈が必要になってきます。

先日同世代の友人と懐かしく思い出したのですが、彼女も私もまちなかの商家、住まいと仕事場が併存する職住一体の環境で育ちました。近所の遊び仲間の家も同様で、いろいろな商売を内側から見て育ったよね、と笑い合いました。近代の都市計画の歴史は、工場は工業地域に集め、百貨店や事務所は商業地域に、住居系地域には主に住宅を、というようにエリアごとの機能設定に基づいています。交通手段が拡充され都市部が広がり、長距離移動が日常になってベッドタウンが生まれたわけですが、その反動で地域コミュニティーの維持育成が難しくなった側面もあります。衛生的な環境をつくる、騒音や大気汚染から住環境を守るといった近代都市計画の目的も、重工業が減衰し社会インフラも整った今、前提にあった事象がもはや社会課題ではなくなっています。

では、これからの社会課題はなにか。コロナ禍を引き金に、住まいに仕事場が必要になり、レストランから届いた食事を自宅で食べたり、学校に行かずに授業に参加したりすることが当たり前になりました。ショッピングモールに設置された銭湯ブースが大人気だとか、高級ホテルを住宅のように長期で貸し出す事業、リモートワークが主になったため本社ビル売却といったニュースも聞かれます。

そんな中で求められるようになったのは、機能で「分ける」よりも「いろいろある」「柔軟な使い方ができる」、都会の便利さだけでなく自然の尊さ「も」享受するといった、これまでとは異なる生活の像だと思います。もちろん、手放しになんでもごちゃ混ぜにすればよいわけではありません。近隣関係には寛容さも大切でしょうし、倫理が必要な場合もあるし、メリハリが重視されるべき環境もあるでしょう。しかし、ようやく近代から脱し、新しい時代に入ったのかもしれない今、浮かび上がってくるのは私たちが「人と人の繋がりの回復」と「地球環境とのより良い共生」を、これまで以上に大切に感じてきていることではないでしょうか。

機能的、合理的なデザインだけでは、もうこの課題に応えることはできません。むしろいろいろな人、行為、ものが気持ちよく混在するデザインが、建築設計や都市デザインや不動産開発に求められているように思います。さらに言えば、時間の混在にももっと価値が置かれるべきでしょう。建築は先人の知恵と挑戦、改善の上に今があります。全て新しい建物が並ぶ街はどこか味気ないもの。新旧入り交じり「時の地層」が見える街に、数値化できない奥行きがあり、魅力が宿ります。古い建物を再生させる日本の技術や思考には、もっと発展の余地があります。未来を視野に入れた環境づくりへ今後ますます重きが置かれ、私たちには時を設計していく責任が深まっていると思うのです。

混在の意義、混在の心地よさ、混在から生まれる人の繋がり。小手先ではない、大きな意味でのデザインの力、そして、それを可能にする制度設計が必要になってくると感じます。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。昨年６月より、一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

新しいつながりをつくる試み

～台湾パイナップルフェア～

今年3月初めの新聞記事が発案を促した「One Kyushu ミュージアム台湾パイナップルフェア」は、九州の食のプロフェッショナルに協力を依頼することから始まりました。主たる輸出先だった中国が輸入を停止したため行き場を失っている台湾パイナップルを、九州で応援することができないかと思ったのです。しかし、生のパイナップルを食べるだけでは限界があると思い、加工して消費を増やす相談をプロの方たちに持ちかけたのでした。

芯まで楽しめる台湾パイナップルの爽やかな甘味、南国の果物特有の心弾む香り。主要な産地である台湾の高雄には、戦前の日本統治時代に遡って産業史を展示するパイナップル博物館があります。歴史漂う建物は当時工場だった煉瓦造で、缶詰加工し輸出した産業の成長過程が展示してあるそうで、次回の訪台では必ず行ってみようと思っています。

さて、この取り組みに参加してくれた九州各地のシェフ、パティシエ、ソムリエ、バーテンダーたちは、それぞれの専門を生かし、スイーツ、カクテル、パンケーキ、お弁当、ジャムなど多彩な商品を開発してくれました。テークアウトやお店での飲食に加え、お取り寄せも好評です。また、ご家庭でも試せるようにと公開されたレシピもあります。このレシピを中国語に翻訳し、台湾でも広めて日本流のパイナップル料理に挑戦してもらおうと企画中です。

意外だったのはこういう取り組みに協力くださるプロが「この業界では実は横のつながりが薄い。パイナップルをきっかけにして他の専門家と情報交換できたのがうれしく、大変触発された」と口をそろえたことでした。折しも緊急事態宣言下で協力者自身のお店も時短や休業に迫られているわけですが、こうしたつながりがヒントや刺激になって原動力になってくれたらと、総合プロデューサーとして願わずにはいられません。

さらに社会実験One Kyushu ミュージアムでは今年オンラインサロンを開始し、飲食の新しいスタイルを試みています。設定したテーマに沿った商品をあらかじめ参加者に送付、当日はオンラインでつながって召し上がっていただく企画です。

5月に「新緑の風」と題して行った2回目では、福岡・八女の新茶と台湾パイナップルのお菓子を組み合わせました。講師は、福岡の茶司、徳淵卓氏とパティシエの佐野隆氏、司会は私が務めました。参加者は自宅に居ながらにして、お茶の淹れ方を習い、味わい、説明を聞きつつスイーツを楽しみ、さらに参加者同士チャットで意見を交換できる、あっという間の楽しい1時間。講師は福岡の街に深く根ざした「場所性」を持ち、コンセプトあるお仕事に「人柄」がくっきり浮かび上がっている方々である一方、オンラインなので参加者は全国から、というスタイルに新しい食ビジネスの可能性を感じました。参加者アンケートでは、コロナ禍の影響で「適当にものを買わなくなった」「つくり手とのつながりや想いを重視するようになった」というコメントが多く現れたのも興味深く感じました。

京都大学こころの未来研究センターの広井良典教授が著書「人口減少社会のデザイン」（東洋経済新報社）の「コミュニティとは何だろうか」というくだりで次のように語っています。『近年に至り、様々な背景から、そうした「個人―社会」、「私―公」、「市場―政府」といった二元論的枠組みでは、現在生じている種々の問題の解決はどこか根本的に不可能なのではないか、（中略）そこで浮上してきたのが、他ならぬ「コミュニティ」という（中略）第三の領域ないし関係性――である…』。「コミュニティ」というとやや窮屈な関係性を想像しがちですが、「つながり」ともう少しゆるく言い換えれば、One Kyushu ミュージアムは九州の産品を作り出す「人への共感づくり」に焦点を当て、まさにつながりをつくることを目指し活動してきました。消費者と提供者、作り手と使い手といった二元論では網の目からふるい落とされがちだった何か、を再発見することに重きを置いています。

コロナ禍発生から1年あまり。私たちの心には、不安と背中合わせではあっても、社会の転換期を受け入れ乗り越えていく覚悟が徐々に生まれている気がします。社会をよりよくする動きに寄り添いたい、格差拡大ではない仕組みを知りたい、利他に包摂される健全なビジネスをしたい、しかしそのために何をしたらいいのだろうかという焦燥感も高まっているのではないでしょうか。

台湾パイナップルと九州がつながり、それに協力した食のプロ同士がつながり、開発食品と消費者がつながり、ひいては台湾と九州の市民交流が生まれるかもしれないと思うと、パイナップルという小さなバトンが、渡されるたびに大きくなっていく面白さを感じます。これは一例にすぎませんが、難しい社会課題が山積し、自然災害も多い今だからこそ、つながりの回復とそのデザインがもたらしうるものへの希望は大きいと感じます。少し遠回りだとしても、九州らしいまちづくりのヒントになれば幸いです。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。昨年6月より、一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

デザインで人と人をつなぐ
松岡恭子の一筆両断
特別編

九州の文化で老舗ホテルを美術館に

長く親しまれてきた地元の老舗ホテルを訪れるのはどんな時ですか？ 結婚式、会社や団体の周年行事、会議などでしょうか。誰もが知る立地、充実した施設、高品質のサービスで、安心して集まれる場所として利用されてきたのはどこも変わらないと思います。

そんなホテルの一つ、西鉄グランドホテルは福岡市の商業の中心、天神のやや西側にあります。1960年代に国内外からの来訪者が飛躍的に増え、国際都市に相応しいホテルをとの思いから「福岡の応接間」を目指して建てられ、以来半世紀、まさに社交のシンボルとして親しまれてきました。1階ロビーは角地を生かし二つの道それぞれに入り口を持ち、入りやすく風通しの良い空間です。待ち合わせや商談、ティータイムに利用した経験は多くの福岡市民が持っているでしょう。

昨今の大型複合ビルに入るホテルは高層階にロビーがあり、その存在は地面から切り離されています。西鉄グランドホテルのように周辺環境としっかりつながり、出入りしやすく、街とともに呼吸している様を、私は「地続き感」のあるホテルと呼んでいます。各地方都市の中心にあるこういった老舗ホテルが、コロナ禍で宿泊や宴会が激減し、苦しんでいると思います。

昨年秋に行った社会実験One Kyushuミュージアムは、都心の空き店舗群を一時的に借り、タイアップした周囲の店舗とともに九州の伝統文化を展示してまち歩きを誘い、にぎわいを生みました。2回目の今年は、この西鉄グランドホテルをメイン会場に開催することにしました。「地続き感」があればこそ、市民に愛される新しい使い方を実験してみる価値があると思ったからです。

1階ロビーはもちろん、2階の小会議室群、宴会場を借りて一時的にミュージアムに仕立てます。日によって展示物は変化しますが、九州各地から焼きもの、ガラス細工がやってくるほか、今年は織物と絵画、映画も加わります。昨年同様、太郎右衛門、今右衛門、柿右衛門、沈壽官という巨匠各氏に加え、新たに人間国宝の福島善三氏の作品が一堂に並びます。また、九州の北からは小倉織、南からは奄美大島の大島紬がソラリアプラザに登場します。小倉織を復元した葉城則子氏の永久保存の帯と、大島紬美術館から送られてくる多彩な作品を無料でご覧いただけるのはこの社会実験ならではの贅沢さだと思います。宮崎出身で戦前の台湾で活躍した画家、塩月桃甫の作品と彼の人生を綴った展画もホテルで鑑賞できます。

九州でつくられるワイン紹介には、2つのワイナリーを増やしました。大分の安心院、宮崎の都農に加え、熊本の菊鹿ワイナリーと長崎の五島ワイナリーのワインを、ホテルのダイニングではもちろん、周辺のレストランやバーでも楽しんでいただけます。まちぐるみで九州が誇るべき伝統や文化を体験していこうという趣向です。

「場所」を「場」に変え、都心を単なる消費地ではなく文化を介して交流が生まれる地にする社会実験。地続き感とは「閉じない」ということでもあり、まちと繋がっているからこその挑戦をやってみたいと思います。14日から18日まで開催です。詳しくはOne Kyushuミュージアムのホームページ（https://onekyushumuseum.com/）でご覧ください。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。昨年6月より、一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

令和4年（2022年）1月10日月曜日　産経新聞

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

どんな歩道が素敵？

天神明治通りのデザイン

歩きやすいな、歩きたいなと思う歩道が身近にありますか？　目的地点に行く経路がいくつかあるとき、どんな道を選びますか？　歩行空間には舗装材、街路樹、電柱と電線、点字ブロック、花壇などが混在しています。適度な幅があり、夏には木陰が生まれ、ガタつきのない舗装、建物の1階に素敵なお店があるのも選ばれる点かと思います。

私が手がけた歩道デザインの一つは、福岡市の天神明治通りです。といってもまだほんの一部分しか完成していませんが。天神の大規模再開発「天神ビッグバン」の主体を担う天神明治通りまちづくり協議会（略称MDC）のコンサルタントを、令和2年春まで5年間務めていました。その間の提案にはいまだ実現できていないものも多々ありますが、一つ形になったのが昨秋オープンした天神ビジネスセンター前の歩道です。

MDCでは各建物の低層部に誰もがアクセスしやすい用途を入れ、歩道を新しいデザインに変えて一体的な街路空間をつくることを目標としています。容積・高さ緩和を受ける代わりに満たすべき公共貢献の条件があり、その一つが歩道の境界線からの2㍍のセットバックと民間の費用負担による歩道空間の整備です。約6・5㍍だった歩道の幅が8・5㍍に、道路の全体幅員が25㍍から29㍍になるというのが物理的仕組みです。

MDCの掲げる「アジアで最も創造的なビジネス街」の歩行空間を協議会で検討するにあたり、これまでの明治通りの歴史や現状の調査を行いました。かつては路面電車が走り、後に天神地下街や地下鉄が整備され、交差点には腰掛けを兼ねた車止めが配置された歴史、幾つもの樹種が混在している植樹帯、タイル舗装は後々同じ製品がないために部分的張り替えでパッチワークのようになっている現況など、何気なく歩いているだけでは見落としていることも数多く知りました。

課題も見えてきました。東西に伸びる明治通りで建物が高さ約100㍍になると、南からの直射光の変化や街路樹への影響はどうなのか。建て替える場所ごとに部分的に完成していく歩道にどんな材料を使うとよいか。さらに長期的に考えると、インフラ工事で舗装材が剥ぎ取られたあとの復旧で、新旧の違いが分かりにくい仕組みはないか。

その結果、仕上げ材に採用したのは「半たわみ性舗装」という、通常のアスファルトの凹凸にセメントミルクを浸透させる工法です。さらに表面を研ぎ出して平滑に仕上げたことで車椅子やキャスターへの振動が非常に少なく、音も驚くほど静かになりました。セメントミルクは3種類のグレーに着色し、舗装面を大小に分割しながら配置しました。将来舗装を一部撤去し同じ色に復元できなくても、それがデザインパターンの一部のように見えるようにという工夫です。

また、水にぬれると温度が数度下がる特殊なセメントミルク、アスファルトには地元・九州産の石を採用したのは現代的な選択といえるでしょう。この舗装の脇、車道側にも九州産の石と煉瓦を敷き込み、全体的にシックな「街の背景」を目指しました。

本来は切るべきではない街路樹も、やむを得ない場合は同じ本数の高木を植樹し、樹が十分に張っていけるよう地盤を改良した一方、低木は植えずに見通しを良くし「博多どんたく港まつり」などパレードの時に、通り全体に一体感が生まれるようにしました。控えめで、スッキリした角柱の街路灯の照明は、季節や時間帯によって明るさや色を変えられるように計画していましたが、これはまだ実現できていません。

一度に全部を完成できないため、その変化は気づきにくいかもしれませんが、こういう工夫を積み重ねたデザインは全国にも珍しい事例だと思います。遠い将来、750㍍の通りの両側に同じデザインが現れ、誰もが歩きやすい快適な天神のメインストリートとなる日が待ち遠しく思います。

松岡　恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

デザインで人と人をつなぐ　松岡恭子の一筆両断

熊本・百年の計～都市デザインの真髄～

熊本市で熊本駅と桜町という二つの街づくりプロジェクトが完成したので見学してきました。案内してくれたのは、熊本大学教授の田中智之さん。早稲田大学を出て熊本大学に赴任して来られた建築家です。30代で着任した直後から関わることになった熊本駅周辺の整備、そして、市民のための広場が生まれた桜町は、どちらも10年を超えるたゆまなき積み重ねの結晶だと大いに感銘を受けました。

都市空間を構成する要素にはさまざまな建築物に加え、道路や高架橋など土木構造物、また河川や公園、そして城跡のような歴史的場所などがあります。従って都市デザインは建築、土木、交通、インフラ、歴史など多岐にわたる分野を横断しつつ、さまざまな関係者と向き合いながら取り組む息の長い仕事になるのです。

今回の二つのプロジェクトはどちらも面的に広く、ある意味対照的な内容でした。熊本駅は繁華街から離れ山と川に挟まれた立地から、「公園のような駅をつくる」がテーマとなりました。東西2つの駅前広場のうち表となる東側には、市民の足である市電（路面電車）が寄り付いています。その電停に道を渡らず広場から直接アクセスできるようになっている珍しいシームレスデザイン。広場から伸びる市電の軌道は緑化され、まさに公園が線形に広がっていくかのようです。雨天でも、広場をぬれずに歩くためのシェルターは、薄い屋根と細い柱群が不思議なカーブを描きながら人々を導きます。交差点を横切る歩道橋は足元の構造物をできるだけコンパクトにし空間全体を分断しないように設計されており、その端部はこの広場に、もう一方は斜め向かいに開発された図書館やホールのある複合施設の低層部に連結。さらに、その先には坪井川と白川の歴史ある護岸や治水施設跡へとつながります。広場から東へと抜ける幹線道路の歩道もデザインを統一、その先に元々あった白川橋も景観に配慮して行政が白く塗り直してくれたそうです。周辺建物も含め、一歩一歩進めた16年のプロセスを経て、広場がハブとなって周囲へとしみだし広がっていく気持ちの良い「景」をつくっていったこと、これこそが都市デザインだと感服しました。

一方、街の中心に完成した「花畑広場」は幅27㍍、長さ230㍍という圧巻のスケールを持つプロムナードを中心とした広場です。かつては交通センターに面したバス通りで、さらに江戸時代に遡ると参勤交代の出発地だった広小路だったそうです。整備の末、交通センターは29の乗降バースを持つ日本最大級のバスターミナルとしてサクラマチクマモトという複合施設の1階に集約され、その横に歩行者のための大空間ができました。

こちらのテーマは「熊本城と庭つづき『まちの大広間』」。北側にある熊本城というシンボルへのダイナミックなつながりを目指した都市デザインです。広場には隣接する公園が二つあり、大楠が茂る花畑公園は藩主の屋敷があった歴史的な場所。対して南端にある緩やかに隆起した辛島公園には造形的な面白さがあります。

また、にぎわいあるアーケード街・新市街、そして下通りにも連結していて、イタリア・ミラノのドゥオーモとその前の広場、そしてガレリアの関係も彷彿とさせます。サクラマチクマモトには緑化テラスがひな壇のように上へと伸び、NHK熊本放送局など隣接する建物群の建て替えでも広場との接続が重視されています。

広場が親しまれている西洋とは異なり、日本人は広場の使い方に慣れていないとよく言われます。桜町では広場だけでなく周辺に多様な場が接続したたずむ場所がいろいろあり、細やかな仕掛けも隠れているので、多様な使い方が育まれていくことでしょう。都心の空間体験が格段に豊かになったという実感は、これから市民の心の中に大きくなっていくに違いありません。ちょうど5月22日まで開催中のニコライ・バーグマン氏監修の花博の会場になっているので訪れてみてはいかがでしょうか。

これら複雑な内容を持つプロジェクトに、田中さんに加え土木が専門の熊本大学准教授の星野裕司さんも参加し、二人の叡智が生かせたことが成功の鍵となりました。どちらのプロジェクトも一旦完成はしましたが、周辺の建て替えなどを取り込みつつ今後も成長していくことでしょう。

いくつもの構造物が時間差で作られていく大規模プロジェクトには、一貫したコンセプトを実現に導きつつ、派生していく周辺の計画に柔軟にそして丁寧に対応する継続的検討テーブルが必要です。どの都市にもお二人のような優れた方がおられるとは限りませんが、百年先まで社会基盤となる大型再開発の素晴らしい例として参考にしていただきたいと思います。

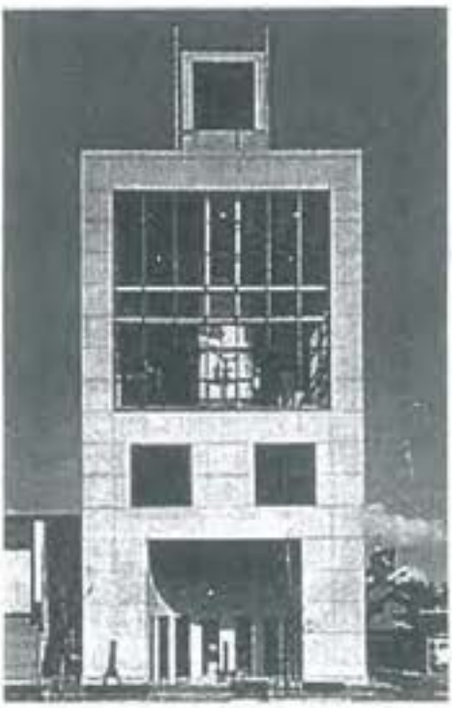
松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。One Kyushu ミュージアム総合プロデューサー。

デザインで人と人をつなぐ 松岡恭子の一筆両断

建築は文化、建築は社会資産

～NPO活動の10年

はじまりは2008年のある日、福岡市のホテルニューオータニ博多の近くを歩いているときでした。ふと目をやると、ある建物が解体中でした。それは「シティ情報ふくおか」を発行していたプランニング秀巧社の本社屋。設計は大分県が生んだ世界的建築家、磯崎新さん。1976年にオープンした5階建ての建物は決して大きなものではありませんでしたが、その斬新な空間は多様な文化的交流を地域にもたらしました。好奇心旺盛な人々が集い、演劇、美術、音楽に彩られた数多くのエピソードが宿りました。正面入り口の曲面の壁には8枚の鏡が貼られ、そのうちの2枚だけが扉というトリックがありました。最上階のクライアントルームの吹き抜けには鮮やかな色の螺旋階段、その奥に大きな彫刻のようなソファラウンジ。もし今訪れることができても、その空間に息をのむと思います。それがひっそりと街から消えようとしていることに衝撃を受けました。



解体前のプランニング秀巧社の本社屋（ダイヤモンド秀巧社口提供）

その解体を目にしてすぐ、市民向けの建築ツアーを企画することを思い立ちました。建物が失われてからでは遅い。存在している間にその魅力を紹介し、愛してもらう機会をつくらなくてはと考えたからです。設計者の紹介や発注者のエピソードなど人にまつわる話、建物の空間や造形、材料などハードに関する話などを、わかりやすく伝える楽しいツアーを通して建築ファンを増やしていこうと考えました。当時は東京電機大学の准教授をしていたので、地元の九州大学も交えてガイドブック製作からツアーガイドまで、建築を学ぶ若い学生たちが担当。2009年から毎年8月に、「MAFukuoka（Modern Architecture Tour in Fukuoka）福岡近現代建築ツアー」と題して開催しました。子供からお年寄りまで、福岡市民はもちろん、遠方からもたくさんの参加者を迎え、美術館、銀行本店、小学校、オフィスビルなどさまざまな建物を紹介し好評を博しました。今まで何気なく見ていた建物が説明を聞いてぐっと身近に感じたとか、外からは見ていたけど内部に初めて入ってその素晴らしさに驚いたといった声をたくさんいただきました。

2012年にはNPO法人「福岡建築ファウンデーション」を立ち上げ、継続していくこととしました。活動には建築の設計に携わる人たちだけでなく、グラフィックデザイナーや写真家、映画作家など多彩なメンバーが集まっています。建築には工学、歴史、芸術など実にたくさんの分野がつながっています。また、コンセプトを建物に結実するには、設計や建設技術はもちろん、インテリアや照明、サイン、庭園などにさまざまな専門家を要します。優れたプロジェクトは多彩なデザイナーが育つ場にもなるのです。そしてデザインは時代を映し出す鏡であり、一つ一つが都市空間や街並みを形成する要素でもあります。その姿は万人の目に触れる公共的な存在で、市民の心のよりどころや観光の対象となる場合もあります。まさにまちづくりの基盤になる存在なのです。だから私たちNPOのメンバーは「建築は文化、建築は社会資産」という想いを胸に、一般市民向けの建築ツアーやサロンと呼ぶ講演会、写真展や子供向けデザインワークショップなどを行ってきました。今年秋には満10年を迎えます。

これまでの活動が評価され、今年福岡市都市景観賞の活動部門賞をいただきました。まだまだ認知は低くささやかな活動ですが、10年の節目を迎えメンバーは想いを新たに、もっと多くの方に建築の面白さや魅力を伝えたいと企画を考えています。優先的なお申し込みなどの特典を用意して、活動を応援してくださる賛助会員を常に募集しています。今月20日には大阪から橋爪紳也先生を迎え、この春閉会したドバイ万博と2025年開催予定の大阪関西万博の話をしていただきます。1970年の大阪万博では未来の生活を支える技術が数多く発表されましたが、21世紀の万博は一体どんな未来を私たちに見せてくれるのでしょうか。オンラインですのでどこからでもご参加いただけます。また、30日には九州産業大学の大橋アリーナ2020の建築ツアーも行います。どちらもお申し込みは、福岡建築ファウンデーションのホームページ（https://www.jafnpo.jp/）からどうぞ。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。One Kyushu ミュージアム総合プロデューサー。

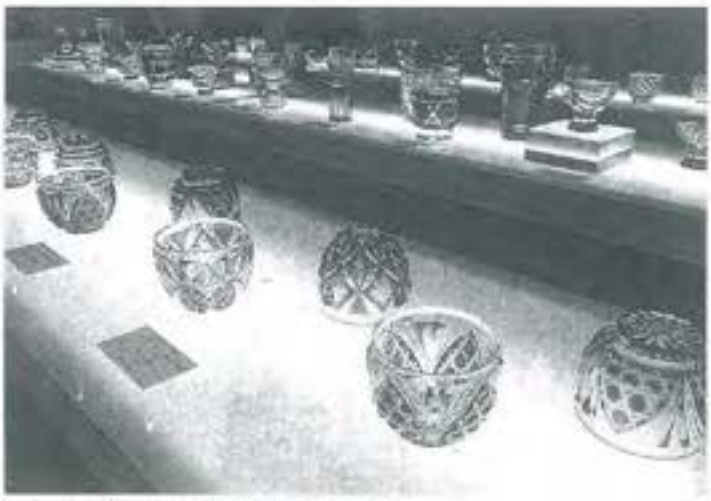
デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

街の時間を文化で楽しく！

福岡・天神での社会実験

このコラムで何度かご紹介した社会実験「One Kyushu ミュージアム」。9月26日より始まる3回目は、ライブラリー（図書館）が加わります。きっかけはドキュメンタリー映画「ニューヨーク公共図書館」を見たことでした。私は以前、米ニューヨークに住んでいたので、マンハッタンの中心にあるこの巨大な図書館のことは知っていましたが、あちこちに分館があり実にさまざまな取り組みが行われていることを知らず、驚愕しました。学術的調査や研究の支援はもとより、放課後の子供の勉強、点字の読み方、就労、高齢者の健康維持など多彩な支援活動が展開され、高名な知識人のトークイベントも頻繁に行われています。「図書館は本の倉庫ではない」という言葉が非常に印象的でした。NPOが運営していて、財源はニューヨーク市だけでなく民間からの寄付も相当あるようです。「公立」ではなく「公共」を名に冠するのはそういうことなのか、と膝を打つ思いでした。



昨年の「One Kyushu ミュージアム」の会場風景。好評だった薩摩切子は今年も展示される　＝令和3年10月

都心の空き店舗や老舗ホテルのロビーなど複数の場所を借りて、九州が誇る工芸や産品を紹介しまち歩きを促進、福岡市の都心を九州の文化発信地にしてみる私たちの社会実験は、そもそも街のにぎわいは消費と就労だけには頼れないという危機感から始まりました。コロナ禍が来て約3年がたち、在宅やリモートワークなど急激に起きた変化が、もう日常に定着してきた気がします。一方、再開発事業の天神ビッグバンが進むなか、建物があちこちで解体されており、天神への流入人口が減っているといわれます。このままだと都心に来る、滞在する楽しい記憶が市民の心から遠ざかるのではないかと危惧しています。

「街の時間を文化で楽しく！」が今年のテーマ。会場は3カ所です。西鉄グランドホテルのロビーでは、波佐見焼、高取焼、薩摩切子、有田焼を順に展示していきます。私がセレクトした工芸品を販売するミュージアムショップは商業施設「VIORO（ヴィオロ）」2階。そしてソラリアプラザ1階に設けるライブラリーの各ブースには、音楽、アート、食など多彩な専門家に「館長」を依頼し、都市をテーマに蔵書から本を選んでもらいました。それらをどなたでも自由に閲覧していただけるのが、今回のライブラリー。仮設の「天神公共図書館」となります。例えば福岡の街の歴史を音楽史でたどる本とか、街をテーマにしたたくさんの絵本とか、私も見たことのない本が続々と集まってきています。館長と私がお話しするトークイベントも計10回開催しますので、ぜひお越しください。

またVIORO2階では、九州大学の黒瀬武史教授のもとで都市設計を専攻する学生たちが構想する、天神の今と未来を模型で展示します。天神ビッグバンの模型もあわせて披露される予定ですので、多くの市民に未来の天神を考える機会にしていただきたいと思います。昨年同様、九州の4つのワイナリー、安心院、都農、菊鹿、五島からの4種の飲み比べやグラス売りしていただくお店も3カ所ありますし、ジュンク堂書店福岡店では関連図書を販売していただけます。まさに「まちぐるみ」の16日間（ライブラリーは7日間）です。

都心には心豊かになる交流を生む公共の場が必要だ、という一心で、短期ではありますがミュージアムとライブラリーを生み出す企画を考えました。街をより良くしていくには行政や開発事業者任せではなく、市民が自分ごととして声を発していくことも大切です。この社会実験の来訪者にはアンケートに答えていただいて、今後のまちづくりの参考になる資料をとりまとめたいと考えています。天神だけでなく他の街にも役立ててもらいたいと思っていますので、福岡市民、そして九州各地からのご参加をお待ちしています。

ところで、超高層ビルが林立するニューヨーク・ミッドタウンの公立図書館の隣には、さまざまな催しが行われ愛される公園、ブライアント・パークがあります。ソラリアプラザに隣接する警固公園なども、多様な使い方が発展し、天神の魅力の一つになっていくといいなと思います。これから生まれる天神ビッグバンの新しいビルにも、角地に広場がつくられていきます。それに加えて屋内にも公共空間が生み出され、九州の文化に触れられるなど一味違う場となり、相互に魅力を高めあう街になってほしいと願います。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。One Kyushu ミュージアム総合プロデューサー。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

「オープンハウスネットワークジャパン」

自分の街への誇りを育む

自分の街への愛がすごいなあ、とても及ばないなあ、と思わされました。10月に大阪で開催された「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」。「生きた」の名の通り大阪市民の営みを支えてきた100を超える建物を無料公開し、2日間で約5万人もの参加者を迎えたこのイベントは、今年9回目となり、すっかり大阪の秋の恒例となりました。

図書館や公会堂など公共の建物、一族が百年間維持してきた自社ビル、レトロな雰囲気満載のテナントビルなど用途もさまざまです。また昭和の雰囲気が色濃い喫茶店や焼肉店など、歴史的面白さがあるインテリア空間も紹介されています。さらに建築設計事務所内部なども公開され、建物をつくる側の仕事を垣間見るのも特別な経験です。事前に出版されたガイドブックを書店で購入し、それを手にまち歩きを楽しむ人々の姿が街中にあふれていました。

何より印象的だったのは、建物所有者がこの「自慢する機会」を楽しみにしていることでした。平成25年から3年間は大阪市の事業として開催されましたが、その後は大学の専門家や建設会社、設計事務所からなる産官学の実行委員会が運営しています。そのプロたちが、自分が所有する建物を価値あるものと選んでくれたことを喜び、市民に気前よく扉を開け、参加者とのやり取りを楽しんでいます。その交流の中で、双方に大阪の街への誇りが大いに栄えた20世紀初頭、この街で文化が豊かに花開き、当時つくられた建築や橋にも華やかな意匠が施されました。太平洋戦争下の空襲による被害が大きかったにも関わらず、これほど戦前の建物が維持されているのは大阪の歴史の灯を絶やさないという「想い」の表れだと思います。

「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」で公開された「生駒ビルヂング」（大阪市中央区）

建築を市民に楽しんでもらうイベントがこの10年に日本のあちこちで誕生しましたが、どれもアメリカの「シカゴ建築センター」とイギリスの「オープンハウスロンドン」を参考にしています。シカゴは年間を通して建築ツアーやデザインワークショップなどを開催し、ロンドンは秋の数日間に集中して多くの建物を公開しています。どちらも建築を通して街への誇りを育むにとどまらず、観光の側面からも大きなうねりとなっています。

オープンハウスはロンドンから世界各地に広がり、ヨーロッパの各都市、アメリカ、オーストラリア、そしてアジアではソウルや台北と、50の団体が仲間入りして年間100万人を動員する規模へと成長しました。日本では大阪だけがこの世界的ネットワークに登録されています。

私が活動する「NPO法人福岡建築ファウンデーション（FAF）」は今年満10年を迎えました。地域の魅力ある建築の情報を発信する取り組みは各地で広がり、「東京建築アクセスポイント」「オープンナガヤ大阪」「ひろしまたてものがたりフェスタ」はすでに回を重ね、「京都モダン建築祭」も今年誕生しました。

この秋、東京、大阪、広島、福岡の5つの団体が「オープンハウスネットワークジャパン」と称して連携を始めました。活動内容の共有や各地のイベントの情報発信も相互に行っていきます。FAFのメール会員に登録してもらえると他団体の開催情報も届きますので、今後の旅のきっかけにしていただけると幸いです。

今年出版された「山手線の名建築さんぽ」は山手線の全30駅の周辺の建物を紹介する素敵なガイドブックです。イベントがなくてもこんな本を手にすれば、街歩きが楽しくなること間違いなしです。やはり建築の魅力は実際に訪れてみてこそ、ですから。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和4年6月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

産経新聞
山口）　令和5年（2023年）3月14日　火曜日　産　経

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

日本におけるイタリアの都市と建築に関する研究の第一人者、陣内秀信氏の名著「都市のルネサンス―イタリア社会の底力」ではその半分がペネチアについて語られています。地中に無数の木杭を打ち込んでその上に石を積み、さらにその上に建物を構築していった水の都に、一時は20万人が住んだそうです。複雑に発達した大小の運河、歩道、トンネル、広場、橋からなる移動ネットワークと、そこに少しでも快適な生活空間を構築しようとする建築の工夫を知ることができます。

運河が建物の表側だった時代から、その裏側に道や広場が生まれ、表裏をつなぐ極細の通路やトンネルが迷路のように延びていった街。人が健康に暮らすには日差しと新鮮な空気が欠かせませんが、高密度なペネチアに建ち並ぶ貴族の邸宅の多くは、採光や換気のためにコルテと呼ばれる中庭を内包しているそうです。隙間なく並ぶ建物面からはわかりませんが、コルテに外部階段を設置するなど立体パズルのように空間を組み合わせた構成が、長い時間を経て充実していきました。

福岡市東区千早の「なみきスクエア」
©Yousuke　Harigane

呼吸する風景　なみきスクエア

一方、新しく整備された街ではまっすぐな道路に沿ってきっちりと区画された土地にマンションや戸建てが整然と並ぶ風景がおなじみです。区画整理された福岡市東区千早の駅周辺は大型マンションが建ち、国道沿いにはロードサイド商業施設が並び、歴史性やよりどころのない「どこでもないどこか」のように見受けられます。しかし、その風景にくさびを打ち込もうとした、2つのチャレンジングな空間をご紹介したいと思います。

「ガーデンズ千早」は駅前の新しい建物群と、その反対側の年数のたった団地群に挟まれた商業施設ですが、よくある駐車場と大型建物にとどまらず、人工芝を敷き誰でもたたずむことができる「ちはや公園」を民間で提供しています。その周囲にカフェやレストランを点在させ、プロ用厨房を貸し出す仕組みもあり、さまざまなイベントも仕掛けながら地域住民の居場所を作る試行錯誤がなされています。新しい街の歩道や駅前広場は十分に広くても、人々の生活に悦びを与えるような「場」ではなく、どこか身の置きどころのない空虚感があるものです。密度が高く息の詰まるようなペネチアではカンポ（広場）が不可欠なように、寝転がったりベンチに座って本を読んだりできるこの公園は心の深呼吸をさせてくれます。

「なみきスクエア」は福岡市が整備した図書館、多目的ホール、貸会議室などからなる公共施設で、西鉄千早駅の正面に伸びる並木広場に隣接しています。大きなガラス面の前にスレンダーなコンクリートの壁が列柱のように並び、二層の空間を支えています。その間から緑化された屋根が透けて見え、どこまでが内部でどこからが外部なのかわからない不思議な姿です。

入り口は四方に設けられどこからでも入りやすく、入ってみるとまた街路に出たような、まるで建物の中に「内なる外」があるかのような風通しの良い空間です。吹き抜けの階段をのぼり2階にたどり着けば、そこにも大小の広場があり回遊できます。そしてその周りのさまざまな部屋もガラスで仕切られ、中の様子がわかるようになっています。よくある、廊下の両側に部屋が並ぶ施設とはまったく違います。さらに建物の外にある屋上の植物や外の並木の枝葉があちこちから短間見えて閉塞感がまったくありません。内部と外部が立体的に組み合わさったひとつの町のような空間は管理されている窮屈さがなく、来訪者が思い思いに時間を過ごせる「呼吸しやすい場」を提供しています。

この施設には輻射式冷暖房という面白い空調システムが採用されているので見てみてください。温めた、あるいは冷やした風を吹き出すのではなく、金属パネルに温水や冷水を通す仕組みです。細い鉄の板が束ねられたような軽やかなパネルは、壁柱と同じプロポーションを持つようデザインされていて空間と一体化しています。

人間にとっての公共空間の快適性とは光や空気や緑に加え、人の気配を感じつつも適度な距離を保てる居場所かどうかのように思います。そして人間には、それを感知するアンテナが備わっていて感度高く働いている気がします。建築デザインや都市デザインには、そのアンテナが反応する空間をつくる力が必要なのです。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和4年6月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

産経新聞
令和5年（2023年）6月20日　火曜日

デザインで人と人をつなぐ
松岡恭子の一筆両断

私がデザインした集合住宅

街の魅力づくりへ

私は戸建て住宅の設計は1つしか経験がないのですが、集合住宅は国内外でたくさん手掛けてきました。斬新なデザインだと言われることも多いですが「つくって終わり」ではなく、福岡にあるものについては現在私が社長を務める不動産会社が建物管理をしているため、使われ始めたあとのフィードバックを得て次の仕事にいかせているのは幸運です。そのうちの3つをご紹介します。

「TERZETTO」（テルツェット）の敷地は福岡市の港湾地区にあり、以前は発注者である造船会社の倉庫がありました。典型的住宅地とは言い難い環境でしたが、目の前には漁船が並ぶ港が広がり、近くに銀行の支店や飲食店もそろっていて、SOHO（オフィスを兼ねた住まい）にぴったりだと考えました。また高さ制限の緩い地域であることに目をつけ、一層分を通常よりずっと高くして開放感を与え、港を見渡せる空間を提案しました。

イタリア語で三部合奏を意味するTERZETTOの名の通り、低層はロフト付き、中層は2層のメゾネット、最上階は360度の視界を楽しめるペントハウス、という異なる性格が3層に重なり、どの住戸からも広い開口部から港が一望できるだけでなく、海を見ながらお風呂に入れる、テラスで食事ができるといった工夫をタイプごとにちりばめました。完成後、このエリアに集合住宅が増えていったのは、この建物が誘引したのかなと思っています。

「Carré Spiral」（カレスピラル）は福岡市姪浜駅南の区画整理された新しい町に建てたプロジェクト。寄る辺となる町の文脈がなく将来が読みにくい敷地でした。そのため採光や換気など居住性を確保するために、自律的な空間構成が必要だと考えました。そこで14階建のボリュームに4つの吹き抜けを挿入し、屋根のないその吹き抜けが運ぶ空気や日光を、窓を設けにくい建物中心の「芯側」部分にまで届ける構成を考えました。外周のみの呼吸に頼らないこの仕組みは密集する市街地で有効で、さらに吹き抜けが暮らしの気配を上下階に運ぶという現象も生みました。

「カレ スピラル」
©Yousuke Hatigame

低層部は単身用、中層部以上はファミリー向けの住まいをつくり総戸数103戸に44タイプを盛り込んだのは、いろいろな世帯が混在するようにして、ひとつの町のような環境をつくることを大切にした結果です。四角い建物の中に吹き抜けが「樹の幹」のように存在し、その周りを枝や葉が取り巻いているイメージから、「四角い螺旋」を意味する名前をつけました。

「Duo East & West」（デュオ イースト アンド ウエスト）は福岡市西新の商店街に面した敷地を、分割し相続した姉妹から依頼された仕事でした。2棟を建てながらもひとつのプロジェクトと見え、周辺の建物にできるだけ通風や日照を提供し、自然の少ない商店街に緑を提供するように配慮しました。

平面は南北に長い3つの住戸を持ち、両脇の住戸は吹き抜けを内蔵し光を潤沢に得ています。北側は玄関とリビングルーム、南側は1日中日光が入るベッドルーム、そして2つを結ぶ吹き抜け横の幅広の通路は、書斎やギャラリーなど住み手が自由に想像して使える空間です。福岡の夏は北側の海から風が吹くため、南北の窓を開放できるようにしました。ペントハウスは100平米のテラスを持ち、南側の山景と北側の海景を楽しめる特別な空間です。

どの建物においても敷地の現況はもちろんですが、時間をさかのぼって歴史や変化を調べることで示唆を得たり、未来を含めた長い時間軸を認識することを大事にしています。また住まいは日常生活の基盤なので、個性の異なる住み手に対し多様な空間を提供することも大切にしてきました。私が日本で手がけた集合住宅はすべて賃貸なので、一時期の生活の受け皿としてなら新しい空間でも需要はあると思ったのです。

そして多様な住まいが豊富にあることは外からの人も呼び込む魅力的な都市の必要条件ではないか、とも考えてきました。よく考えられた建築はそれ自体が快適であるだけでなく、その立地の個性を読み取った結果であり、さらに増幅する力を持ちます。街がもっと魅力的になる一助を担いたいという想いは建築家として自然なもので、集合住宅の設計はその想いが詰まったもののひとつです。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和4年6月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

公園の効用　ニューヨーク・ハイライン

この夏、コロナ禍を経たあとのニューヨークを訪ねました。聞いていた通り、街角で見かけた不動産情報は「もうこの街には住めないな」と嘆息する金額でした。かつてアートギャラリーがあふれていた地区ソーホーから続々とギャラリーが移転してしまい、スーパーブランドのショップが増え商業化したのはしばらく前の話でしたが、今回は空き店舗も散見されました。家賃が高騰し、コロナ禍でネットでの購買が加速した結果、店舗の存立が難しくなったのを実感しました。

かつてソーホーがアートの街になったのは、家賃の安い倉庫街にアーティストが住み着いたのがきっかけでした。天井が高く仕切り壁がない空間は、創作活動にうってつけでした。そうして1階にはアートギャラリーが並び始め、個性的な店舗や工房も増えて散策が楽しい街になりましたが、今はもう文化的・芸術的な香りがうせてしまいました。ギャラリーの多くが移転したのは家賃の安いチェルシーという地区でした。

貨物線の高架橋が公園に生まれ変わった「ハイライン」

そのチェルシーに生まれた大人気の公園が、ハドソン川にほど近い「ハイライン」です。かつては貨物鉄道の高架橋でしたが、1980年代に運行が廃止されて以来放置され、周辺の不動産所有者は撤去を主張していました。そこに2人の若者が現れ、雑草生え放題の空中廃墟が面白いと主張し始めました。

彼らは99年に「フレンズ　オブ　ハイライン」という非営利団体を立ち上げて保存運動を始め、それに市長が賛同し、公園に生まれ変わらせるプロジェクトが始動しました。2006年から工事が始まり、数年ごとに延長しながら南北の全長2・3キロメートルの緑化空間が生まれたのです。

ハドソン川に浮かぶ人工島「リトルアイランド」（いずれも松岡恭子撮影）

これを成り立たせたのは、高架橋を公園と認定することと、その周囲の都市計画ゾーニングの変更でした。鉄道会社が持て余していた高架橋を市の所有に移行し（その代わりに債務の一部が帳消しになりました）、市は公園にすることができました。後者は周辺の容積率や高さ制限の緩和措置のことで、高架橋撤去を求めていた人びとにとっても所有する不動産の価値が高まるため歓迎されました。そして市にとっては、周辺の開発が進めば税収も増すはずです。まさに「win―win」の構図ができあがったのでした。

リニューアルのデザインにはコンペで建築家やランドスケープデザイナーが選ばれ、多様な植物が繁る公園となりました。もともと高架橋は物流の利便性から、街区の中を貫通し倉庫群の間を縫うように設けられていました。公園となったあと両脇に生まれた建物群はハイラインに接するように建っていて、その緑を大いに楽しむ構造になっています。南端はアッパーイーストサイドから移転してきた「ホイットニー美術館」、北端はかつて貨物ヤードだった広大な敷地を大再開発した「ハドソンヤード」の広場に着地しています。

さらにホイットニー美術館の西側、ハドソン川の上には「リトルアイランド」が完成しました。川の上に浮かぶ小さな人工島ですが、起伏ある土壌の上に芝生や樹木が植えられ、屋外劇場もある公園です。もとは桟橋でしたが、13年にハリケーンで大きな損傷を受けたのを機に、ある実業家の財力で21年に公園化されました。決して広い場所ではありませんが、年間100万人の来場があったそうです。

どちらの公園もアートを通して人間同士の接点をつくるプログラムも工夫するなど、ハードのデザインが面白いだけでなくコンテンツ充実への試行が重ねられています。人々が来たくなる公共的な場所をつくることによって、結果的に周辺の価値が上がっていくプロセスは、遠回りなように見えても確実な方法なのかもしれないと思わされました。福岡市東区の九州大学箱崎キャンパスの跡地計画にも参考になると思います。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和4年6月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

令和６年１月23日火曜日　産経新聞

デザインで人と人をつなぐ

松岡恭子の一筆両断

創造的な原点回帰

昨秋改修された「ホテル　イルパラッツォ」

伝説のホテルが息を吹き返しました。「ＨＯＴＥＬ　ＩＬ　ＰＡＬＡＺＺＯ」（ホテル　イルパラッツォ、福岡市中央区春吉）は日本を代表するインテリアデザイナーだった内田繁氏が指揮をとり、アルド・ロッシ氏に建築設計を依頼して１９８９年に完成しました。ロゴデザインにグラフィックデザイナー田中一光氏も参加。この３人は輝かしい業績を残した歴史的な存在です。

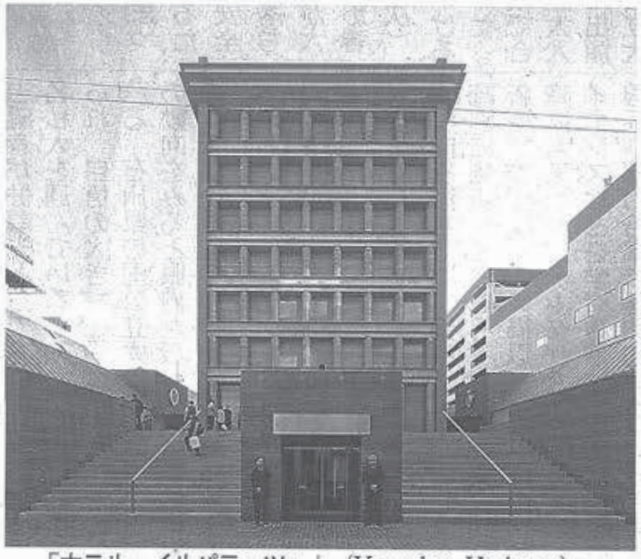
ホテルの姿はとてもシンボリックです。落日の色をまとう大理石の円柱と、青緑色の鉄の水平ラインが積み上げられた建物正面には窓がありません。その棟は基壇の上に載っていて、基壇の中央には青く塗られた地下への入り口、その左右に２階テラスへの大階段が設けられました。静謐さが漂うたたずまいは遺跡のようでさえあります。両脇には低層の棟が控え、その横の路地空間も迷い込んでしまった夢の残像のような場所。

建築家アルド・ロッシ氏は１９３１年にイタリアに生まれ、作品のほとんどはヨーロッパにありますが、日本にもいくつかの仕事を残しました。その最初であり、最も彼らしい建築がこの建物だと思います。１９７０年代から80年代の世界の建築界に、彼の描くドローイングと著作は強い影響を与えました。「たまたま建築家になった詩人」とある建築批評家が言ったとも伝わります。三角柱、円錐、立方体など抽象的な形態が組み合わさっていたり、それらに深い陰影が加えられたうえに同じ形の窓がくり返しいくつも描き込まれていたり、プロポーションが古典様式から逸脱して幾何学的純粋性を帯びていたり、そのドローイングから私は「永遠」「時の停止」「不在」「記憶」などの言葉を思い浮かべます。ローマ時代にさかのぼる２千年の間にじわじわと朽ちていくおびただしい歴史的事物に囲まれ育まれた、イタリア人ならではの鋭い美意識なのではないかと思えます。

彼がこの仕事に取り組む際に現地を訪れ丁寧に周辺環境を読み込み、次の来日時に持参したドローイングには、敷地を超えて、近くを流れる那珂川に沿った景観や街への広がりが描かれていました。建物単体ではなく都市から考察する建築の重要性を語っていた、まさにその姿勢を示すものだと言えます。歩行者をたくさん描き込んだ小細工で「にぎわい」を演出する、よくある完成予想図とはまったく異なります。30年以上経ってもこの建築が放つ異彩はまったく褪せず、都市に及ぼすその存在の力強さが胸を打つのは、時間に消費されない彼の建築思想が幸いにも具現化されていたからです。

ホテルが建てられた春吉は当時、市民にとってはあまり印象の良くない歓楽街でした。インテリアデザインだけでなく、構想全体のディレクターを兼任した内田氏はこのプロジェクトを、街が面的に変貌するための引き金ととらえたようです。そう聞くと、ロッシ氏に参画を依頼したのも納得がいきます。とかくクリエイターはその対象領域を広げたいものですし、バブルに沸いた当時は工業デザイナーにさえ建築を描かせる傾向があったので、内田氏が全てを手掛けるという選択肢もあったのかもしれません。しかし彼はそうせず、１人で「完結する」世界よりもクリエイター同士が「響き合う」世界を目指したのだと解釈します。４つ設けられたバーのデザインにも倉俣史郎氏など国内外の著名なデザイナーが招かれ、世界に二つとない空間がこのホテルの奥行きを深めていました。

30年の間に所有者変更によりインテリア空間が変わってしまった時期もありましたが、現オーナーがこのホテルを入手し改修を行うにあたって、内田氏の精神をいまも受け継ぐ内田デザイン研究所に設計を依頼しました。「原点回帰」を掲げ、当時の思想を丁寧に読み込んで再デザインを施し、２０２３年秋に開業を遂げました。２階にあったフロントやロビーを地下へ、２階はテラスつきの客室へ、と現代の使い方に合うように配置を変更しながらも一つ一つの場所に歴史をバトンタッチさせるデザインは、決して「リバイバル」ではなく「創造的な」仕事です。こんなかたちで建築が在り続ける価値を、多くの市民に知ってほしいと思います。２人が残した大きなオブジェが据えられた地下のラウンジでは宿泊者でなくても食事を楽しめますから。



「ホテル　イルパラッツォ」（Yousuke　Harigane）

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。ＮＰＯ法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和４年６月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

地域ニュース

デザインで人と人をつなぐ 松岡恭子の一筆両断

由布院「STAY玉の湯」

コロナ禍経て保養への回帰

旅は健康な人だけのものでしょうか。コロナ禍で不要不急とされて初めて分かった旅の重み。単なる娯楽ではない、心と身体が得る特別な開放感が人間には大切な栄養なのだと痛感させられました。しかし身体が不自由な方や高齢の方は旅に出たくても、慌ただしい移動や慣れない空間での寝起きを負担と感じ、躊躇することも多いでしょう。そんな方にも楽しんでいただける、今年の初めにオープンした宿泊施設をご紹介します。

大分県の湯布院は人気の温泉の町ですが、歓楽街のにぎやかさではなく虫の音を楽しむような郷びた環境の維持を掲げ、近くにゴルフ場の計画が持ちあがった際は自然を守るため反対し、「ゆふいん音楽祭」などの文化イベントを立ち上げ粘り強く継続するなど、その気骨ある取り組みが日本のまちづくりのモデルの一つとなってきました。背景は、ちょうど百年前の大正13（1924）年、林学者・本多清六が「由布院温泉発展策」と題した講演で、湯布院はその自然を大切に守りつつドイツの温泉保養地を目指せと語ったことだと聞きます。

町を代表する旅館のひとつ、「由布院玉の湯」社長の桑野和泉さんと、そのご主人で医師の桑野慎一郎さんが相談があると私のところに来られたのはコロナ禍の令和3年暮れでした。旅ができない日が続き、誰も訪れない町と泊まり客のない宿を前に2人で未来を考えた結果、本来目指すべき姿へ原点回帰するプロジェクトを決断、その設計を私に委ねてくださいました。それは、旅人が長期間ゆっくりと滞在して湯治するための保養施設をつくるというものでした。

選んだ場所は玉の湯から至近距離で、桑野医師のクリニックとも目と鼻の先。つまり、健康不安がある方や高齢の宿泊者にも、必要なら医療やサポートを提供できる施設をつくる構想でした。

国内外の多くの場所を旅してきた私にも、非日常を演出したリゾート空間の経験はあれど、こういうコンセプトは初めてで、慎重に、そして想像力を働かせながら設計は進みました。敷地は民家の多い静かな環境なので、平屋全体を分割し、小さな家たちが寄り添って建つ、集落のようなたたずまいを目指しました。また自然を大切にしてきた町にふさわしく、庭をテーマのひとつに据え、湯布院の自然につながる樹々や花々をたくさん植えました。気ままに外出できない滞在者にも日々の楽しみになるはずです。さらにその庭を、街並みの一部として周囲からも楽しんでもらえるよう半分開放するつくりにしました。保養の町としての由布院の、今後の景観づくりの参考になればと考えています。

室内空間に求められるのは、じっくりひっそり、まるで暮らしているように自分と向き合い、地域の気配を感じながら、人として原点に戻る場所だと思いました。全てのお部屋には小さな庭があり、そこに面してサンルームを設けました。大きな窓から庭を眺めて空を仰ぐ、外と内の中間のような空間で、部屋にいる時間が長い方もここに身を置けば開放感を感じていただけます。またサンルームの空気層が断熱効果を持つので、その奥にあるベッドルームを暖かく保ちやすくなります。ベッドから由布岳の頂を眺められる角度や位置、天井には照明を設置せず壁からの間接照明だけにする、といったデザインも長くベッドに横たわる方に快適にという工夫です。

緑に囲まれた共用のラウンジや大浴場のデザインでも、自宅の延長のようにリラックスして過ごせる空気感を大切にしました。朝食以外の食事の提供はありませんが、町の住民になった気分を楽しんでもらおうと、部屋には小さなキッチンを設けました。本館のレストランにお弁当を依頼したり、近隣の飲食店に出掛けたりも自由です。

大掛かりな振る舞いを避けたデザインには、非日常ではなく「湯布院での日常」の記憶が残るようにという思いを込めています。使い慣れたブランドの、おろしたてのタオルのような肌触りとも言いましょうか。「滞在」を意味するSTAYをこの建物の名称にしたのも、その一環です。健やかな方はもちろん、介護士や看護師のサポートが欲しい方も長期滞在できる場所づくり、保養への取り組みが、玉の湯だけでなく湯布院全体に広まっていくことを桑野和泉さんは夢見ておられます。私は彼女から、コロナ禍を経て立ち上がり、本来ある自然や資源を改めて大切にし、また育みながら次世代に手渡そうとする強い意志を感じるのです。

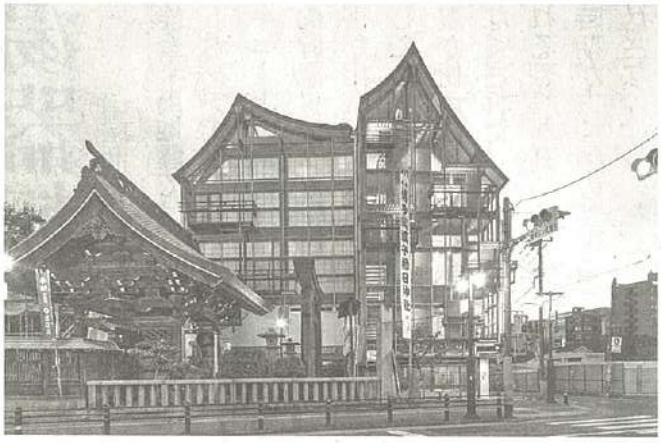
大分・湯布院に完成した「STAY玉の湯」（養田成之助氏撮影）

松岡恭子（まつおか・きょうこ） 昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和4年6月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。

デザインで人と人をつなぐ 松岡恭子の一筆両断

伝統工芸と現代建築

博多・櫛田神社に隣接する「灯明殿」



博多の総鎮守である櫛田神社に隣接する「灯明殿」＝福岡市博多区

建築家と建築士はどう違うの？　と聞かれることがあります。はっきりした定義はないものの、建築士はあくまで資格所有者を意味し、建築家は仕事への精神性を呼ぶと私は思っています。用途や敷地の意味、依頼主の想いを考え抜き、空間を描き、関係者に耳を傾け協力を得ながらコンセプトを守り、建物を完成に導くのが建築家です。いかに考えることをやめないか、最後まで考え続けることができるかを自分に課すのが建築家の共通点だと思います。

福岡市博多区にある「宮前迎賓館灯明殿」は会食や結婚式、会合など集いの場所として平成4年末に完成しました。敷地の西側は古来は海、中世には貿易港だった歴史ある場所です。隣接する櫛田神社は博多の総鎮守とされ、全国に知られる祭り、博多祇園山笠はこの神社の氏子の奉納神事でもあります。新たに建物を設計するのは、地元の人にとっては腰が引けてしまうほどの敷地です。

設計者は福岡県生まれの高木正三郎氏。易きに流れた結果現代人が失ってきた環境を凝視し、漆喰や木など自然素材と日本の技を用いて現代の空間を再構築しようと挑戦を続ける建築家です。この建物の外観が与える強烈な印象は、伝統建築を思わせる反りの効いた2つの屋根が、背の高いガラスの箱の上に持ち上げられ、宙に浮いている姿によるものです。その屋根は神社の北神門と呼応するかたちであり、神社と対峙するのではなくその景観を拡張しているように感じられます。またガラスの箱は伝統的建築の姿とはかけ離れているように見えても、その背後に透ける、内部空間全体を包み込む障子群が日本建築の手触りを視覚的に伝えているので違和感はありません。日が暮れるとその障子が、内包する柔らかな光を周囲に発し、建物全体が大きな灯明、神社への献灯となるというコンセプトです。

内部には会合ができる大小4つの空間があり、それらの部屋はもちろん、廊下やエレベーターホールなど移動空間にも多様な建築の技が埋め込まれています。大工、建具、左官の仕事が空間の骨格をつくり、組子や鉄工が細部を華やかに彩り、それらが融合し視覚化した寿ぎが晴れやかに来訪者を迎え入れます。ハイライトはやはり前述した障子です。なじみ深い建具でありながら、これほど広い面をなした姿は誰も見たことがないはずです。その障子は太鼓張りと呼ぶ、桟の両面に和紙を張る工法でつくられています。そのため一番外部側にあるガラス面と、その内側にある障子の間にまず第一の空気層ができ、つぎに両面の和紙に挟まれた障子の内部が第二の空気層になり、室内の断熱効果が上がる工夫です。また、内部からも外部からも桟が見えない、という姿も狙いだったのかもしれません。最も大きな部屋は披露宴に使われることが多いと思いますが、障子を通して届く日光が柔らかく部屋全体に行きわたり、繊細な千本格子と組子が目を楽しませ、日本ならではの目出度さに包まれる気がします。

まるで伝統技法のミュージアムのような建物ですが、博物館のように陳列するのではなく、また寺社仏閣建築とも異なり、伝統とは実は私たちの日々の暮らしにもっと取り入れることが可能なのではないかと思わせ、親しみを誘います。さまざまな材料や技をひとつの現代建築にまとめ上げるにはなかなかの力量とエネルギーを要し、数年に及ぶ仕事の期間に、設計者はこのプロジェクトのことを一日たりとも考えない日はなかったと想像します。そういう思考の積層に厚みがある建築は、仮にとてもシンプルに見えるものであったとしても、多くを語りかけてくるものです。街の大切な場所の一角に、大きな熱量を投じられた建築が現れたことを一市民としてもよかったと思うのです。実際に体験していただきたいと、来月は「NPO法人福岡建築ファウンデーション」で建築ツアーを開催します。

松岡恭子（まつおか・きょうこ）　昭和39年福岡市生まれ。福岡県立修猷館高校、九州大学工学部卒。東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修士課程修了。建築家。設計事務所スピングラス・アーキテクツ代表取締役および総合不動産会社、大央の代表取締役社長。NPO法人福岡建築ファウンデーション理事長も務め、建築の面白さを市民に伝えている。令和4年6月から一般社団法人都心空間交流デザイン代表理事。